
眠れる竜の寓話

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れる竜の寓話

【Nコード】

N2337S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

竜の姿と人間の姿を持つ竜人達が済む竜の谷。現王赤妃が深い眠りに就いたことで谷は次の王を選定するために動き始めた。そんな選定とは全く関係のないクウルは、領地内で重傷を負った青年を拾った。目覚めた彼は名前も何も覚えていないと言い……。記憶喪失の青年と、竜になることが出来ない少年の物語（重複投稿）

序章

雷の音が鳴り響く上空で、二つの巨大な影が絡み合うようにぶつかり合っていた。

やがて片方が雨雲を切り裂いて落ちてくる。

それは四枚の翼を持つ白茶色の竜だった。四本しかない前足の爪は鮮血の色に染まっている。

回転して落ちながら、彼は人の形へと姿を変える。

腹部にはべったりと夥しい血が付いている。彼は固く目を閉じそのまま森の中へと落ちるように消えた。

その姿を探すように、もう一頭の竜が旋回を繰り返す。

退紅色の竜の右目は爪に挟まれ、三本の傷が出来ている。

竜は大きく咆吼すると人の姿へと形を変えた。

「くそっ、どこだ……シエンリス・レミアス！ 殺してやる、殺してやる！ 殺してやる！！」

狂ったように喚き散らし、彼は天に向かって叫ぶ。

「シエンリイイイイス！」

雨粒が傷口を洗い流そうとしているかのように降り注ぐ。

鮮血と混じった赤い雨が森へと降り注ぐ。

「簡単に死ぬなよ……てめえが死んでいいのはなあ……俺……」
言い切るよりも早く男の意識はそこで途絶える。

力と魔力を失った身体は、吸い込まれるように森へと落ちていった。

無慈悲な雨はなおも降り注ぎ、鈍色の空は時折紫に染まっていた。

錆赤歴52年。竜王「赤妃」の眠りにより、星見達が王の「選定」

に入ってから二十年あまりが過ぎた時のことだった。

岩の上に座り手を伸ばすと、呼びかけに答えるように彼の回りに鳥が集まってきた。餌も持っていない人に鳥がそれほどまで懐くのは珍しいことだった。

ましてそこは竜の谷と呼ばれる場所。ここに住む人の形をしたものは竜であり、本来外の動物は怯えて近づこうともしない。けれど少年が呼びかけると森の動物たちはいくらでも集まった。

「や、おはよ」

言つと鳥たちが答えるように鳴く。

「昨日の嵐、大丈夫だったか？ トリ子さんの卵は……あー、なら良かった」

にっ、と少年は笑う。

明るく人懐っこい表情だった。どこか悪戯好きそうな、それでいて仲間想いの表情。少し垂れた金色の瞳は優しく、戦闘民族と呼ばれる竜族とは思えないほど穏やかな色を湛えている。

「メーメは？ 子供生まれた？ ……わ、マジで？ お、じゃあ見に行かないとな。一緒に行く奴この指とーまれ」

言つて付きだした指先に一匹の鳥が止まり、二匹目が押し出すようにして止まるうとした瞬間、空いた指先に三匹目が止まった。

彼はけたけたと笑う。

「ん、いーよ、みんなで行こう」

立ち上がった彼の肩と頭の先に鳥が止まる。

鳥を乗せたまま、彼は森の中を歩く。

道などほとんど無い道だったが、所々に出ている岩の上を渡るように飛び跳ねながら彼は進む。

人間ならば険しい山道に進むことを躊躇うが、彼にとっては庭のようなものだった。どこに何があるかを熟知しているのだ。

だが、前日に雨が降っていたことを彼はすっかり失念していた。

「おっと……」

濡れた岩に足を滑らせ、そのまま彼は下へと転落する。

危険を察知して鳥が大きく羽ばたいた。

「いったー、あー変なトコ打った」

強打した腰をさすりながら彼は起きあがる。

「？」

不意に見覚えのない色を認めて彼は目を瞬かせた。

それは紛れもない人の形をしたもの。

緑の衣服はぐっしよりと濡れ、うつぶせになっている状態の身体の下から微かに血の匂いを感じる。

人間で言えば二十前後の年齢。竜として二百を超えたくらいだろうか。独特にまとめられた髪と、前髪に付けられた管状の髪の毛が妙に印象的だった。

少年は彼の身体を抱き起こすようにして見る。

意識こそ取り戻さなかったが、青年が微かに身じろぎをした。

少年が満面の笑みを浮かべる。

「落とし物、はっけーん！」

トランタの店は街の広場を見渡せる位置にある。

そこから外の様子を見ながらキイスは少し息を吐いた。

「疲れてるようだね、領主様」

親友に言われ、キイスは少しむっとした顔をする。

いつもは名前で呼ぶ癖に、呼ばれるのが嫌いだと分かっている呼び名で呼ぶあたり、なんの嫌がらせかと思う。

左右の瞳の色が違い、白緑色の髪を持つトランタはキイスにとって良き友人だった。親子ほど歳が離れているものの、お互いに信頼し、相談し合う関係にある。百年を超える付き合いの為、お互いのことは良く知り合っているのだ。

「からかうなよ。言っておくが俺はまだ領主なんかじゃねえよ」

「だが城主殿は眠られたままなのだろう？ 今じゃもう人の形にすらなれないとか」

「それでも領主はオヤジだよ」

領主になりたくない訳ではない。

ただ、認めてしまえば父親の死を早めてしまう気がするのだ。口には出さなかったが、トランタは分かっているのだろう。

小さく笑って彼の前に箱を差し出す。

「修復終わったよ、キイス」

「ああ、悪いな」

差し出された箱を受け取りキイスは笑う。

トランタは修復の仕事をしている。物理的な修復も勿論行いが、彼が主にするのは魔力による修復作業だ。彼のような職業が稀なのは純粹に才能のある人間が少ないからだ。その中でも稀な才能の主であるトランタは、本来ならばフェリアルトの領地ではなく王都コラルにいるべきだろうと思う。

前に一度口に出したら酷く怒られたのを覚えている。
地位や名誉の為に修復師をしているのではないのだと。

キイスは修復の終わった箱を開き中を確認する。

中には一本の銀で出来たナイフが入っている。

光にかざし刃に浮かび上がった紋章を見て彼は顔を顰めた。

「……ルネールの紋だな」

「件の襲撃事件のものだね？」

「ああ。犯人の残した手がかりだ」

竜の谷にはコラルを中心とし、五つの領地に広がる。智恵のルネール、剣技のレミアス、花のミレイル、戦のアソニア、そしてここ鉱山のフェリアルト。通常名を名乗る時出身の場所を知らせるために領地の名前を使うが、紋章に関しては特殊な時しか使われない。それが特別なものだからだ。

キイスが頬にフェリアルトの紋章を入れているのは、彼が領主代理だからであり、そのくらいの地位がなければ、普通婚姻などの特殊なことが無い限りは憚って使わないものなのだ。

ましてものに入れるとなれば持ち主はよほど高い身分の人間か、高い身分の人間に送られたと言っことになる。

それが先だつて起こった子供が殺された事件の現場に残されていたのだ。

子供とはいえ竜だ。

武器で殺せるほど簡単ではない。

ただ特殊な武器を使い、それで角を壊せば簡単に死ぬ。成竜となった竜では角を壊した程度では死ぬことはないが、子供の竜はやはり弱いのだ。

「人間でなくて良かったが、複雑な気分だ」

当初谷に紛れ込んだ人間の仕事とも考えていたが、紋章が出てしまった以上、その武器は竜族が作ったものだ。竜族という身内で子供を殺すような気遣いを出してしまったということだ。

「まだ分からないよ。人間が武器を入手して使ったのかもしれない」

「人間が竜から？ 難しいことだろう」

協定があるとはいえ、人間との関係は良好とは言えない。

だからこそ、犯人が人間でなくて良かったと思っただの。犯人が人間であったのなら、ヘタをすれば再び戦争が起こる。

人間の国、ラストイーラの王が自らの命と引き替えにしてまで結んだ協定だ。

キイスの生まれるよりも遙かに前の話のため、英雄譚としてしかラストイーラ王の事は知らないが、竜族たちの中からも未だに傑物と言われるような人間だ。子供の頃絵本で知って以降英雄視しているキイスにしてみればその行動を無駄にしたくはなかった。

「ともかくルネール領主に尋ねてみる。変わった意匠だ。元の持ち主くらい特定出来るだろう」

「そうだね。……おや、あれはクウルじゃないか？」

窓の外に、走る子供の姿を見つけてトランタが言うと、キイスが大きく顔を顰めた。

「あいつ、一人で外に出るなってあれほど……っ！ クウル！ コラてめー、なにほつつきあるいてんだっ！」

「げっ！ キイス、執務中じゃねーのかよっ！」

ドアを開け叫ぶキイスに驚きクウルは抱えていたものを落としそうになる。

「お兄様と呼べ！ 馬鹿弟！」

「うるせー、キイスなんかキイスで十分なんだよー。っ！か、トランとこでさぼってんじゃねーよ」

「サボってねえ！ っ！か、てめ、その荷物何だよ！？ また何か猛獣ひろったんじゃねーだろうな！」

「へへーん、残念でした。今回は猛獣じゃなくて人ですうー」

「は？ 人？」

戸惑った声を上げると、とことこ彼が近づいてくる。

「いまカリアが見てるよ。怪我をして森に倒れていたんだ。俺はカリアのお使い。薬作るんだってよ」

言って彼は袋の中を見せる。

確かに中は餌などではなく薬の材料になるものが入っている。

「……大丈夫なのか？」

「傷は殆ど塞がっているけど、意識が戻んねーの」

「トランタ、悪いが……」

彼は心得ているという風に頷く。

「戻るんだな。気を付けて。カリア女史にもよろしく伝えてくれ」

「ああ」

微かに話声が聞こえた。

少し歳を取った印象の落ち着いた女の声と、張りのある声をやや潜めた男の低い声、そこに少年とも少女とも付かない快活な声が混じる。

「一応の処置はしました。あとは体力次第かと思えますよ」
「細かい奴だな。……体力次第って本当に大丈夫なのか？」

「まあ、キイス様、ご自分の体格を基準に考えてはいけませんよ？
フェリアルトは巨漢が多いですが貴方はその最たるですからね」
「無駄に体格がでけーって言われている気分だな」

「あら、褒めているんですよ。キイス様もクウル様もよくお召し上がりになり健やかにお育ちですもの」

近い位置から少年の声が聞こえる。
「キャリアー、それ褒めてるよういきこえないんだけどー」
くすくすと女が笑う。

暖かい声だ。

そして楽しそうに聞こえる。

彼はゆっくりと目を開く。鼻先が触れそうなほどの間近に人の顔があつて心音が激しく跳ね上がった。

「……！」

「おー目が覚めた！ シエンの目が覚めたぜ、キイス！」

「だー、もう、それまだそいつの名前って決まったわけじゃねーつってんだろっが！」

「キイス様、病人の前ですよ」

静かにするようにと女が指を立てると、男は複雑そうな顔をして黙り込んだ。

「クウル様も、あまり驚かさないように」

「はぁーい」

言って少年はベッドから降りる。

彼は半身を起こす。簡単な服しか着ていないことに気付いてかけられていた布団を引っ張る。頭部に違和感を覚えて触れると、角がむき出しになっているのが解る。居心地が悪くて彼は赤面した。

「あ……あの……」

「目を覚まさないからどうしようかって思ったんだよ。でも良かったー、目を覚まして」

背の低い少年は心の底からそう思っているようにホツとした表情を浮かべていた。

髪は茶色く瞳は金の色をしている。竜の年齢から言って五十を過ぎた頃だろうか。幼霊期を過ぎ、人の形を持つようになって間もなくくらいだろう。それにしても体つきが小さく、逆に言葉もしつかりしているのが気になったが、少し早く幼霊期を過ぎたのだろうと思う。

その隣には驚くほど大柄な男がいた。少年とは違い、既に成竜となっており、立派な体躯をしている。灰の髪を持ち、前髪の一房だけが赤い。気むずかしそうに唇を結び、少年の金とはまるで違う印象の金の瞳を持っている。

その瞳に睨まれ、驚き視線を逸らす。逸らした先には女の姿があった。

女は紫の髪を持つ優しそうな女だった。つり上がった赤い瞳は少し怖かったが、その瞳の奥は優しい。どのくらいの年月を生きて来たのだろうか。老竜に近い年齢のようにも見えたが表情は若い。

彼女は近づき彼の額に触れて確認をする。

どきりとして顔が熱くなるのを感じたが、彼女は優しく笑った。

「大丈夫そうですね、安心しました。ここはフェリアルト領主キイス様の城塞になります。深い傷を負って森に倒れていた所をクウル様が見つけて運んで来られたのです」

「あ、クウルって俺ね、俺ー」

明るく少年が自己主張をする。

助けられた、と聞いてお礼を言おうとしたが、言葉に詰まった。

自分は何故そんな傷を負ったのだろう。

「覚えていらっしやいませんか？」

女に覗き込まれ、彼は頷く。

「シエン寝ぼけてんじゃねーの？」

「……あ、あの、その……シエンって……」

「んー？ お前の持っていた剣にシエンとか書いてあったけど、ちげーの？」

「え？」

「名前」

「……」

名前を言おうとして言葉に詰まった。

思い出せない。

自分の名前がすっぱりと抜けたように思い出せないのだ。それどころか今まで自分が何をしていたのかも思い出せない。

何も無い場所に急に放り出されてしまったかのように、酷く不安を感じる。

「だー！ もう、シエンってのはお前の名前かって聞いてんだよっ

！ そんくらいのこと、はきはきと答えるよ！」

「ひっあ……！」

男に怒鳴られ、彼は覚えず身を竦める。

過度の恐怖の為か、それとも不安感からか、ぼろり、と目から涙がこぼれた。

「キイス様！ 自重して下さいませ！」

「あー、泣かしたー。キイス最低ー」

「ばっ、何で泣くんだよっ！」

「あ。あの……ご、ごめんなさい」

謝ったものの、涙が止まらなかった。

ボロボロとこぼれ落ちる涙に男の表情が次第に苛立った様子へと変化していく。

堪らず彼は襟首を掴んだ。

「……っんの、てめえ、付いているもん付いてんのかよっ！」

「まあ」

「キイスってば、げっひーん」

「うるせえ、外野！ いいか、てめえも男だったらメソメソすんじやねえ！」

「あ……っ、ごめ……んなさ……」

「あーもう、キイスいいよ。邪魔だからあっち行って。顔怖いんだしさ、病み上がりでその顔見せられて怒鳴られたら誰だって泣くってーの」

「何だと、ゴラア」

「ごめんなー、あいつ顔怖いけど、べっつに取って喰ったりしないから安心しろよー」

少年に微笑まれ少しホツとする。

涙腺が更に弱って涙がこぼれたが、少年は気にせず指先で拭う。

「ごめ……んなさい。僕……その、名前……思い出せない」

言っと少年は少し驚き女の方を見上げる。

女は目を瞬かせ、ベッドの脇に膝を折った。

「一時的な混乱でしょうか。これの名前はわかりますか？」

「……まくら」

「現竜王様のお名前は？」

「……赤妃さま」

「先代竜王陛下は」

「えっと……飛翔……常勝とも……呼ばれています」

「それは号ですわね。名前は？」

「アスカ様……」

「アスカ王の出身は？」

「あ、アソニア……」

「ご自分の出身地は？」

「……」

「ご自身の瞳の色は？」

「……………」

「レキイの大戦で灰の目の王を倒した英雄の名前と号は？」

「竜王リヒト様、号は迅雷。……灰の王は倒したのではなく封印されています。実際行っただのは迅雷王ではなく、王の力を預かった人間の子供です」

なるほど、と彼女は頷く。

「ご自分に関わる事だけを忘れていらっしやる様子。これは一時的な混乱ではないかと思えます。ちゃんとした教育を受けているようですから、過去に竜王若しくは四方將軍を出した家の出でしょう。服装からレミアスの方と思えます故、キイス様のお名前を借り、レミアス領主へ問い合わせてもよろしいでしょうか」

聞かれ、キイスは頷く。

「カリアに任せる。くれぐれも先方に失礼のないよう」

「承知しました。その間、彼は別邸の……………」

方へと言いかけたらしい彼女の言葉を遮りクウルは楽しそうに言う。

「なあ、こいつ家に置いてもいいだろ？」

「えっ？」

「クウル様、彼がどんな立場にあるか分からない以上客人として迎えるのが……………」

「えー？ だつてよー、別邸って豪華だけど不便だしさー、誰かと常に一緒の方が記憶とか戻りやすいんじゃない？ それに、拾った以上責任持たなきゃいけねーって、キイス言ってたじゃんか」

「人と動物は違うだろ」

「えー、やだー、シエンは俺が拾ったのー、俺と一緒にいるのー！ バタバタと手足を動かす彼に、キイスは盛大な溜息をつく。

「…………好きにしる」

「う……ん……」

小さく呻いて彼は身じろぎをした。

体力の回復の為に眠りについてどれくらいの時間が経っただろうか。部屋の中は暖かく、どこからか微かに花の香りが混じる。

うつすらと目を開くと陽の差し込む窓際に真っ白な花が活けられている。

(……槍雫の花……)

ぼんやりと彼はそれを見つめた。

‘ソウダ’と呼ばれるその花は、飛翔王アスカの出身地でもあるアソニアに生息する。一説には人間の国ラストイーラ最後の女王サラスレイノを貫いた槍から落ちた雫が芽生えさせた花とも言われている。サラスレイノは自らの命と引き替えに竜と人間の双方を守り、互いに歩み寄ることを拒んでいた竜族と人間の間に協定を結んだと言われている。その花には傷付いた竜の身体を癒す効果があるとされている。

(そう言えば‘あの時’も……)

それは自分がまだ子供だった時。

窓から顔を覗かせ、ボロボロになりながらも勝ち誇ったような笑顔で顔を浮かべ自分に槍雫の花を差し出し

「……いつ」

その顔を思い出そうとした瞬間激しい頭痛に襲われる。

思い出さずにはいけないと、身体が警告しているかのように思った。

それなのに、何故か、思い出さなければいけない気がする。

大切な約束を忘れている。

遠い昔「誰か」と交わした大切な約束。

「……誰と……何を？」

呟き彼は頭を抱える。

思い出せない。思い出したいのに、思い出したくない何か。目から涙がこぼれた。視界が涙のせいで揺らいだ。

意識がぼんやりとするにつれ、頭痛が治まっていくのを感じる。

微かに息をつき、彼は身を丸める。

「……あ……れ？」

足下に何か違和感を覚え、彼は布団を捲った。

「え……？」

足下にまるまるように眠っているのは小さな少年の姿。

すやすやと寝息を立てる少年は無防備な姿でいる。布団を奪われ寒くなったのか、少年はシェンの足を抱きしめるように自分の方に寄せた。

「ええっ……！？」

彼は溜まらず悲鳴を上げた。

その悲鳴に驚いたように少年が身を動かす。目元を擦りながら上半身を起こす。

「んー？ 何だ、朝あ？」

「き、君、何で……！」

「一緒に寝た方が暖かいだろ？」

「そ、そう言うことじゃないくて」

「シェンってばぐっすりだったよなー。俺が入っても気付かないんだもん」

彼は顔を赤くした。

ばん、と激しい音がしてドアが開かれる。入ってきたのはキイスという青年だった。彼は怒った様子でクウルの襟首を掴んでシェンから引きはがした。

「おーまーえーはー」

「お、キイス、おっは」

「おっは、じゃねーよ、馬鹿弟！　どこで寝てるかと思ったら、こんなトコにいやがって！」

「ん？　あれー？　キイスってば、俺と一緒に寝てやらなかったから寂しがってんの？」

「ちげーよ！　お前、昨日俺が言ったこと、理解してねえのか！」

「シエンの出身地っぽい所じゃ、夜一緒に寝るのは夫婦か親子だけつての？　理解してるよん」

「理解していてお前は……！」

「いけねえ事なの？　だったら俺とシエンが結婚すれば何の問題もないじゃん」

「問題だらけだっ！」

噛み付くように言われても、少年のほうはけらけらと笑っている。

「えー、なんでだよ。雄同志結婚しちやいけなない訳じゃないだろー？」

「そう言う法はないが、雌雄一対じゃなければ婚約出来ない！　大体お前は……」

一瞬少年がむっとしたのが分かる。青年の方もはっとして口元を覆った。

瞬間だった。

身を動かした少年の足が青年の頭部を捕らえる。

「いつ……」

青年が少年から手を離すと少年は軽い身のこなしで着地した。

「キイスのばーか！　ボクネンジン」

「……っ」

「そういう顔するんじゃネーよ、ばーかばーか。お前なんかカリアに鼻つままれて痛がればいいんだ！　……行こう、シエン、こんな奴相手にするだけ時間の無駄！」

「え？　えっ!?!」

急に引つ張られ、シエンは戸惑う。

寝ている時の姿のままだったために、衣服も中途半端にしか着ていない。だが、クウルの手を振り払うことも出来ず、彼はそのまま廊下へと連れ出される。

戸口の方を振り返って見たが、青年が難しそうな顔をしてこちらを見ているだけだった。

「ちょっと、まって……！」

「……」

「あの、えっと、クウル君！」

名前を呼ぶと、ぴたりとクウルが足を止めた。

「……キイスのばか」

「クウル君……」

「あいつ、自分で言ったこと後悔してんだぜ。後悔するくらいなら言わなきゃいいのに」

唇を尖らせて言う少年は泣き出しそうに見えた。

シエンは彼の傍らに膝を付く。下から覗き込むように見ると彼は少し肩を竦めて困ったように笑った。

「俺さ、竜の形になれないんだ」

「え……？」

「母さん死んだ時さ、こっちの形のまんまだったんだ。俺さ、お腹中にいて、仕方ないって、カリアが母さんのお腹割いて俺助けてくれたみたいなんだけど、俺、人の姿で生まれただ」

「それは……」

「あり得ない事だ。」

竜族は普通竜の形で生まれてくる。生まれて三十年くらいは幼い竜の形のままで生活をする。人の形を覚え初め、安定して人の形を維持出来るようになるのは五十を超えてくらいからだ。成竜になるのはそれから更に五十年ほどかかる。人間であれば死んでしまっている年だが、竜というのはそう穏やかに成長していく生き物なのだ。その竜族が人の形で生まれるなど聞いたことがないし、ましてそん

な風に生まれれば竜の谷の気候に適応出来ず死んでしまつとさえ言われている。

彼は嘘を言っているようには見えなかった。

ただ、少し辛そうに笑っている。

「だから俺竜になれないの。……キイスはさ、それがあいつのせいじゃないつてのに、自分のせいみたいに気にしてるの。ついでに言うつと、俺は竜になれないから、子供出来るかどうかもわかんないつてーの」

「でも、竜になれない竜族なんていないし……もう少し大きくなれば竜になる術を覚えるかも知れないよ」

言葉を探しながらシエンは言う。

そんなの、嫌というほど聞かされてきただろう。慰めにも励ましにもならない。

「その……竜と人の姿と、順序が違つただけで……」

「カリアもそう言つてたよ」

「……ごめん」

クウルは首を振る。

「俺はさ、別に竜になれなくたっていいんだよ。でもさ、あいつが気にするの、嫌なんだ」

「……お兄さんが大切なんだね」

「うーん、そうなんだけど、何て言うかな、あいつが俺のこと気にするの、何か可哀想なんだよ」

「可哀想？」

ふるふると彼は激しく頭を振つた。

「わかんねーの、何て言つていいか。だからやめ。この話やめ。それよりお前さ、なんで俺のこと、くん、なんて言うんだよ」

「くん？」

「クウル君つて。何かそれすつごくやーだ」
「年下にごねられて、シエンは戸惑つ。」

「えつと……じゃあ何て呼べばいいの？」

「んー、んー、じゃあ、クーちゃん？」

「クーちゃん？」

「あれ、何か変だな。んー、ああ、クーでいいよ、クー。クウルがクーじゃないと俺返事しないかな？」

びし、と言われ、シエンは破顔する。

「うん、じゃあ今度からクーって呼ぶね？」

「うんうん、そうして！」

嬉しそうに頷く彼を見て、何故か懐かしい気持ちになる。

何故かずっと昔から一緒に居たような気がしたのだ。そんなはずはないのに、シエンは彼のことを知っている気がした。

「竜撃槍を準備しろ！」

叫ぶと同時に一つの人影が城壁の上から飛び降りる。

微かに白藍色に見える銀の髪を持つ竜人だった。年はまだ若く、成竜となってそれほど経っていないように見えた。容姿は美しく、精悍な顔立ちから青年のようにも見えたが、他の竜人達はそれが娘であることを知っていた。

彼女は魔力を身に纏い、間近まで迫った錆びた青い竜に向かって飛ぶ。

青い竜はフェリアルトの竜に比べ小柄だったが、竜の纏う気配は強く、歴戦を駆け抜けてきた戦士であるように見えた。間近で目にした彼女はそれが老竜であることに気付く。色の薄い瞳は、視力を失って久しいように見えた。

「ご老体！　ここから先はフェリアルト領主の直轄地になる。竜体での進入は禁止されている。どうか戻られよ！」

彼女の叫びはその老竜には聞こえていないようだった。

辺りを確認しながら彼女は続ける。

「ご老体！　これ以上進まれると侵攻と見なされる。どうか、人の姿に……っ！」

言い差した瞬間だった。

老竜が断末魔のような激しい叫び声を上げる。老竜は激しく暴れるように身を躍らせた。まるで彼女を追い払おうかとしていかのようだった。

彼女は竜の爪から逃れるように下方に逃げたが、背後から迫っていた尾にたたき落とされる。

「隊長！」

叫び声が聞こえたが答える余裕は無かった。

彼女の身体は激しく飛ばされ、地面に叩きつけられる。

激しい力で叩きつけられた為、轟音と共に彼女の身体は地面にめり込んだ。

「ミュルナ様！」

心配そうな声に向かってミュルナは叫ぶ。

「大事ない！ セイム、ラン、イレ、四方より網をかける。配置へ付け！」

はい、と三人の声が聞こえる。

ミュルナはそのまま高く飛び、竜の目の前で魔力を集中させた。時を待たずして三方向から魔力で出来た縄が戸届く。彼女はそれを一気に編み上げた。

「捕縛する」

青い竜が加速するように魔力の網に向かって突っ込んでくる。強行突破をするつもりだとすぐに分かる。

ミュルナはそれを引き留めるために強くきつく網を締め上げた。他の三人も同様に締め上げ始める。

逃れる為か、或いは苦痛からか老竜は大きく身をよじらせた。

「ラン、それでは弱い！ もっと気合いを入れろ！」

「は、はい！」

「ご老体！ これ以上無茶をされるな！ 御身が保たない！ あなたは名のある戦士とお見受けする！ このようにされる方ではないはずだ！」

「……………」

一瞬、竜の瞳がミュルナを見た。

抵抗する力が少し弱まる。

ほんの僅かの間、竜の目に光が宿ったように見えた。

「……………殺せ」

「！」

老竜が言った瞬間だった。

再び目の光が失われ、老竜が激しく暴れる。

「っ！」

ミュルナは反射的に一気に網を狭めた。引きちぎられるかもしれないという感覚があった。それほど激しい力が老竜にはあった。傷つけない為に加減をしていればこちらがやられてしまうだろう。

迷っている暇などなかった。

ミュルナは叫ぶ。

「竜撃槍っ！」

声に反応し、城壁の上から竜を殺すための巨大な槍が放たれる。

それは網にくるまれた青い竜を真つ直ぐ貫いた。老竜が激しく悲鳴を上げる。だが、暴れることはしなかった。いや、抵抗する力は最早残っていないかったのだろう。貫かれ、縛られた竜はそのまま地面へと墜落をした。

ミュルナはそれを追い掛け下へと急ぐ。

ずん、と重たい音が聞こえ、土煙が立ち上る。

竜は苦しげに声を上げ、唸っていたが、ミュルナの気配を感じたのかうつすらとだけ目を開いて見せた。

『若キ戦士ヨ……ドウカ……慈悲ヲ……我が我デアルウチニ、ドウカ』

「……………」

ミュルナは無言で自らの手を本来の形に戻す。

人ではなく竜の腕が現れる。

『……………』

老竜はゆっくり目を閉じた。

ミュルナの手が老竜の身体を貫き、心臓を握りつぶした。悲鳴を上げることもなく老竜は静かに息を引き取った。

その顔は酷く穏やかなものだった。

「……………この人、もしかして」

ミュルナを追って来たセイムという青年が死んだばかりの竜を見つめて呟いた。

「知っているのか？」

「飛翔王の時代の北方將軍じゃありませんか？ 俺も伝承でしか知りませんが。ほら、ここの十字傷、話で聞いた覚えがあります」

「……………」

ミウルナは見ていられずにくるりと背を向けた。

「丁寧に。私はキイス様に報告に向かう」

「はい」

北方將軍ソウマ・シイの号を一度は持った竜だとすれば、よほどの實力を持った竜だったのだろう。それが何故こんな風になっってしまったのかミウルナはその理由を嫌と言うほど知っている。

竜の谷は常に安定を欠いている状態にある。竜王が要となり、各領主がそれを支えることで不安定な状態を回避することが出来るのだ。竜王は星見達に選定された者達が戦い、最後に生き残った者が玉座に座る。

現在の竜王赤妃はその戦いをせずに選ばれた竜王だ。故に彼女を竜王と認めない者も多く、混乱を招く結果になった。数多くの竜が死に、その予定されていない大量の死により竜の谷の歪みが加速した。

歪みは竜の精神に影響を及ぼし、そして狂わせる。

竜王がいるのであればその狂いも緩和したのだろう。だが、赤妃は深い眠りに就いてしまった。今の竜の谷には要となる者がいないのだ。

あの老竜はその狂気に精神を狂わされていたのだろう。

あれだけの戦士すら狂うのだ。

それだけこの谷は危機に瀕していると言うことだ。

(……………竜王選定の戦いはまだ終わらない)

戦いにどれくらいの年月がかかるのか誰にも分からない。時に百年以上かかることもあれば、数年で決着が付くこともあるという。あと、どれだけの時間がかかるのだろうか。

少なくともこの短期間でこれだけ歪みが加速された前例は無いだ

ろう。

一刻も早く竜王には玉座に座って貰わねばならない。

だが、

「……谷に何かが起きているのは確か。それでもそれを支えられる竜王が現れなければ谷は人の世界を巻き込んで滅びの道を歩む」

呟いて彼女は息を吐き自嘲気味に笑った。

「古竜の血を引いていても、使いこなせなければ何の意味もないな

……」

「そうか。……手間をかけさせて悪かった」

ミュルナの報告にキイスは顔を顰めて息を吐いた。

飛翔王の号を持つ先代竜王アスカが竜王となる以前は酷く荒れていたという。竜王候補達の戦いが長引き、王の選定に異常な時間がかかったのだ。谷の疲弊は激しくそれ以上長引けば竜の谷は滅ぶと言われていた。王の選定がままならない時、当時の竜賢人サジャ・ルネールは事態を解決しうるだろう存在として一人の人物を上げた。歪んだ時空に落とされた若き竜の子、後に飛翔王の号を冠するアスカだった

竜も魔法も存在しない世界で人の子として育てられた彼は当初竜の姿を持たなかった。それはクウルのような原因不明のものではなく、アスカ王の本能が異界の穢れから身を守るために自らした封印によるものだった。

星見達により谷に戻されても暫くその封印は解かれなかったが、赤妃との出会いによりその封印が解かれたという。竜の形を戻したアスカ王は凄まじい強さを見せた。混乱していた世の中を次々と収め、やがて即位を果たした。コラルに竜王を据えた谷は歪みの影響を無くし谷に平穏が戻った。

そのアスカ王が52年前に死去した。

突然王を失った谷はまだ次の王の選定にも入っていないかった。アスカ王の伴侶であった赤妃は混乱の最中玉座に座り谷を治めた。当然戦わずして竜王を名乗る彼女を良く想わない動きがあった。赤妃を支持する四方將軍と各領地の竜達の戦いがあり大きく混乱をした。

結果としてアスカ王が即位するよりも以前よりも荒れた。

その荒れ方は異常な速度とも言われていた。

「……力になれずすまない」

黙り込んだキイスにミュルナは申し訳なさそうに言う。

「いや、ミュルナのせいじゃない。お前がいなければもつと混乱しただろう。助かった」

「おれはただ誇りある戦士を辱めることはしたくなかったただけだ。彼女らしいきっぱりとした口調にキイスは少しだけ微笑んだ。

ミュルナは幼い頃はトランタの後ろに隠れているような大人しい性格をしていた。だがその実、古竜デイギアの血を引いている為に強く美しい竜だった。いつの頃からかミュルナはトランタの後ろに隠れるのをやめ、やがてフェリアルトの守衛隊に入り戦い始めた。心強い仲間だった。

「しつつかし、まあ、元とはいえ北方將軍まで狂うとは……。つたく、ホントどうなってるんだよ」

「赤妃が正当な王じゃないからいけなかったんだ。この狂いを見ればそうとしか思えない」

「……確かにな。けど、竜王赤妃は四方將軍に支持されていたからな。俺としちゃ、本当に弱い竜だったとは思えねえんだよ。飛翔王が死んで、その後、なんとか支えようとした結果が裏目に出たと思えねえんだ」

「キイスは甘い」

ミュルナは息を吐く。

「竜王を名乗るなら少なくとも混乱を加速させるような事したら駄目だ。おれは竜王になんかなる気はないが、その………フェリアルトをこれ以上混乱させないくらいのことはするぞ」

キイスは声を立てて笑った。

「そりゃ、頼もしい！ お前がいればフェリアルトは万ーのことがあっても平気だな」

「馬鹿なことをいうな。キイスがいる。おれがいる。万がーのこと

なんか起こるか」

本当に頼もしい、とキイスは笑う。

こんな狂った時代だから、冗談であっても自信過剰であっても彼女のような存在が光になり支えになる。

彼女のおかげでキイスがどれだけ安心してられるか、彼女は知らないだろう。

「……………それにしても、だ」

キイスは声を低くする。

怪訝そうにミュルナが見返してくる。

「なんだ？」

「増えるかもしれねえな」

「今回みたいな例が、か？」

「そうだ。フェリアルト鉱山には大穴があるだろ。誇り高い竜達が、歪みの気に当てられて一瞬でも正気に戻ったなら大穴を目指してくる」

「道理だな。おれも生き恥を晒すくらいなら自ら死を選ぶ。……………参ったな、このままだとフェリアルトから狂うぞ」

嘆いた彼女の言葉はそのままキイスの心配の種だった。

キイスは額に手を当てた。

フェリアルト領には鉱山がある。鉱山には大穴があり、そこに飛び込んで戻ってきたものはいない。真実はわからないが、竜すら殺す程の強い力があるとされている。フェリアルトの鉱山が枯れないのは大穴で死んだ竜の身体に含まれる魔要素によるものではないかとさえ言われている。

竜、特に戦士と呼ばれる竜は誇り高い。

ミュルナの言うとおり恥を晒すくらいなら自ら大穴に飛び込んで死を選ぶだろう。だが予定のない竜の死は歪みになる。竜は魔法生物であるが故、死の瞬間に多大な影響を及ぼす生き物なのだ。そもそも竜というものはそう簡単に死ぬことはない。争いで命を落とすのでなければ人間が到底想像出来ない程の長い時間を生きること

なる。老齡期に入れば眠っている時間の方が長くなり徐々に魔法の力を失っていく。寿命で尽きるのであれば竜は周囲に大きな影響を与えずに朽ちることも出来る。だが、そうではない死は周囲に影響を与える。歪みとなり、他の竜を狂わせることにもなる。

かといって狂った竜をそのままにも出来ない。最悪の場合はミュルナがそうしたように殺すしかない。それが何より被害が最小限におさまるからだ。

最小限に収められたとしても影響は出る。このまま沢山の竜達がフェリアルトで死を選んでしまえばフェリアルト領は他の領地より先に沈むだろう。

「領地内のことは領地でとどめて貰うよう要請はした」

「返答は？」

「コラル、ミレイルから言うに及ばずと返答が帰っただけだ」

「この状況で贅沢は言えないな。色よい返答が帰っただけで十分だ」
「だよなあ」

返答が帰ってくるだけで十分過ぎる成果だ。だが溜息が出る。

フェリアルトでも領地の端から端までのことを把握しきれていない。人里離れて暮らしている竜も多くその全てをと頼んでも難しいのは承知していた。何より全体に歪みの影響が出ている。各領地でも頭の痛い問題が山積みだろう。

「早く王が決まってくれりゃいいが……」

「キイスが星見に選ばれば良かったのにな。キイスの実力があればすぐにでも終わっただろ？」

キイスは苦笑を禁じ得ない。

「や、俺だって簡単にいかねえって。……候補の中には四方將軍がいるって噂だろ？ そうそうやれる相手じゃねえよ」

「元西方將軍らしいな。それだけの実力があればとつくに決着付いていてもおかしくない。おれはキイスの方が強いと思う」

「褒められて悪い気はしねえけどよ、俺をあんま買いかぶるなつてえの。俺は温厚なんだ。殺し合いになんか参加したくねえよ。大体、

強かろうが弱かろうが、選定の時に選ばれた竜しか竜王にはなれねえ」

「それがおかしいんだ。そもそも、王を決めるのに殺しあう意味が分からない。歪みを加速させるだけじゃないか。……運も実力も高い竜じゃなければ他が付いてこないのはわかるけどな」

それは確かにキイスも思っていた事だ。

竜族は確かに実力の高い者を好むが、殺し会いをして最後の一人になるまで竜王として認められないのはおかしな話だ。

候補として選ばれた中には殺し会いを望まない竜もいたはずだ。

「ま、ともかく、だ。警備を強化して……」

言い差した時、廊下をバタバタと走る足音が聞こえる。

軽い子供の足音となれば一人しかいない。

突然扉が開かれ、予測通りの人物が顔を覗かせた。

「おい、キイスいるー？」

「ノックぐらいしろ、馬鹿弟！」

クウルはドアを閉めてノックをしてからもう一度ドアを開いた。

「おーっす、ミュ、お疲れー」

「ああ、クウルか。随分機嫌がいいみたいだな。何かあったか？」

「へへ、実はなー」

「……お・ま・え・は！ ドア叩けばいいってもんじゃねーんだよっ！」

先刻まで椅子に座っていたはずのキイスに襟首を捕まれながらクウルは唇を尖らせた。

「なんだよー、ノックくらいしろっていったのキイスじゃねえかよー」

「だからそう言う問題じゃねえんだよ、ってか、お兄様と呼べ！ 馬鹿弟！」

「ばかって言った方が馬鹿なんだかなー！ キイスのばーかばーか」

「兄に向かっていい態度じゃねえかよ、オイ？ 大体お前は兄に対する尊敬の念つてもんがねーんだよ！ たまには兄の忠告くらい大人しく聞いたらどうだ？ ああ？」

「たまに、は、きいてますっー。ノックしたしお客さんにも挨拶しただろー？ つーか、この場合ミュにシエン紹介する方が先じゃねーの？」

「！」

指摘されてようやく気付いたのかキイスはドアから部屋の中を覗き込んでいるシエンを見る。

シエンはびくりと肩を振るわせ涙目になった。

ミュルナが視線を少し鋭くさせる。

「誰だ、そいつ」

「シエンだよ。シエン、いいから入れよ。ミユを紹介すつからさ」
「え、えつと……」

シエンがキイスを見ると、キイスは不機嫌そうにクウルを離れた。
「ぐだぐだやってねえで、とつと入れよ！」

「あ、はい。……おじゃまします」

びくびくとしながら入ってきたシエンはまるでキイスから距離を取るようにクウルの後ろに入る。

ミュルナは腕組みをして、まるで品定めでもするようにシエンを上から下まで見る。

「その格好、レミアスの竜だな？」

「えつと、そう、みたいです」

「みたい？」

「シエンは記憶喪失なんだつてー」

「記憶喪失？ なら何故名前を知ってる？」

「こいつの持つてる剣に名前が刻まれてたんだよ。半分くらい読めなかったけど、シエンつて」

へえ、とミュルナは興味深そうに彼を見る。

シエンは彼女を不思議そうに見返した。微かにその顔は青ざめているように見えた。

「ん？ シエン、どうしたんだ？」

「まさか、デイギア種……？」

「あれー？ 良く知ってんなー」

「嘘、どうして……滅びたはずじゃ……」

その疑問にはミュルナが答える。

「ずっと滅んだ種と言われていたが、おれたちは滅亡種じゃない。

同族で生き残っているのはおれと兄しか知らないが、ちゃんと生きてるぞ」

「そうじゃない、だって……」

視線がおかしい。

見ているはずなのに焦点が合っていない。

彼の身体が小刻みに震えていた。彼の身体に触ればその振動はクウルにも伝わって来た。

まるで、何かに怯えているような、震え。

「滅んだんじゃないなら、何で、あの時、赤妃様は……っ！」

「シエン？ ……シエンっ！ おい、どうしたんだ！」

彼は頭を抑えてその場に蹲った。

苦しそうに呻きながら頭を抑えている。尋常な様子ではなかった。目を見開き呼吸が酷く荒い。手を握るとその手が汗ばんでいることが分かった。

今にも死んでしまいそうな顔をしていた。

クウルは彼の肩を掴んで揺さぶる。

「シエン、大丈夫か？ おい、しっかり！」

「クウル、動かすな」

肩を掴まれ、クウルは自分の呼吸も荒くなっていることに気付く。

「……キイス」

キイスは離れると言うようにクウルの身体を押した。大人しく従うとミウルナがクウルの肩を抱いた。ちらりと見上げると彼女は大丈夫だという風に頷いて見せる。

キイスは彼の前にしゃがみ込み背中に手を当てる。

「大丈夫だ。無理に思い出すことはない。ゆっくり、息をしろ。落ち着いて、大丈夫だから」

その指示に従ってシエンは大きく深呼吸をした。

少しだけ呼吸が大人しくなったが、まだ荒い。

ぼそりと彼が呟く。

「……い」

「うん？」

シエンは下を向いたまま、口元を押さえた。

「……気持ち悪い」

「いい、ここで吐け。心配することはない」

言いながらキイスは彼の肩を抱いた。背を撫で、子供をあやすよ

うに抱きしめた。

「……………」

ぼそりとシエンが呟く。

クウルには聞こえなかったがキイスはそれに答える。

「大丈夫だよ、心配すんじゃないやねえって。俺がいつていうんだから
いいつつの」

「……………」

「謝る必要はねえっての。……………クー、カリア呼んでこい」

「あ、うん」

クウルは頷くとカリアを呼びに廊下へと出た。ミュルナもまたそれに付き添うように出てくる。

シエンのことは心配ではあったが、あの場にクウルが残っていても何も出来ない。

分かっているからこそ大人しく出てきた。

廊下を歩きながら横を歩くミュルナに話しかける。

「……………相変わらず手際いいよなあ、あいつ」

「やきもち焼いてるのか？」

「そーだよ。シエンは俺が拾ってきたんだし、キイスは俺の兄貴なんだ。やきもちくらい焼いたっていいだろ」

クチを尖らせるとミュルナは笑う。

「でもホツとしてるって顔だ」

「俺じゃどうしようもねーし。なんとかなって良かったって思うよ。

……………記憶喪失って思い出すの辛いモンなのかな」

「おれはなったこと無いから分からないが、あの様子じゃよほどな
んだろうな。とても演技とは思えない。どうやら思い出さたくない
記憶があるらしいな」

「あいつ、拾った時血だらけだったんだ」

クウルはあの時のことを思い出す。

血の匂いがして、動かない彼は既に死んでいるものだと思った。

「カリアも治療してたし、傷は結構早く治ったんだけど酷い怪我だ

つたんだ。まるで戦地から逃げてきたみたいだつて、カリア言った」

「右手の人差し指が無かったが、あれは？」

「一瞬で良く見てんなあ。アレは今回が原因じゃないみてえ」

彼の右手の人差し指はなかった。先天的にない種族ではないらしい。カリアの話しによれば、竜の状態で戦闘をして食いちぎられたような傷跡だという。それも随分と前のものではないかと。

気弱で泣き虫な彼を見ているととても戦闘出来るような風には見えない。

何故そんな傷を作ることになったのだろうか。

「謎な男だな。赤妃とも関わりがあったような口ぶりだったから、コラルにいた竜かもしれない」

「カリアも言つてた。ちゃんとした教育を受けてるから竜王か四方將軍出した経験のある家出身だろうつて」

「だが、ちゃんとした教育を受けてるなら何故ダイギア種が滅んでいるって勘違いをしたのかという疑問も残るな。おれたちの生存は飛翔王の時代に認められているって言うのに」

「動揺の仕方も普通じゃなかったよな」

ミウルナは頷く。

「だが、おれたちが生きていて不都合が起これると言う風じゃなかった。むしろ逆……いや、憶測であれこれ考えるのはやめよう。まずは何か思い出したことはないか、そこからだ。彼の記憶が戻らなければ始まらない」

「だなー」

レミアスから返答がくればいいのだが、来なければ彼が誰であるかを特定出来ない。クウルとしてはこのままで構わないが、シエンにしてみればそんな訳にはいかないだろう。それでも、何も分からない自分たちが憶測だけで騒いでいても変わらない。

今はただ、彼の記憶が戻ることを祈るしかなかった。

どの程度長い時間眠っていただろうか。

何かの気配を敏感に感じ取ったアグラムの意識は急激に戻ってきた。身体が酷く怠く動くのが辛い。目を開こうとして、片目が開けないことに気づいた。顔に指を這わせるとそこに深い傷跡があることが分かった。

既に塞がっていたが跡に残ったと言うことは、深く抉られたのだろう。アグラムの身体は傷を塞ぐよりも自分の生命を維持することを最優先にしたようだった。よほど消耗が激しかったのだろう。自分の身体に傷を残したのはこれで二度目だった。竜というのはそもそも快復力の高い生き物だ。怪我であろうが病気であろうが、その血が自らを癒し、よほどで無い限り傷は残らない。まして、生命を維持するために深い眠りに落ちるなどそうそうある話ではない。相当な時間を眠っていたのだろう。記憶の中で微かに雨に打たれていたことを記憶しているが、身体が濡れている感覚はない。体温が酷く落ちているのを感じる。

(……………くそ、どうなった?)

アグラムは半身を起こし傷の残った目を乱暴に擦る。

固化していた血がぼろりと落ち、僅かながら光が見える。

どうやら眼球まで持って行かれた訳ではないようだ。

「……………あいつは」

どこに行ったのだろうか。

腹部に攻撃を加えたのは覚えている。確かに自分の手はシェンリースの腹部を抉っていた。だが、あれが致命傷になったとはとても思えなかった。

あの程度で‘奴’が死ぬとは到底思えない。

(……………視界が狭いな)

アグラムは舌打ちをする。

戦闘にどれだけの影響が出るだろうか。人の姿ではどの程度、竜の姿ではどの程度の支障がでるだろうか。

「戦ってみねえと、分からねえな」

言った瞬間アグラムは地面に手を突き腕の力だけで高く舞い上がった。

刹那、無数の魔法の矢が地面へと突きたたった。

避けることも想定していたのだろう。矢は、空中にいるアグラムの心臓も的確に狙ってくる。瞬時に爪を竜の本来の姿に戻し、鋭くなった先でそれをたたき落とすとアグラムはにやりと笑みを浮かべた。

狙いは的確だった。

アグラムの反応が遅ければ魔法の矢は的確に急所に突き刺さり弱った彼の身体に致命傷を負わしていただろう。

気質は氷。

焔の気質を持つアグラムとはけしていいとは言えない相性の相手だ。

「怪我人を宣戦布告も無しに襲ってくるたあいい度胸してやがる」

地面に軽い身のこなしで降りたアグラムは魔法の矢が飛んできた方を見ながら笑う。

「……が、その程度の奇襲で俺の首が取れるとでも思ってるのかよ？」

「さすがは元西方將軍と言ったところだな。だが、そんな弱った体でまともに戦えるとは思えないな」

空から降り立ったのは銀髪の男。

背は高く細い。髪は長く後ろで編み込まれていた。服装からミレイルの竜だと分かるが見覚えはない。

だが、気配でそれが竜王候補の者だとわかる。

「俺が万全の時に、正々堂々と戦う気はねえようだな。そんな気弱な竜が、竜王候補とは落ちたものだ」

「何とでも言え。勝ち残った者が竜王となる。それがこの谷の定め。

だが、貴様のような悪夢のような男を竜王にする訳にはいかない。
今のうちに狩る」

自らの力を剣の形に造り替えた男はアグラムに向かって構える。
アグラムは獰猛に笑った。

「……てめえの神に祈りな」

それが合図だった。

男はアグラムに向かって斬りかかる。

その素早い動きに感心して口笛を鳴らした。

「いい動きだ」

眼前を男の剣が通過する。

避けながらアグラムも自らの力で剣を作り出す。

「力も申し分ねえ……っと、アブねえ」

剣を剣で弾きながらアグラムは口の端を大きく歪めた。

男は的確に急所を狙ってくる。

竜王候補と言うだけあって力は強い。強さだけで候補に選ばれるわけではないが、それだけで武器になる。技術も申し分ない。万全でないというのはいい訳にならないが、いつもより鈍い動きのせいで気圧されている感覚が新鮮だった。万全の状態のアグラムともそれなりに戦えたのだらう。

惜しいな、とアグラムは思う。

この男がもう少し経験を積んでいたのなら、アグラムはもっと楽しめただらう。

だが、駄目だ。

この男は、アグラムを理解していない。

経験が圧倒的に足りない。

アソニアの竜を、理解していない。

「無様だな。悪夢とさえ呼ばれた貴様が、抵抗も出来ず圧され通しではないか！」

「……」

「レミアスの竜と相打ちになれば好都合だったが、今ならば行ける。」

大人しく死ぬがいい、アソニアの！」

攻撃が激化した。

アグラムは男を見据えたまま攻撃を受け止め続ける。
ふわりと感じる戦の匂い。

(……………くる)

戦いの感覚で、この匂いで、感覚が研ぎ澄まされていく。内が熱くなり、身体が急激に体温を取り戻した。

幾度も味わった、あの感覚。

アグラムは視線を鋭くさせる。

「逝きな……………」

「っ！」

無意識だったのだろう。

男は攻撃する手を止め防御の態勢を取ったまま後ろに大きく飛び退いた。アグラムの剣がそれを追う。

「ぐっ」

男がうめき声を上げた。

アグラムは舌打ちをする。

「ちっ、鈍ってんな」

いつもなら一撃喰らわせることが出来た距離だ。だが、アグラムの攻撃は男に受け止められる。その防御を崩すことも出来なかった。予想外に自分の身体が消耗している。

だが、視界の狭さは特別苦にはならない。少し間合いが分かりにくい、視覚よりも身体が感覚を覚えている。

「人の身では殺れぬか！」

判断は間違っていないかっただろう。

男は自らの力を解放し、竜の形態を取る。鬣を持った白銀の竜はへビのように長い身体を持つ。ミレイルの竜は強い魔力を有し、自らの身体を巻き付けることで敵の息の根を止める。

強い竜だ。

だが、やはり男はアソニアの竜を、……………アグラムを理解していな

かった。

『どうした！ 成らぬのであれば人の姿のまま絞め殺すぞ！』

竜が叫ぶ。

彼の持つ冷気が少しずつ辺りを凍り付かせていく。

それを笑い、アグラムは低く言う。

「お前が失敗した事が二つある」

『……………！？』

「一つ、俺がシェンリスとやり合った事を知っているならば奴がまだ生きていることを知っているはずだ。にもかかわらず、俺を優先させた」

『あの大人しい竜が何だと言うのだ！』

「だから失敗なんだよ。あいつの価値も分からない。あいつを喰らえば、お前、俺に勝てたぞ」

『何を馬鹿な。あの程度の竜を喰らったところで、足しにはならん。手追いのうちに叩かねば成らぬのはお前の方だろう！』

くっ、とアグラムの口から笑いが漏れる。

「それが二つ目だ。お前は俺が『悪夢』と呼ばれる理由をただ強いだけと思いこんでいる」

『何を……………っ！』

「じつくり味わえよ、悪夢の味をよお……………」

静かにアグラムの翼が広がった。

それが、男にとっての『悪夢』の始まりだった。

第一章
了

挿話 黒鋼の竜 上

卑怯な手を使うのは好きじゃない。

けれど、子供の自分が正攻法で勝てる相手ではないことを知っていた。

「おー、何じゃ御主、どこからか紛れ込んだのかのう？」

男はしゃがみ込んで彼のいる場所を覗き込んできた。

漆黒の髪を持つ男だった。髪同様の漆黒の瞳は静かな印象の色にもかかわらず生氣に満ちて溢れていた。成竜であり戦士の体つきをしていた。勇健な体つきからは並はずれた生命力を感じた。

(……竜王アスカ)

少年は男を無言でじっと見つめた。

竜王アスカは異界で育ったと聞く。竜の全てを封印し、戦いを知らない世界で育ったという。けれど、星見達に谷に連れ戻されて以降、僅か一年ほどで竜王として即位を果たした。常勝王という号を聞くようにその強さは異常な程だと聞く。彼を守る周りのもの達が強く彼はうのと守られているだけだと批判する声も聞かれたが、アグラムは彼を本当に強い相手であると判断をした。

「身なりからアソニアの子であろうが……」

男は片手に酒瓶を持っていた。顔は仄かに赤くなっている。

濃度の強いものらしく、彼は酷く酒臭かった。

竜は人とは違うために普通の酒では簡単には酔わない。恐らく竜でも酔う玉酒を原液で飲んでいるのだろう。人であれば一口で気を失うような代物だが、彼はアグラムを見据えながら酒瓶に口を付けた。男の様子から既に相当量を飲んでいと推測出来た。

(もう一歩)

アグラムは距離を測る。

男は少し前のめりになつて無防備な状態でアグラムを覗き込んだ。苛立つほど平和な顔をしていた。

「どうした？　口がきけ……」

アグラムは爪を剣の形に造り替え、彼に斬り掛かった。

完全に捉えたように見えた。

だが、手応えはない。

アグラムは立ち上がり踏み込みながら切り返した。

「お、いかなぞ、いかな」

男はいいながら上体を反らし後ろへと後退していく。

距離は詰めているはずなのに当たらない。

攻撃を予測して最小限の移動しかしていないのだろう。アグラムの攻撃は当たりそうであたらない。

「いかなぞ、酒がこぼれるではないか」

この状況で男は酒瓶を気にしている。

その余裕が腹が立つ。

アグラムは標的を酒瓶に変える。

とたん竜王は動揺した様子を見せる。

「こ、これはいかな。これはシイナがわしの為にとわざわざ作ってくれたもので、一滴たりとも無駄には……」

彼は酒瓶を守りながら後ろにどンドン逃げていく。

アグラムは酒瓶への攻撃を諦めなかった。

動揺が足元に出たのだろう。ふらりと彼の身体が揺れる。

その隙をアグラムは見逃さない。

一気に間合いを詰めて彼に攻撃を仕掛けた。

だが。

「……！」

攻撃が空振りに終わった瞬間、アグラムは目の前にアスカの姿がないことに気付く。気配を感じるより早く強い力で真横に薙ぎ倒された。

抵抗も出来なかった。

一瞬のうちに床にねじ伏せられ、押さえ込まれる。

男の大きな手がアグラムの角を強く圧迫する。

呼吸が止まりそうな激しい痛みが全身を駆け抜ける。

「う…………あ…………」

男は片手で軽々とアグラムを押さえ込みながら、もう片手で落ちてきた酒瓶を掴む。酒瓶は床に押さえ込まれたアグラムの目の前で止まった。

ふうと彼は息を吐く。

「これは、危なかったのう」

「…………な…………せ」

「お、これはスマン。痛くするつもりはなかったのじゃが」
言うとおっさりとおグラムの身体を解放する。

すぐさまアグラムはその場から離れ間合いを取る。頭がくらくらとした。男は少し不思議そうにアグラムを見ているだけだった。

力量の差が甚だしい。

分かっていたことだ。

けれど、一撃も入れられないとは思ってもみなかった。

「しかし何故わしの首を狙う？ 御主のような子供に恨まれる記憶
など…………」

「…………殺せ」

「ん？」

「ひと思いに殺せ」

竜王の命を狙ったのだ。

間違いなく殺されることだろう。ならばいつそひと思いに殺して欲しかった。このまま生きて恥をさらすよりは格段にいい。

睨むように見ていると竜王は盛大に顔を顰めた。

その口から、聞いたこともない言語が飛び出す。

『ったく、どいつもこいつもこの世界の連中は殺せ殺せと人の命を何だと思ってるんだ。他殺願望でも自殺願望でもどっちでもいいか

ら、そんなのに俺を巻き込むなよな」

語調から腹を立てているのが分かったが、何と言っているのかアグラムには分からなかった。怒りを孕んだ声だというのに抑揚が無く、不思議な呪文を唱えているようにさえ聞こえた。

「わしには子供をいたぶる趣味などない」

「子供扱にするな。剣を向けた時点でおれは戦士だ」

「ならば戦士の道理に従え。わしは御主との戦闘に勝った。ならばこの時点でわしは御主を好きに出来る権利を得たということじゃ?」

「……………」

黙って睨み付けると彼は床に胡座をかいて座った。

どこか不機嫌そうに片方の膝に肘を突き頬杖を付いた。

「まずは名を名乗れ」

むっすりと彼を睨んでアグラムは答える。

男の意図は分からない。だが、従うより他にないようだった。

「……………アソニアの、アグラム」

「何故わしを狙った?」

「……………」

「どうした、答えぬか」

冷やかな視線だった。苛立ったように指先だけを動かす。

「……………お前は、おれの兄を殺した」

「いつの話じゃ?」

「黒翔歴32年真銀の月」

「真銀……………ああ、アソニアで騒ぎが起きた時か」

「俺の兄は先導していた一派のものだ。お前は竜の姿にすらならず槍で兄を殺した」

「なるほど、あの時の……………。御主にしてみれば兄の敵となったか。

これは済まぬ事を……………」

「違っ!」

アグラムは噛み付くように叫ぶ。

「あいつなんかどうでもいい」

兄との思い出は大した記憶がない。

ただ‘いた’という記憶があるだけだった。

「お前は竜にならなかつた。竜の誇りを傷つけた」

「その復讐だと？」

「違う。あの時、お前はおれを無視した。アソニアの誇りのために戦うと決めたおれに見向きもしなかつた。お前はおれの矜持を踏みにじつた」

殺してやる、と思った。

力量の差は歴然としている。だから勝てるとは思ってはいなかつたが、一撃でも食らわせるつもりだった。その身体に痛みという形で自分の記憶を植え付けてやろうと思ったのだ。

命を賭すだけの価値がそれにはある。

そうしなければアグラムは生きられなかつたのだ。

男は驚いたような顔でアグラムを見つめる。アグラムは射殺すつもりで彼を睨め付けた。

突然、男の口から破裂音のような奇妙な音が漏れる。

「なっ………!!」

竜王は口元を押さえ肩を震わせ始める。やがて耐えられなくなつたのか、大声を立てて彼は笑い始めた。

「あはははははははははははははははっ!!」

「な、なっ………」

アグラムは顔に朱を登らせた。

「こ、この上更に愚弄するか!」

「ちがつ………す、すまん………いや、御主を馬鹿にするつもりなど更々ない」

ひとしきり笑って、ようやく一段落付いたのか、彼は指先で涙を拭いながら彼は呼吸を整える。

やがて少し真面目そうな視線をアグラムに向けてきた。

「誇りというなら済まぬ事をした。じゃが、あの場の平定にはわし

が人の姿で圧倒せねばならなんだ。流れる血は最小限の方が良い」
戦の種と言われるアソニア種らしからぬ言葉だ。

伺うようにアグラムは男の瞳を見る。

黒い瞳には人を蔑み楽しむような色は含まれていない。ただ、真
っ直ぐだった。

「小戦士、わしは戦うことが好きではない」

「……」

「正確にいうなれば、試合としての戦いは好じゃが、命のやりとり
をするのはとてもじゃないが慣れぬ。わしが育った異界は平和な国
だった。テレビで殺人を報じることも多くあつたが、それは異常な
ことじゃった」

「てれび？」

「遠くの出来事を伝える魔法の箱じゃよ。……わしの故郷ではのう、
いかな理由があろうと人が人を殺すことを禁じていた。試合以外で
の戦いも禁じていた」

「なら、どうやって王を選ぶ？」

「民が選ぶのじゃ。わしのところにいたのは王ではなかったがの、
指導者という意味では王のようなものだったじゃ。国の中枢まで
は選ぶ事はできなんだが、どの人物なれば民意を正しく中枢まで持
つていってくれるかと各地で、多数決’をしての、代表を選び国を
成り立たせていったのじゃ」

「……世襲ではなく、選ばれた領主達が沢山いたってことか？」

「そう、御主は頭の回転がはいようじやの」

にっとなつて彼はアグラムの髪をかき混ぜるように触った。

払いのけようとしたものの、何故かその手が心地いい。

アグラムは嬉しそうに笑うアス力を黙って見つめた。

「選ばれた者達がさらに一番上に座るべき者を選ぶ。無論個人の思
惑が絡むことはあつたが、そうして長い間機能してきたのじゃ。……

……わしはそういった血を流さない、常識’の中で育ってきた。今で
こそこちらでの生活の方が長くなつたが、やはりどうにもこちらの

「常識」には慣れぬ」

本気でそう思っているのだろう。

彼の声からは現実に対する失望のような色が垣間見えた。

「竜の誇りとやらも理解しなくてもないが、わしはわしの信念を変えつつもりはない。まして他人の矜持を守るために子供をいたぶるなんて、クソ喰らえ」じゃ」

いいながら彼はアグラムを抱き上げ、自分の膝の上に座らせる。

「子供は子供らしく守られておればいいのじゃ。わしを憎むならそれでいい。じゃが、今剣を向けて死を急ぐ必要はない。……御主、兄を失い自暴自棄になったのではないか？」

「……っ」

「御主と兄とでは随分年が離れていただろう。或いは唯一の肉親だったのではないか？」

「……」

「理由をつけなければ生きること死ぬこともできなんだ。それ故わしの元へと来た。もとより勝つつもりのない勝負は己の手で己を殺すのと大差ない。分かっているからこそ誇りという大義を付けてやってきた」

「……お前に、何がわかるんだ」

彼はアグラムを撫でながら優しく笑う。

「家族に二度と会えない寂しさは知っておるよ」

アグラムはきつく目を瞑って男の胸元に拳を叩きつけた。

男の身体に響く音が振動として自分にも伝わってくる。もう一度アグラムは男に拳を叩きつけた。

何をしたいのかわからない。

酷く気持ちが落ち着かない。

その気持ちをぶつけるように何度も彼を殴っても、彼は怒らなかつた。ただ、アグラムを抱きしめる。

「それでいいのじゃよ」

暖かくて居心地が悪い。

それなのに何故か、ふりほどけない。

その腕は、力強く優しかった。

挿話 黒鋼の竜 下

コラルの城の敷地内に入れば、その気配は更に強くなった。

強い気配を辿れば男がどこにいるかはすぐに分かった。

大きな翼を羽ばたかせゆっくり旋回するように降りていく。警備の者達がちらりと見上げてきたが、すぐにその竜がアグラムだと分かっていたのだろう。その存在を気にすることなくすぐに元の職務へと戻っていった。

アグラムは更に旋回して中庭へと降りていく。竜の巨体で降りても支障のないほどの広い庭は竜王の王妃が管理をしている庭だった。アグラムを待つように女が自分を見上げているのが分かった。

赤い癖毛を持つ若い女。号を赤妃という。

アグラムは地上に降り立つとすぐに人の姿へと変えた。

「お帰りなさい、アグラム」

「ああ」

女に言われアグラムは無表情のまま頷いた。

赤妃は優しい微笑みを浮かべる。幻のように儚く、触れてしまえば壊れてしまいそうなのに、とても強い。

彼女はとても竜には見えない。その血からは確かに竜の気配がする。けれど、どんな種類の竜とも違う気配がするのだ。

アグラムはその理由を多分知っている。

直接聞いたことはないけれど、そうなのだと思う。

彼女が人前に滅多に姿をさらさないのも、髪を赤く染めているのもそれが理由。

「アソニアはどうだった？」

「いつもと変わらない」

短く答えると彼女は更に笑みを深くさせた。

「そう、楽しかったみたいね」

楽しかったとは一言も言っていないと言いつ返そうとしたがやめた。この人相手には何を言っても無意味のような気がしている。

アグラムはあれからアスカの保護下に入るようになった。忙しい彼とはそうそう会えるわけではないが、この庭まで自由に出入りしていいと言われている。当初は赤妃の話し相手という形で迎え入れられていたが、最近になつて赤妃を守る私軍として迎え入れられた。子供の角は抜け、大人の角に生え替わりつつあるもののアグラムはまだ成竜ではない。異例の人事だったが、アスカの周りに来れば来るほどアグラムを否定する者は少なかった。アスカ自ら戦い方の指導をしているためにアグラムは強い。そのことを多くのものが知っていたからだ。

「……ジジイは？」

「向こうで本を読んでいるわ。……行つてきたら？ あとで貴方の分も霊酒、持つていくから」

「ああ……」

軽く背中を押されてアグラムは気配のする方へと向かった。

庭の端の方に立てられた白い小さな休憩所の中に彼はいた。アグラムの気配を感じているというのに警戒する様子も振り向く様子もなく本を読み進めている。

アグラムは黙ったまま彼と背中合わせになるように腰を降ろした。ここにいる時の彼はいつも酒の匂いがする。竜王としての立場を考えれば褒められた事ではないが、ここにいる時の彼は竜王としてではなく「アスカ」としているのだ。そのくらいの自由は構わないだろうと思う。

アスカは本を閉じて傍らに置いた。

「アソニアはどうじゃった？」

先刻彼の伴侶にも同じ事を聞かれたばかりだ。

「別に何も」

「レミアスは？」

「……変わりない」

「御主の盟友殿は？」

「……」

アグラムが無言で後ろに手を伸ばすと、冷たい瓶を手渡された。中には琥珀色の靈酒が入っている。

赤妃が自らの力で作り上げたものであり、この技能を持った竜はあまりいない。元来それは精靈族が得意とする術なのだ。繊細な術であり、竜族が同じ事をしようとしても宝石のように硬くなってしまふ。稀に綺麗な靈酒を作る竜もいるが、赤妃の技能にはかなわないだろう。その靈酒は彼女にしか作れない繊細な味をしていた。

靈酒に口を付けると、爽やかな味が口の中に広がる。仄かに高級な蜜のような香りもする。

アグラムは香りを味わいながら彼に寄りかかった。

「相変わらずむかつくし、変な奴だった」

「その仲良しの彼とは仲直り出来たのかのう？」

「気色悪い言い方すんじゃねえ。別に……ケンカなんかしてねえよ。ただ、その……色々意見が食い違ったただけで……」

「仲良し、というのは否定せ……」

「くたばれジジイ」

間髪入れずに言うつくすくすと彼が笑う。

「酷い事を言う子供じゃのう。年寄りを大切にせいとあれほど教えたののう」

「てめえのどこが年寄りだ」

「わしの故郷ではわしの年齢で生きていたらそれこそ凄い長寿者じやよ。‘ギネス’も余裕じゃな」

「ぎねす？」

「様々な世界一を記録した本じゃよ」

「ふうん……」

時々彼はアグラムの知らない言葉を口にする。聞いたこともない不思議な響きの言葉は異界の言葉なのだろう。

意味も分からない言葉だけど、その響きは嫌いじゃない。

「それで、ちゃんと話はできたのかね？」

「……たぶん」

「多分？」

「話にした。言いたいことは言った、あいつの話しも聞いた。あいつが馬鹿で変な奴って事を再認識した。それだけだ」

レミアスで知り合った竜はアスカの知人の子だった。同年代と言うこともあって仲良くなるだろうとアスカが引き合わせたのだ。だが、彼とアグラムは正反対の性格だった。すぐに仲違いするだろうと周囲は認識していたようだったが、アスカの判断が正しかったと思う。度々衝突をしたものの、何年もたっても交流が続いている。

結論の付け方が異なっても、おそらく根本的な考え方が似ているのだ。だから余計に腹が立つ。

「やはり、御主にしては珍しく本気で信頼しておるのじゃのう」

「何でそうなるんだよ」

「御主が相手をきちん認識しておるからじゃ。御主は興味のない相手にそう語ったりはしない。まして評価如何はともかく、御主自ら出向いて話をしにいったんじゃ。信頼が無ければできん」

アグラムはむっすりとする。

「ジジイが行けて言ったんだろ」

「御主は己が納得出来ないことは死んでもせぬ。わしに言われたからって納得出来ないなら行かなかつたじゃろっ？」

「勝手に決めつけるな。殺すぞ、ジジイ」

「わしはまだ御主に殺されるほど衰えてはおらぬ」

「なら自力でとっとくたばれ」

「無茶をいう子じゃのう」

呆れたように言ったが笑っているような振動が背中から伝わってくる。本気で言っていないと思われているのだろう。

それがどうにも腹立たしい。

本気だったとしても今のアグラムでは彼にはかなわない。初めて彼に襲いかかった時頼も実力も経験も積んでいたが、それでも戦っ

て勝てる気がしなかった。実力的な意味でも、別の意味でも。

「まあ、何はともあれ御主にも良き友が出来て良かったのう」

「誰が誰の友だ」

「友人や恩人は大事にしておくものじゃよ。……おお、そうじゃ、言い忘れておった」

「……なんだよ」

優しい声で彼が言う。

「おかえり、アグラム」

改めて言われ、アグラムは少し口元に笑みを浮かべた。

「おせーよ……」

了

コラルの南側にその屋敷はあつた。

現在赤妃が深い眠りに就いているため、四方將軍は空席状態にあつたが、この屋敷を居とする女主人レシエは普段、南方將軍キリス・ヴェナの号で呼ばれることが多い。四方將軍は竜王により選ばれ、東西南北の守の要となる。

四方將軍は代々同じ名前で呼ばれる。強い竜の名前を受け継ぐのが誉れとされる竜の谷では四方將軍の名を嗣ぐのが竜王に選ばれることの次ぎに名誉とされている。その中でもキリス・ヴェナは必ず女性であることがきめられており、赤妃により選ばれた彼女はコラルで最も優秀な雌竜と言われている。

彼女は自分の屋敷の庭に舞い降りるとすぐに人の形を整えた。淡い緑の髪をした成人女性であつた。

すぐさま家人が彼女を出迎えに走る。

彼女は硬い表情で魔法繊維で作られた外套を女に預けた。

「あの悪魔が生きていたって本当？」

厳しい声で言うつと女が答える。

「悪魔、かどつかは別として、あの方が生き残つたのは本当ですよ」
レシエは少し舌打ちをする。

「あの男すら仕留め損なつたのね。……大方情に流されて攻撃の手を緩めたんでしょう」

「彼に限つてそれはないと思いますが……」

「ノアは知らないから言うのよ。あの馬鹿には時々そう言うところがあるのよ」

ノアと呼ばれた女は少しだけ青ざめた。

「レシエ、仮にも竜王候補です。馬鹿呼ばわりは……」

「あんな野郎、馬鹿で十分。あの悪魔みたいに屑じゃないからまだマシよ」

二人の竜王候補を馬鹿と言い切り、レシエは号ではなく本当の名前の方で呼ぶ女の方を見た。

「で、どこからの情報よ？」

「コラル城からです」

「わざわざ情報を届けてくれたの？」

「レシエが何度も問い合わせているから気を使って下さったんでしよう。貴方がお二人に因縁あることは周知の事実ですから」

「……まだ私がそんなことにこだわっているとでも思っているのかしら」

不満そうに言うとノアはにこりと笑う。

「気にされているのは事実でしょう」

「やめてよ。事実だから余計に癪に障るわ」

言いながら彼女は廊下を歩く。

レシエは南方將軍として城にいた。南を守り、コラルを守り、赤妃を支えてきた。赤妃が戦わずして王になったとは言え、彼女を見れば支持するのが当然のように思えた。当時、四將軍に選ばれた全てが同じ判断をした。

誰が何を言おうと、赤妃は竜王だった。少なくともその役目は果たされていた。

(でも……)

レシエはノアを振り返って睨め付ける。

「言っておくけどね、私がああ肩にこだわるのはそんなんじゃないからね」

「そんなん？」

少しからかうように聞いて聞いてくる彼女から視線を逸らし、レシエは息を吐く。

「私はあの悪魔を竜王にしたいだけ。なんであんな奴が竜王候補なのかしら」

あんな悪魔のような男が竜王になってしまえばこの谷は滅ぶ。分かっているのに手出しは出来ない。レシエが竜王候補に選ばれてい

ないからだ。選ばれていたのであれば真っ先に彼を殺しに行つてい
ただろう。

「……やっぱり私が殺すしかないのかしら」

ノアが息を呑むのが分かった。

「私なら、まだ殺せるかも知れないわ」

「いけません、レシエ、そんな恐ろしいことを」

「あいつが、竜王になる方がもつと恐ろしいわ」

「ですが、竜王候補を候補でない貴方が殺してしまえば道が傾きま
す」

「もう傾いているのよ。……あいつが飛翔王を殺した時から」

声を低くして言うとノアの口から小さな悲鳴が漏れた。

誰かにきかれたらどうするつもりなのかと彼女は小声で言う。

「聞ける範囲に誰もいないわよ。何のためにいつもここに貴方以外
は入るなって言っていると思ってるの？ キリス・ヴェナとしてな
ら親友に愚痴もいえないじゃないの」

レシエは腰に手を当てて、家人であり自分の古くからの親友に不
機嫌そうな顔をしてみせる。

「飛翔王は殺されたのよ。腹心と思っていた人に」

震える声でノアは言う。

「……アスカ王は死んでいません」

「死体が見つかっていないから？ それともあの時コラルの時が大
きく揺らいだから？」

「両方です」

「確かにそうよ。でも、あれほど力のあった人が、何故戻ってこな
いの？」

「それは……」

ノアは黙り込む。

コラル城内にいた者の中で、先代王アスカに近い場所にいた者ほ
どアスカは死んでいないと信じている。アスカの死体は見つかって
おらず、あの時大きな時空の歪みがつまっていたからだ。幼い頃の

アスカがそうであったように狭間に落ちてしまったのだという者もいる。だが、まだ成竜になっておらず力の不安定だった子供の頃とは違い、竜王となったアスカには自力で戻れる力があるはずなのだ。それなのに何故戻らないのか。

答えは最悪な所に行き着くしかない。

「あの悪魔が殺したのよ」

少なくとも飛翔王はもう王として谷を収めるのが難しい。だから赤妃が立ち、選定がはじまったのだ。

もっと早くその異常さに気付くべきだったと思う。レシエたちが真実に気付いた時は既に赤妃が眠った後だった。竜王アスカが谷から消えた日、狭間への道を開くのも閉じるのも竜王を除けばあの日の場所に一人しかいなかった。赤妃が眠るまで気付かなかったのは自分たちの落ち度だろう。それだけあの男のことを信頼していたのだ。それが何より腹立たしい。

そして事実気付いた時には既に男は竜王候補として選ばれた後であり、レシエたちが容易に手を出せない状況になっていた。

竜王候補を殺せるのは竜王候補だけ。

それは谷が始まって依頼決められてきた事。破れば谷は大きく歪んでしまう。歪みは竜を狂わせ、さらなる歪みを生む。だから星見たちは慎重に竜王候補を選ぶのだ。

自分が選ばれなかったのは仕方のないことだとレシエは思う。レシエは自分を竜王に向いているなどと思っていない。だが、彼が選ばれたことは異常な事に思えた。何度事実かどうかと星見に確認しても、帰ってくる答えは同じだ。

彼は竜王候補なのだ、と。

「あの屑を殺せば歪むかも知れない。私は十中八九確実に死ぬわ。でも、あいつを王にするよりマシ」

「レシエ……」

「あいつはどこにいるの？」

「……」

「教えて、ノア。私に命令させないで」

レシエが南方將軍となつて五十年ほどになるだろうか。自分と同じように武人としての道を選ばなかった親友は、家人という形で自分を支える道を選んでくれた。二人でいる時は二人は親友であり、キリス・ヴェナの名前を振りかざして命令したことは一度もない。それをやってしまえば、二人の友人関係は終わってしまう気がした。

だから、彼女に命令はしたくない。

彼女も恐らくされたくないだろう。

彼女は息を吐いた。

「……どうか一度あの方と話をしてください」

「……………」

「約束をして下されば場所を教えます」

彼女に聞かなくてももう一度コラルに聞けば居場所くらい分かるだろう。だがここで、否と答えれば今度は自分の命を盾に脅迫してきそうだった。物腰が柔らかく誰に対しても丁寧な人だが、ノアは時々こうした態度をとる。

仮にレシエが竜王だったとしても同じ行動を取るだろう。だからかわないと思うし、親友だと思つていいのだ。

それでも気にいらなそうにレシエは仏頂面で答える。

「分かつたわよ。でも、話が出るかどうかあいつ次第よ」

ノアはほっとしたような笑顔をつくる。

「……フェリアルト領です」

「え……、子竜殺し？」

シエンは少し戸惑った声を上げる。

キイスはシエンの向かい側に座り、難しい顔で頷いた。傍らに立つミュルナも難しそうな顔をしている。

「ああ、先だってまだ幼い竜が殺された。武器で角を壊され即死だった」

「どうして……」

竜が竜を殺すというのは尋常な事ではない。竜は戦神と言われるように戦う生き物であり、戦闘であれば殺し合うこともあり得る話だ。だが、一方的に殺すというのは考えられない話だ。

子供の竜ということは戦うこともままならないだろう。まして角を壊して即死と言うことは最初から殺すことだけが目的で襲ったと言うことになる。正気であるとはとても思えなかった。

「犯人がまだ分かっていないんだ。だから無論動機もだが、もう一度事件がおきねえとも限らない」

「あつ……」

そう言うこと、とシエンは納得をする。

突然話があると呼ばれ少し前に子供の竜が殺されたと彼は話した。何故そんな話を突然し出したのだろうと訝っていたが、犯人が分かっているのだと聞いてすぐにシエンは納得する。

彼はクウルのことを心配しているのだ。

「お前に頼めることじゃないが、お前の記憶が戻るまでの間お前の面倒を見る代わりに少しだけ気に掛けてやって欲しい」

「今はクーが外に出る時はおれの隊のやつが付いているが、そうそう一緒にいさせる訳にもいかないんだ」

それはそうだろう。

ミュルナはフェリアルト守衛隊の小隊を指揮する。小隊とは言っ

てもフェリアルト邸周辺を守っているのは彼女の隊だと聞いた。竜の姿を見たことはないが、古竜デイギアの竜であるのなら美しい姿をしているのだろう。そして恐らく強い。

そんな彼女の隊は何かがあれば真つ先に動かなければならない。いくら領主の息子で、領主代理を務めるキイスの弟だったとしても優先する訳にはいかない時がある。守衛隊はクウルを守ることが仕事ではない。

「四六時中一緒にいるなんていわねえが、なるべく一緒に行動してくれると助かる」

「あ……えつと」

シエンが声を上げると彼は視線を寄こした。

「何だ？」

怒られている訳ではないのに、強い調子にシエンは少しびくりとする。

「あ、えつと、あの……」

「ああ？ 何だ？ 言いたいことがあるならばつきり言えよ」

苛立ったように言われシエンは少し怯える。怒っている訳ではないだろう。だが、言いようのない不安感に襲われた。

何故怖いのだろう。

キイスはシエンをどうこうする気などないだろう。怯える必要なんかどこにもないはずだ。

それなのに、怖い。

何故かを考えて、突然、腹の底からわき上がるような恐怖感を覚えた。吐きそうな程の恐怖感。

涙がこぼれた。

「ちょっと待て、てめえコラ、なに泣きだしてるんだよっ！ 泣くところじゃねえだろうがっ！」

キイスの語調が怖いのは確かだ。だが、それでどうしてこんな異常なほどの恐怖感を覚えるのかが分からない。

「い、いめ……」

「謝るんじゃねえっ！」

キイスの言うとおりでと思う。泣くような場所ではないし、それに対して謝るべきことでもない。涙を堪えようとしたが、止めどなく流れてくる。

「お前っ」

「キイス、少し待とう」

「ミュルナ……」

「お前も、落ち着いたらゆっくり話せばいい」
「……はい」

言われて少し落ち着いてくる。

息を吸って吐き出すと溢れる涙が止まった。
指先で拭ってようやく声が出た。

「あの……僕を、疑わないんですか」

不快そうに彼の眉が顰められる。

「疑うなあ？ てめえ……」

「……キイスっ！」

「あっ、いや、悪い」

ミュルナに窘められキイスは、ばつが悪そうに頭を掻いた。

「べ、別に怒ってる訳じゃねえよ。……お前は疑われてえのか？」

シエンは慌てて首を左右に振る。

「一応確認するが、お前犯人か？」

「えっ、違うっ！ ……その、たぶん」

「多分？」

「……覚えてないから」

自分のことをまるで覚えていない。この屋敷で目が覚めた時より前のことを思い出そうとすると気持ちが悪くなる。苦しくて吐きそうになるのだ。

何者であるかまるで分からない。服装からレミアス出身というのは分かった。武器に刻まれた消えかけの文字から、シエン、という名前ではないかと推測出来た。でもそれ以上のことは分からない。

レミアスに書簡を送ってくれたらしいが、返事は戻ってきていない。自分が覚えていないだけで、もしかしたら子供の竜を殺していたかもしれない。

そう考えると不安になった。

くすりとキイスが笑う。

「ばーか、何不安そうな顔してんだよ」

「……」

「記憶無くす前のお前は知らねえけど、今のお前は子供殺すような奴じゃねえよ」

シエンは彼を見る。

笑みを浮かべた彼の表情は優しい。本気でそう思っているような顔つきだった。

「どうして……」

「どうしてって言われてもな……」

少し困ったようにキイスは言う。

「寝食共にすれば、家族、だろ」

「家族……」

「記憶を無くす前のお前は知らない。だが、ここ数日間だけだが、お前の事は知ってる。少なくともお前は自分が極限の時に人の部屋で吐いて迷惑を掛けるのを心配するくらい良識のある奴だ。悪い奴には思えねえよ」

それだけのことで、とシエンは少し不思議に思う。

それだけのことで記憶喪失という怪しげな自分を受け入れられるのだろうか。傷を負って倒れているだけでも怪しげだろう。まして都合良く記憶喪失になっているなんて、とてもじゃないが不審人物だ。ふりをしていればどうとでもなる。何か聞かれても都合の悪いことになれば「記憶喪失」を理由に知らぬふりも出来る。

何故この人はこんなにも簡単に信じてくれるのだろう。

自分なら到底「記憶喪失のシエン」を信頼なんか出来ない。

「あ、あの……」

「ん……」

「その、もし僕が……」

言い差した時だった。

気配を感じて三人は一斉に窓の外を見た。

誰かが竜化した。

しかも気配が近い。おそらく町中で竜の姿に変化したのだ。それほどこの領地でも禁止されている事だ。町の中は人の姿でいるのが原則とされている。正気であるようには思えなかった。それに。

(……何、この感覚)

全身が粟立った。

竜の濃い気配。濃い血の匂い。

その気配を感じて身体中の血が沸騰したように熱くなった。

ミウルナとキイスは窓の側に駆け寄り状況を確認するように外を指差した。

「あそこだ！」

キイスの声に被さるように何かの破壊音が響く。

シエンの位置からも立ち上る煙が見えた。

「フェリアルトの竜だな。気質は磁……くそ、俺と相性は良くねえな」

「そんなことを言ってる場合じゃない。行こう、キイス。被害が出る前に止めなければ」

「ああ」

「それは駄目だ」

言つと怪訝そうに二人が振り返った。

感覚が研ぎ澄まされていく。

傍らに置いていた剣を握るとますます研ぎ澄まされる感覚になった。

「君たちがあの竜を殺してはいけない」

「……どういう意味だ？」

「シエンは息を吸い込む。
あれは、竜王候補だよ。」

フェリアルト城下は他の土地の城下よりも雑然としている場所だろう。

鉱山のフェリアルトと呼ばれるだけあって魔法武器の材料になる鉱石が多く産出され、それによって栄えた場所だと言われている。現在も採掘が行われているためフェリアルトの竜は屈強な人が多い。また鉱物によって武器を鍛えている為に職人も多いのも特徴だった。職人街を歩きながらクウルは露天で売られている武器を手にとった。

「俺としてはだよ、こういうのもいい訳ですよ」

「んー、坊にはあわないと思いますよ。武器は自分にあつたものを選ばないと」

後ろを歩いていったセイムはのんびりとした口調で言う。

ミウルナの隊で働くセイムは戦闘がない時はとてもものんびりとした性格をしている。フェリアルトの竜らしく体つきはいいものの、キイスのように大柄という印象は少ない。青い髪を編み込んでまとめている。爽やかな印象のある男だった。

「でもさー、俺は竜になれねえからさ、武器なんてどうでも良くないか？」

「竜になろうとなるまいと自分の身の丈にあつたものじゃないと扱えませんかよ。あと、自分に同化させられないと持ち運び不便ですよ」

竜族は人の身体と竜の身体の両方を持つ。それは表と裏であり、竜族は自分の意思で変化させることが出来る。人の姿に慣れていない子供の竜は上手く出来ないが、成竜にもなれば身体の一部を竜の状態に変化させて戦うことも出来る。そのため武器は必要ではないのだが、竜の身体は魔力を消耗しやすい。多くの竜が普段は人の姿でいるのもそれが理由の一つだった。

消耗しやすい竜の身体に戻るよりも、武器で戦った時の方が効

率がいい。そのため多くの竜は武器を持つ。魔石を使って作った武器は自分自身にあったものであれば竜に変化した時に同化させやすい。好んで剣を腰に下げて歩く者もいるが、自分の魔力と近ければ人の姿でいる時も同化させていれば持つている事が出来る。衣服も同様に魔法繊維で作っており、竜に変化した時に同化し破けることはないのだ。

竜族の持ち物は自分にあったものをあつらえていくのが基本だ。露天で売られているものは誰かの遺品であつたりするために自分専用の武器には成り得ない。竜王剣ほどの魔力を有する剣ならともかく、よほど血筋に近い人のものでなければ他人の武器を使いこなすのは難しいと言われている。普通に人間が使うような剣としては使えるため獣狩りには十分使えるが、竜同士の戦いには同化できるものではないと向かないそうだ。

「同化ねえ」

クウルは持っていた剣を見る。

少し自分の魔力を注いでみるが反発して戻される感覚があつた。これは同化出来ない剣なのだろう。

「俺戦う気ねえし、練習用の木刀でもいいんだけどなー」

「駄目ですよ、坊。最近は不安定でいつ何が起きるかわかんないんですよ。せめて咄嗟に身を守るだけの武器を持ってないと危ないです。今日こそあつた武器を探しますよ」

「へーい」

気の抜けた返事を返してクウルは歩き出す。

ここ数日こうして町に連れてこられるのは武器を探すためだ。前々から持っているようにとキイスに言われていたが、もつ気にはなれなかった。竜同士の戦いの為に剣をもつなんて嫌だと思う。訓練での戦いは好きであるけれど、命のやりとりをする戦闘は好きになれない。

切られれば痛いし、死ぬこともあるのだ。

そんなの、楽しくないだろう。

「どうせ持つならさ、ばーんと派手で、でーんとしてて、武器見ただけでみんなビククリして逃げるようなのがいいよな」

「んー、なかなかないですよ、そんなの」

「セიმならどんなのビククリする？」

「そりゃやっぱり竜王剣ですよ。あれ持っている竜に戦闘申し込まれたら敵前逃亡したい気分になりますよ」

「じゃ、それがいい」

セიმは笑う。

「無理ですって。竜王剣は竜王が東方將軍に渡す武器ですから、東方將軍にならないともてませんよ」

「東方將軍ってどうやってなるの？」

「竜王が任命するんです。沢山戦って沢山功績積んだ竜じゃなきゃなれません。坊は戦うの嫌なんでしょ？ だったら無理ですね」

「そっかー。じゃ、他にねえの？」

「んー、強いて言うならアレですね」

言ってセिमが指差した場所にはキイスよりも巨大な剣が突き刺さっている。フェリアルト城下の職人街を見下ろすように高い場所に飾られている。

過去、竜王リヒトが使っていた剣と言われている。

「あれって本物なん？」

「らしいですよ。抜けたらその人のものらしいです。迅雷王の剣が自分の剣って格好良いじゃないですか。アレ自身、そうとうな魔力をもっているらしいですよ。竜王剣に並ぶくらいの。だから、自分も小さい頃ためしましたし、この辺の子供はみんな一度はやってますよ。勿論抜けませんでした」

「ふーん、リッヒーってさ、俺のご先祖様だろ？」

「そうですね、フェリアルトの竜は迅雷王の末裔と言われてますから。中でも領主家は一番濃い血を引いているみたいですね」

「じゃ、抜けるかもしなくね？」

「ああ、やってみます？ キイス様も昔試したって言ってましたし」

クウルはにいと笑う。

これでクウルに抜ければキイスをからかうネタになる。そして持っていれば戦闘を仕掛けられても相手がビックリして逃げるような代物だろう。

何しる伝説の「迅雷王リヒト」の持ち物なのだ。

「よし、じゃ、ちよつと行ってくる」

「気を付けて下さいねえ」

セイムの声を聞きながらクウルはしゃがみ込み身体に魔法をまわりつかせた。大地を蹴り高く舞い上がると同時に魔法を発動させ、より高い場所へ舞い上がる。

魔法を使う時、いつも不思議な感じがする。

一瞬自分が自分でなくなるような感じがするのだ。それなのに不思議と嫌悪感を覚えない。懐かしいような、暖かい感覚。そして時々何故か酷く寂しくなる。それは、多分、自分の身体が竜になりたがっているという感覚。

それを感じてしまうために魔法を使うことが好きか嫌いかわく分からなくなる。誰に相談しても分からないだろう。この感覚はクウルにしか分からない。

クウルは剣の突き刺さった台座へと降りる。

剣はクウルの身の丈の倍以上あった。

呆然とクウルは見上げる。

「でけー、こんなん、使っていたリヒトってどんなでかい竜なんだ？」

「ぼーん、抜けそうですかー？ 風が強いから気を付けて下さいねー」

下の方からセイムの叫び声が聞こえる。

クウルは叫び返した。

「今やってみる！ 万一おちたら受け止めよろしくなー」

「だから、気を付けてくださいってばー」

にへら、と笑ってクウルは剣を見つめる。

抜くつてどうすればいいのだろう。大きすぎて引っ張りようもない。

取りあえずクウルは抱きついてみた。

「……………」

一瞬、脳裏に何かが浮かぶ。

クウルそれを見ようと集中するために目を瞑った。脳裏の感覚が少しだけはつきりとする。

(……………なんだろう……………広い水)

暗い場所。

漠然と水があるように感じる。

(うみ、だ……………)

クウルは思う。

海というのをクウルは見ることがない。本の知識で知っている程度だ。けれど、それははつきりと海とを感じる。

広く広大な海。

始まりと終わりの場所。

(……………冥府の混沌……………魔法の……………海)

ぼん、と誰かが呼ぶ。心配したような声だったが、クウルにとってこの海の方がもっと重要だった。

海がある。

そこからゆっくりと何かが出てくる。

それは、金の、

「坊っ！」

「……………」

セイムの叫び声を間近で聞いてクウルははっとした。

刹那、強い爆風に襲われる。

後ろにセイムの気配を感じた。クウルはセイム抱えられた状態で大きく吹き飛んだ。衝撃の後、ようやくクウルは目を開いた。

酷い頭痛と耳鳴りを覚える。

「てえ……………」

「坊、大丈夫ですか？」

「……………セームは？」

「平気です」

「……………一体、何が」

「坊があれに触れた時から光り出したんです。にしても、本当に抜いてしまうなんて思っても見ませんでした」

「ざわざわと周りがざわめいている事に気付く。」

「抜いた？」

「抜いたんですよ、坊が。全部じゃないみたいですけどね」

「右手に少し重みを感じた。」

「視線を向けると自分の腕の代わりに金色の物体がくっついている。」

「な……………っ、何だこれ……！」

右手はクウルの右手ではなかった。右腕全体に金色の物体になってしまっていた。それは広く伸び、ささくれ立つようにいくつもの鋭い刃が出来ている。

動かそうとしても思うように動かない。

クウルはクウルを抱えたままの状態になっているセイムを見上げる。

「お、俺の腕どうなってんの？」

「多分迅雷王の魔力と同化してるんです。坊、何でもいいから武器を想像して変わるように念じてみて下さい」

「武器、武器、武器、武器……」

クウルは頭の中で考える。シェンの剣を一瞬思い浮かべたが、すぐに変える。キイスが振り回すような大きな斧。

ああいうのがいい。

微かに右手に魔力が宿るのを感じた。

「おっ？」

微かに光を帯びた右腕から、金色の物体が溶け出すように下に落ち。やがて形を作り始める。

クウルが想像していたような大きな斧の形。

「おー」

クウルは跳ね上がるように起きて斧を振り回す。

「セイム、見て見て！ これすっげー軽い。しかも金ぴかだった

ー！」

セイムは驚いたようにクウルを見る。

「驚いた、すぐに使いこなすなんて……」

「えー？ 何か言ったか？」

「凄いつて言っただんです。坊にはどうも凄い才能あるようですね」

「そうなん？ キイスやシエンに自慢できっかな？」

「出来ますよ。坊、多分ですけど迅雷王の武器のなから自分に必要な分だけ引き出してきたんです。そういう芸当出来る竜なんて、そっいません」

「おー、俺スゲー」

クウルは斧の感覚を確かめるように振り回してみる。まるで自分の手を動かす可のように思い通りに斧は動く。

セイムの言う、身の丈にあった、というのはこういうことなのだろう。

「なあ、セイム、これってさ……」

言い差した時だった。

背後で爆音が響く。

「!?」

「坊！」

セイムがクウルをひっぱり自分の後ろに庇うように隠した。

「……すみません、坊のことに気を取られて気付きませんでした」

厳しい表情を浮かべたセイムの手から剣が生まれる。それを握りしめてセイムはそれを睨んだ。

「セイム、あれって……」

「町中で竜化するなんて、正気の沙汰ではありませんよ。恐らく歪みの気配に当てられて狂っているんです」

「狂っつて……」

クウルは目の前に現れた竜を見上げる。

竜の姿になつた竜族はとても巨大な体つきをしている。人の姿と比べれば数十倍はありそうなほどの巨大な体だ。フェリアルトの竜はその中でも体つきが大きい。巨体を支えるための巨大な翼と、強靱な角を持つ。尾は短く鎚のように丸く大きい。

尾を振り回せば側にあつた建物があっさりと破壊される。

人々の騒ぎ声が響く。

竜はどこを見ているのか分からなかった。クウルの位置からも瞳

孔が完全に開ききっているのが分かった。正気でないのは見るからに明らかだった。

即座に何人かが魔法で応戦しているのが見えたが、人の姿と竜の姿では歴然とした差がある。竜は人の姿でいるとはいえ、‘人間’のように簡単に怪我をして死ぬような生き物ではないが、竜化した竜を相手にすれば簡単にいく訳がない。

「副長！ 坊ちゃん！」

叫びながら駆けてくるのはランだった。

セイムと同じミユルナの隊に所属する若い竜だ。

「ラン、丁度良かった。坊を頼む」

「は、はい」

「隊長が来るまで俺があれの相手をする。出来るだけ町の外に誘導する。隊の者達にあつたら伝えてくれ」

「はい！」

「ちょ、ちょっと待って、セイム、あいつ変だ！」

「変なのは当然ですよ、狂っているんです。坊、ここは俺に任せてランと逃げて下さい」

「違う、そうじゃないんだ！」

身体に火がついたように熱い。

何かが底からわき上がってくるような奇妙な感覚がある。沸き立つようで、どこかおぞましい何か。

気持ちが悪い。

「あいつ、シエンと同じ気配がする……」

「え？」

どん、と目の前の建物が破壊された。

ランの手がクウルの肩を掴む。

「坊ちゃん、行きましよう、危険です！」

「でも……っ」

竜は魔法で出来ている。故にそれぞれ違う魔法の気配を帯びている。竜となり能力を使えばその気配は濃くなり関知しやすくなる。

遠くからでもそれがどんな性質を持っている竜なのか分かるのだ。その竜はフェリアルトの竜で、シエンと纏う気配が大きく違う。同じ領内の竜であれば似た気配を持つ竜も多く存在するが、クウルは明らかにシエンとは違う気配だと感じていた。

けれどそれと同時にクウルは感じていた。

シエンと全く同じ気配を。

気持ちが悪い、とクウルは口元を押さえる。何か変なものでも食べてしまったかのように胃の中がぐるぐるとしている。嫌なものを見てしまったような、嫌な事に気付いてしまったかのような感覚。

考えるのが嫌だった。

見るのさえ嫌だった。

けれど、

「……………っ！」

ちり、と頭の後ろの方に何か違和感を覚える。

それが何かを感じ取ってクウルは見上げて叫んだ。

「シエン！」

魔法の気配を纏った青年が空を舞いながら竜の側を通過すると、竜の気配が僅かに変わった。

その瞳に僅か正気の色が戻る。

開いていた瞳孔が一気に縮まり、竜ははつきりとシエンを見る。

「あいつ、一人で何を……………」

セイムが走り出そうとするところをクウルは引き留める。

「駄目、セイム、駄目だ！」

「坊、離して下さい、竜化していない彼一人じゃ無茶です！」

「違う、手を出しちゃ駄目なんだ！」

「坊？」

訝るようにセイムが振り返る。

クウルの視線はシエンから逸らされていなかった。シエンは誘導するように町の外へと動き始めた。それを追うように竜が動く。

竜は彼を殺そうとするかのように羽ばたきながら大きな角を彼の方に向ける。

彼は角を向けられても、竜の進行方向から逃げようとはしなかった。

「危ないっ！」

ランが覚ええず叫んだ。

フェリアルトの竜の角は強い。人の姿であるシエンに直撃すればひとたまりもないだろう。

だが、シエンは外に向かって移動しながらその角を弾き上げた。その反動で竜の身体は大きく上に跳ねた。角を向けて突進してくるフェリアルトの竜を剣一本で軽々しく跳ね上げたのだ。

「……嘘だろ」

セიმが乾いた声で呟く。

尋常の力ではあり得ない。

あの細い身体にそんな力があるようには思えなかったのだろう。化け物か、とセიმの声が聞こえた。

首を振ってクウルは言う。

「違う。……あれが『王の戦い』だよ」

「王の戦い？ 坊、どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味。俺にはわかるんだ。あれは……」
クウルは唾を飲み込んだ。

喉が酷く渴いているのが分かる。

「あれは、俺たちが手出ししちゃ駄目な戦いだ」

剣を手にすると妙に冷静になる。

引き抜いて鞘を身体に同化させると剣は微かにうす緑色に輝いた。

「竜王候補って……お前、何故分かる」

キイスの厳しい声が聞こえる。

シエンは少し振り向いて彼を見る。

「さあ、何でだろ」

分からない。自分の事だって曖昧なのに分かる訳がない。けれど、感じるのだ。

あの血の匂いは、竜王候補。

考えると頭の中から戦いの本能が目覚める。過去に何度も経験した。命の駆け引きをするあの感覚。

シエンは部屋の窓枠に足をかけると、窓を開け放った。

激しい風が部屋の中へと吹き込んでくる。

「おいっ……！」

「手出し無用。住民を安全な場所へ」

自分の口から出たとは思えないほどの静かな声だった。

引き留めるような二人の声が聞こえたが、今はそれに構っていらなかった。自分の身体に魔法を纏わせると一直線に竜の元へと飛んだ。

竜の様子は明らかにおかしかった。

正気を失っている。

苦しそうにもがくようにただ暴れているだけに見える。

(……そう、君、は、死にたいんだね)

彼の真横を通過すると、その瞳にようやく正気の色が戻る。

『しえん……りいす?』

「そう、僕のことを知っているんだね」

『うあ? あああああしえんりいあああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
竜はもがくように羽ばたく。

『ころして。はやく、おれを、ころして』

『ここじゃ駄目。町の外にでよう』

『おれが、しえんりいすころすまえに、はやくころして』

竜は羽ばたきながらシエンに角を向ける。

くる、と本能が感じる。

シエンは空中で剣を構えた。地上で戦う時のように足の踏ん張りが効かない分、力が分散するだろう。剣に、自分の魔力を集中させる。

『あああああああ!!!』

叫び声なのか、それとも悲鳴なのか。

竜は叫びながら突進してきた。

その軌道がはつきりと分かる。

何度も、何度も、‘彼’とはそう言う訓練をしたのだから。

シエンは町の外の方へ向かって後ろ向きに移動しながら、彼の角の軌道を見つめる。

短い時間のはずだが、戦闘の匂いで酩酊したような頭では速度がゆっくりと感じる。角が自分の眼前に迫っていた。

「……………っ！」

シエンは剣でその角を跳ね上げる。

竜の力を乗せた細い剣は折れることなく強い力で彼を跳ね上げた。

竜が大きくのけぞった。

『いたい、いたい、しえんりいす、いたい』

咆吼と共に脳裏に声が響く。

竜の目から涙がこぼれる。

「大丈夫、僕が楽にしてあげるから」

『しえんりいす、いたいよ、くるしいよ、はやくころしあああああ』

竜の目が少し正気を失いかけていた。

時間がない。

はやく決着をつけなければ。

「おいで、こつちだよ」

誘導するようにシエンが動く。

大きな咆吼を上げて竜は身体をくねらせた。シエンを追い掛けるように竜が付いてくる。本気でシエンを殺そうとしているかのよう
に、竜はその角で幾度もシエンを貫こうとしていた。それを避けな
がらシエンは町の外へと飛んだ。

やがて、広い平原へと着く。

まだ、竜の姿になつてはいけない距離だ。だが、シエンは翼を大
きく広げた。二対の翼、白茶色の身体、そして鬣。それが、シエン
の本来の姿。

竜の姿に変わったとたん、その竜の攻撃が激しくなった。襲いか
かる角をシエンは爪で止めた。

『あー、あーしえんりいす……しえんりいす!!』

『……くっ』

ぎちぎちと角が鳴る。

このままでは碎けて散ってしまうことは分かっている。けれど、
シエンは押さえつけるのを止めず、彼も押しつけるのを止めなかつ
た。

ぱりん、と角が碎けた。

悲鳴のような叫び声。

もがき苦しむような竜の首筋に向かって、シエンは食らいついた。
本能を感じる死に対する恐怖からの錯乱か、竜は大きくもがくが、
もがくたびにシエンの牙が鋭く喉元を抉っていく。

血の味が広がる。

竜の血。

竜王と成り得る者の血。

『……っ』

頭がくらくらとした。思考を手放したくなるような快感にも似た
興奮がシエンの中を駆け抜ける。

(支配されては、駄目だ)

シエンは目を開き彼に食い付いたまま急降下していく。思い描くのは大地から突き出る剣。

その思考に反応するように急降下した先に大きな岩で出来た剣が出現する。シエンはそれに向けて竜の身体を叩きつけた。

断末魔の叫びを聞いた。

竜の身体は大地の剣に貫かれ、心臓を抉られる。首から上はシエンの牙で引き裂かれ吹き飛び、ごろりと大地へと転がった。

引きちぎられ身体と分断されてもなお、意識の残る頭部は、シエンを見つめていた。

『「ご………んね………しえ………おれの………」』

最後までは言葉にならなかった。

彼が言葉にする前に、シエンは竜の頭に牙を突き立て彼の意識が残る部分をかみ砕いた。血や鱗が飛び散り当たりに飛散する。

酷い血の匂いが当たりに広がる。

完全に彼の意識が無くなったのを確かめると、シエンはゆっくりと彼の頭部から口を離した。

「ん………」

シエンは自分の身体を人のものに戻す。

言いようのない不快感が全身にあった。口の中に嫌な味が広がっている。一瞬酔いそうになったそれは、竜の血の匂い。肩で息をしながらシエンリイスは自分の口元を拭う。

拭った手にもべつとりと血が付いたが構っていらなかった。

いそがなければ。

これ以上、彼を苦しめたくない。

「どっ」

シエンは砕けた竜の頭に腕を突っ込んだ。

ぐちゃり、と不快な音が聞こえる。

まだ死んだばかりなのだ。

生暖かく生々しい。ぬめるような嫌な感触がある。

それでもシエンはそれをさがす。

やがてふわりとした光と共にそれが竜の頭からゆっくりと浮かんでくる。荒い息のまま、シエンは腕を抜いた。

血にまみれた手のひらでで光るそれに優しく触れる。

ゆっくりと光がシエンの手に吸い込まれていく。

これで、この竜の戦いは終わった。

最初から勝つつもりのない戦いは、シエンの勝利という形で終わった。

シエンは動かない竜を見下ろして微笑む。

「おやすみ、ハイノ、君はもう、自由だよ」

言って、シエンは意識を手放した。

角が間近に迫っていた。

シエンリイスは軌道を読みそれを剣で跳ね上げる。だが跳ね上げが甘かった。戻ってきた竜の角がシエンリイスに振り下ろされる。

「あつ……」

シエンリイスは小さく悲鳴を上げて転倒した。

つぶされる、と思った瞬間、彼の動きが止まった。

「へへ、僕の勝ち」

「あ……ああ、僕の負けだね……」

シエンリイスは溜息をつく。

少年が竜の姿から人の姿へと戻った。フェリアルト種の彼は満面の笑みを浮かべている。

「シエンリイスは駄目だな。技術は天才的なのに、いざっていつもの詰めが甘いつての」

「うん……、僕きつと戦闘に向かないんだよ」

「まあ、性格は学者肌って感じだもんな。でも、お前の力もつたいねえぜ？　へーかも一目置いてる位なんだから」

「頑張ろうとは……思っただけど」

シエンリイスは俯いた。

訓練や型の練習はスムーズにこなせる。身体能力が元々高いらしいシエンリイスは大抵の技はすぐに覚える。だが、戦いとなるとどうしても畏縮してしまい練習通りに出せないのだ。

竜としては致命的なものだろう。

ふいにつかつかとこっちに向かって誰かが歩いてくる気配を感じた。来る人物を認めてシエンリイスは笑みを浮かべる。

「あ、丁度良かった、君に後で……」

「っ……」

話が終わるよりも前に彼の手がシエンリースの頭を強かに叩いた。
「いつ……」

自分と同じくらいの年齢の、退紅色の髪の少年だった。怒ったような顔でシエンリースを睨み付けている。

「いった！ いきなり叩くなんて酷いよ！」

「うるせえ！ 何だあの戦い方は！ それでもレミアスの竜かよつ
！」

「人の姿で竜と戦うのって結構大変なんだよ。君だって知ってるはずだよ！」

「ああ、大変だよ。だが、今は完全に手加減しやがっただろ。大方、ハイノの角が万が一にも傷付いたらって考えて腰が引けたんだろ！」

凶星を付かれてシエンリースは口ごもる。

「そんなこと……」

ハイノは少し肩を竦める。

「何だ、シエンリースそんなときにしてんの？ 俺フェリアルト種だから角硬いから平気だって言っただろ？ 訓練用の剣くらいじゃ折れないって」

「で、でも……」

「でもじゃねえ！ やっぱりそうなんじゃねえか。だからお前はみんなに馬鹿にされるんだよつ！ てか、ホント馬鹿じゃねえの？」

胸ぐらを捕まれて叫ばれて、シエンリースは少しむっとして彼を睨む。

「君には言われたくないよ。死ぬと分かかっていて、へいか、の部屋に忍び込むような君にはっ」

「そ、それとこれとは関係ねえだろ」

「わわ、二人とも止めて」

「うるせえ！ お前は黙ってる！ ……大体てめえはいつつもいつつもむかつくんだよつ！ 強い癖に他の奴らにやられてもへらへらしてやかつてよ、たまには本気でやりやがれ！」

言われ、シエンリイスはにやにや笑う。

「へえ？ 君、僕のこと強いつて思ってくれてるんだ
かっつと、彼の顔に血が上る。」

「な、な……」

「確か強い竜が好きだったよね？ ……へえ？」

「う、うるせえ！」

頬に彼の拳が当たり、シエンリイスは大きく飛ばされた。
火がついたように身体中が熱くなる。

「……いきなり殴るなって、言ってるだろ！」

シエンリイスは立ち上がるとすぐに彼を殴りにかかる。一発目は
交わされたが二発目が顎に命中する。

彼はよろけて後退したが、すぐにシエンリイスに掴みかかってく
る。シエンリイスもそれに応戦した。

「……つてえ。いい度胸してんじやねえかよ、ああ？」

「最初に攻撃したの、そつちだからね！」

「死ねよ。くたばれ！」

「それ、両方同じ意味だよ！」

「うるせえ！」

「君はちよつと語彙が貧困なんじゃないの？ 戦つてばつかじやな
くて、少し知識増やしたら？」

「誰が馬鹿だ！」

「そこまで言つてないって」

「同じ事だろうが！」

「あーあ、はじまつちやつた……。シエンリイスは何で彼にだけそ
うなのかなあ」

呆れたような呟きが聞こえたかと思うと不意に首元を捕まれ引き
離される。

はつとしてシエンリイスはその人物を見上げた。

黒い髪の子。既婚を示す右側の頬にはアソニアの模様が描かれて
いた。

「こらこら、ちびたちケンカはしちゃいかんと言っておるじゃろ？」
「へいか……」

引き離されすっかりやる気を失ったシエンリスだったが、彼はなおも暴れ足りないような表情で男を睨む。

「離せ、ジジイ！ こいつとの話は終わってねえんだ！」

「話というのは殴り合いをすることではないのじゃよ。まったく、それでもわしの戦士の候補生かね？」

「す、すみません……」

シエンリスは恥じ入るように謝る。

「……………も、ごめん。僕、少し言い過ぎた」

言われ、彼は少し唇を尖らせる。

「俺の方も、いきなり殴って悪かったよ。……………けどな」

彼はきつとシエンリスを睨む。

「俺は納得してねえからな。てめえ、いつまでも馬鹿にされてへらへらしてんじゃねえよ！」

「ほう、なるほど、自分が馬鹿にするのは良くても、他の者にシエンリスが馬鹿にされるのが許せないんじゃない」

「う、うるせえ、死ね、ジジイ」

「ツンデレじやのう」

「つ、つんでれ？」

「何それ」

「それって、どういう意味ですか？」

三人に尋ねられ、彼は赤毛の彼を撫でる。

「ん、んー、うーん、……………内緒じゃ」

「ちよつと待て、悪口じゃねえよな？」

「褒めておるのじゃよ」

「……………褒められた気がしねえ」

ぶすつとする彼を見てハイノがけたけたと笑い出す。

「お前、へーかに弱いなあ！ シエンリスの事言えないじゃん」

「……………ハイノ、てめえ、本つつ気で殺されてえようだな」

掴みかかろうとした彼を避けて、ハイノが訓練施設を駆け出す。他の訓練をしていた竜達も、さすがに気になる様子で彼らを見、やがて囃し立て始めた。

今まで自分が彼とやり合っていたものの、こうしてケンカが始まると何故かはらはらしはじめる。

止めるべきかと迷っていると、ぽん、と頭の上に手が置かれた。

大きな手だった。

「へいか？」

彼は優しい笑みを浮かべる。

「御主は戦士になるには優しすぎるようじゃのう」

「すみません……頑張っては、いるんですが」

目を掛けてくれているのに、結果が出せない。

それがもどかしいのだ。

「謝る必要はないよ。優しさも時として武器じゃ。……ふうむ、御主今度わしと交えてみぬか？」

「えっ？」

「わしは強い。わしならば遠慮せずに打ち込んでくれるじゃろ」

「で、でも、へいかに攻撃なんて……」

「そうじゃの、わしから一本とれたら、‘ツンデレ’の意味を教えるやろうかのう。やってみぬか？」

一本取るなんてとても出来そうにない。「つんでれ」をどうしても知りたいわけじゃない。けれど、何故か少しやってみる気になった。

シエンリイスは頷いた。

「やってみます」

「シエン、おい、大丈夫か！ シエン！」

身体を揺さぶられてシエンリスはうつすらと目を開く。
見えるのはフェリアルトの衣服を着た子供。
ハイノではない。別の竜。

「……クー？」

クウルはほっとしたように頷く。

「そうだよ。良かった、大丈夫か、シエン？」

「……シエンリスだよ」

「え？」

「僕の名前、シエンリスって言うんだ……」

「記憶、戻ったのか？」

シエンリスは首を横に振る。

「夢で、少し、見ただけ」

「そっか……」

シエンリスは手を動かして手のひらを見つめる。

赤い色をしている。

血の色だ。

ハイノの血の色。

「……シエン？」

涙が溢れる。

悲しかった。殺してしまった竜のことを考えるととてもなく悲しくなる。本当は殺したくなかった。でも、あれ以上苦しむのが耐えられなかった。気が狂ってしまえば、もう、苦しみしか残らない。
「ごめんね、と言う言葉は嗚咽になってかき消えた。」

「ごめん、それから、ありがとう。」

「っ！」

竜王候補の気配を感じてアグラムは大地を蹴った。舞い上がり、他の木を足場にするように蹴りながら一番高い木の上へと登った。見渡す限り広大な森が広がっている。その森のずっと向こう側に強い竜の気配を感じる。気を狂わせそうな程の強い気配。それは王候補である証の匂い。

(……誰だ、この気配は)

アグラムは目を閉じ気配に集中する。

どこか狂気を孕んだ気配。どこか覚えがあると言うことは知らない竜ではない。けれど、特定するにはその人物の気配が薄すぎた。

やがてそれが誰なのか特定してアグラムは眉を顰めた。

「……………あ？ あいつか？」

それにしても妙だと思った。

歪みの気配に当てられて狂った竜のように奇妙な気配をしているのだ。アグラムの思った通りの人物なら、歪みに当てられ狂うなんて考えられなかった。

(あいつ、何を……………)

森の向こうをじつと睨みながらアグラムは様子を窺う。

明らかに何かがおかしい。

そもそも竜王候補が狂うなんて、考えられないことだった。

「……………っ！」

不意にもう一つ竜の気配を感じてアグラムは鳥肌を立てる。知っている気配。

間違いないよほどはっきりと感じるもう一人の王候補の気配。気が狂いそうだった。

殺したくて殺したくてたまらないあの竜の気配がするのだ。笑い

出しそうなのを堪えても、口元に笑みが浮かぶ。
側にいる。

そう思うだけで全身の血が沸騰した。
殺し損ねた竜。

自分に深手を負わせるほどの強い力を持った竜。しなやかで、力強く、自分を惹きつけて止まない竜の姿を思い描く。

「……シエンリスっ！」

口にすると魂が引き裂かれそうだった。

いや、もう引き裂かれているのだろう。

あいつが、自分の半分を持っている。

会いたい。

会って、あいつを殺し、その髄まで喰らい尽くしてやりたい。

激しい衝動がアグラムを突き動かした。

だが。

『駄目ですよ、アグラム様』

脳裏に声が響き、アグラムはそれを睨み付ける。

近くの木に降り立ったのは真っ白な鳥だった。それが普通の鳥でないことくらいすぐに分かる。意識だけ移している魔法で出来た鳥なのだ。

相手の気配を確かめて、アグラムは低く唸る。

「……ノアか」

『はい。……決着は程なく付きます。ハイノ様の王の命運が尽きようとしています』

「……………」

『シエンリス様はハイノ様の魂を喰らうでしょう。その直後を襲うことは禁止されています。貴方も本調子ではないシエンリス様とやりあうのは本意ではないでしょう』

アグラムは舌打ちをする。

「……………分かったような口聞くんじゃねえ」

『すみません。……ああ、決着が付きましたね』

彼女が言つと、シエンリスではない方の気配が消えた。アグラムは眉根を寄せた。あの二人が戦つたという割に決着が早すぎる。シエンリスが竜の姿になってからそれほど時間は経過していないはずだ。

「……やけに早いな」

「ハイノ様はもとよりシエンリス様を殺すつもりなどありませんでした」

「どういう意味だ？」

「ハイノ様は歪みを自らの身体に取り込み、少しでも支えになろうとしたのです。けれど、王ではなく‘リト’もいないハイノ様ではその負荷に耐えられませんでした。僅かに残つた自我で他の王候補を探し殺して貰おうと思つたのでしょう。気配を辿つて一番近くにいた候補に近づいた。それがたまたまシエンリス様だっただけのことです」

馬鹿か、とアグラムは毒づく。

竜王は歪みを正す力があるという。歪みを支えることで竜の谷を安定させているのだ。だから王のいない竜の谷は歪みに傾く。竜王候補とはいえ、まだ王ではないハイノでは負荷に耐えられなくて当然だ。アグラムでさえもすぐに狂気の竜となるだろう。‘リト’がいなければなおのことだ。

「てめえ、何故止めなかつた？」

「お諫めはしました。でも、ただの星読みの私にはお止めすることは出来ません」

「……てめえが‘ただの星読み’な訳ねえだろ」

「私は星の軌道を読み、伝えるだけの者です」

アグラムは不快そうに眉を潜め彼女を睨む。

「……何しに来た？」

「何のことです？」

「てめえが俺を止めるために鳥を出したとは思えねえよ」
くすりと女の声が笑う。

『よくお分かりですね。……レシエがこちらに向かっています』

「……ん……ああ？ あいつが？ 何で？」

『あの悪魔を殺す』と言っておいででした』

アグラムは鼻先で笑う。

「はっ、あの程度の力で殺せる訳ねえだろ。寝言は寝てから言え」

そもそも竜王候補を候補でない者が殺すのは禁止されている。南方將軍の号を得た彼女もそれを知らない訳がないだろう。

『寝言ではありませんでした』

「馬鹿か、あの糞女。人を悪魔と罵る前に自分の発言脳味噌通せよ」

『レシエは昔からそうでした。対等な位置に立ちたいという理由で四方將軍を目指して本当になってしまっような人ですから』

アグラムは声を低くして笑う。

「……だが、殺せない」

『はい、ですが、万一と言うこともあります』

「ねえよ」

『取り急ぎ連絡を取るために鳥を出しました。本当でしたらシェンリス様にもお伝えしたいところですが、私が無断で入る訳にはいかない場所にいらっしやいますので』

「フェリアルト城か……」

『はい。事情は詳しく分かりませんが、現在シェンリス様はフェリアルト領主代理キイス様の保護下に入っております』

「……何やってんだ、あの野郎」

竜王候補がどこかの領主の保護下にはいるなどという事はありません。町中で竜になれないことを利用して人の姿同士で戦うつもりなのだろうか。シェンリスは人の姿で戦うのが得意だ。飛翔王アス力を師としているためだろう。元々の才能やレミアスの剣の技術も加わり、成竜になる頃には見かけにそぐわない能力を持った竜となっていた。戦うことを嫌う性質であるためにそれを知る者は少ないが、アグラムが誰よりも苦戦する人物であると知っている。人の姿で戦うのを目的としているとはいえ、まるで逃げるかのよ

うな行為に眉を顰める。

何かあった。

そう考えるのが妥当だろう。

アグラムとの戦闘で消耗しているため、癒している可能性も否定出来ないが、そろそろ調子を戻していてもおかしくない頃だ。いくらハイノが勝つつもりがなかったとしても、あの短期間で決着が付くとなれば、傷は完全に癒えていると言っても間違いないだろう。

ならば何故外に出ないのだろうか。

そもそも癒すためとはいえ、シェンリスが他の領主に泣きつくのは考えられなかった。

そう言う性格の男ではない。

それはアグラムが一番知っている。

「……フェリアルトへ行く」

「今はまだ……」

「手出ししねえよ。様子を見るだけだ」

アグラムは言っただけの端を吊り上げて笑った。

「止まらねえかもしれねえけどな」

二章 了

「レミアスの竜で、シエン」というお名前……気付くべきでした」
カリアは息を吐く。

消耗が激しかったシエンリイスはベッドに寝かされ、その周囲に集まる形になった。シエンリイスに適切な処置をしているカリアの隣にはキイスの姿があり、窓際にミユルナが待機した。クウルはセイムの膝に座りながらシエンリイスをじっと見守る。

「カリアはコイツを知っているのか？」

「はい。この方はレミアス領主の四男、シエンリイス・レミアス様です」

「四男？ 随分多いな。確かこの間領主家で娘が生まれたとか言っていたと思うが」

竜は長命種であるが故に子供を産む数も少ない。一つのつがいが生む数は二人程度が普通だろう。千年竜ともなる雌の竜ならばもっと生むことになるが、五人も産んだとなれば結構な人数を生んだことになる。

「レミアス領主は剣技の才能のある子供を自分の子供として引き取っています。シエンリイス様は正当領主家の血筋であったはずですが」

「……僕が、レミアス領主の……息子」

シエンリイスは自分に聞かせようとしているように呟いた。

キイスは頭の後ろを掻いて息を吐いた。

「レミアスから連絡は」

「そろそろあちらへ文が届く頃と思います。その……急ぎの文とはしませんでしたので」

判断間違いでしたと謝るカリアにキイスは頷く。

「まあ、俺でもそうする。……に、しても、竜王候補か……。お前、

他に何か思い出したことは？」

竜王候補は次の竜王かもしれない人だ。敬うべきところだが、キイスはいつもと変わらない口調だった。

シエンリース自身もそれを気にした様子もなくキイスを見て首を左右に振った。

「何も。僕はただ、彼が竜王候補だって分かったただけで……それで……」

説明もしようもないことだと、彼は口ごもる。

キイスが苛立ちを見せるよりも早く、カリアが説明を加える。

「竜王候補同士、その血の匂いでかぎ分けられると言われていいますから、シエンリース様が本能的に感じ取られたとしても何の不思議もありません。記憶以前に本能が記憶しているのですから」

カリアは妙に世の中のことに詳しい。昔コラルで教師をやっていたことがあると言っていたが、実際どうなのか知らない。クウルにとってカリアは実母の友人であり、フェリアルト家に仕える女官であり、母親のような存在というだけだ。

「せんせー、カリア先生、質問いいですか？」

セウムが手をあげながら言うとカリアは頷いた。

「どうぞ」

「俺あのおとき坊といたんですが、坊は『王の戦いだから手出ししちや駄目』って言ったんです。どういう意味ですか？」

「竜王候補を候補でない竜が殺せば多大な影響を及ぼすものですが

……クウル様があの時そう仰ったんですか？」

視線を向けられ、クウルは頷く。

「うん、言った」

「どうして竜王候補の戦いだと分かったんですか？」

「えー？ わかんねえ。何かシエンと同じ気配がして気持ち悪いつて思ったんだ」

「同じ気配？」

「別の竜だつてのは分かるけど、何かこう……同じもの食った後っ

て、そいつら同じ匂いするだろ？ そんな感じで、シエンとあの竜
同じ匂いがしたんだ」

「カリアは少し厳しい表情を浮かべる。

その表情を怪訝そうにキイスが見上げた。

「カリア？」

「……恐らくクウル様は王候補の証の匂いをかぎ分けたんです。王
候補の匂いは王候補でなければ本来感じられないものです」

キイスが目を見開いて目を瞬かせた。

「ちよつと待て、それはクウルが王候補と言うことにならないか？」

「どうでしょう。クウル様が候補であるなら星読み達が知らせて
くるはずです。それがありませんでした。……選定が始まった頃ク
ウル様はまだ生まれていませんでした。そんな小さな子供が候補に
選ばれた前例はありませんし、クウル様のように、その……」

カリアは言いにくそうにした。

クウルが竜になれない事を口にするのをカリアは嫌がる。クウルの
母親が死んだ時、クウルの母親の腹を割いてクウルを取り出した
のはカリアだ。だから、思い出すのだろうと思う。クウルのことを
口にする時に、嫌でもその時を思い出すのだ。

クウルは彼女の言葉を引き継いで言った。

「竜になれない竜が竜王候補に選ばれた前例もない？」

「はい、そうです」

キイスは難しそうな顔で唸る。

「前例がない」が「あり得ない」訳ではないからな。竜になった
ことがないクウルは竜の気配が薄い。星読み達が読みきれないのか
もしれない」

「じゃあ、キイスはクーが竜王候補だと？」

「ミウルナの問いにキイスは困ったように首を振る。

「あり得ない事じゃないっていつてるだけだ。だいたい、この戦い
方もろくに知らないガキが竜王候補の戦いに巻き込まれてみる。一
瞬で決着ついちまう。……可能性はない方が俺としては望ましい」

「あ、あの……っ」

黙っていたシェンリスが声を上げると、全員目が彼に集中する。

彼は少し肩を竦めおそおそと話し始める。

「クーは……王候補……じゃ、ない……です」

「根拠は？」

「僕が……その、違っつて、思うんです」

「思う？」

「……その、うまく、説明、出来な……けど」

イラっとしたようにキイスの顔が引きつったのが分かり、クウルは反射的に耳を塞いだ。

あー、と後ろでセイムが唸った。

「がー！ー！！！！ てめえ、コラ、男だったらもつと腹から声だ

せつてーの！！」

「……うあ、ご、ごめんな……」

ボロボロ泣きだした彼にキイスが更に大声を上げた。

「いちいち泣くんじゃねえ！！」

「キイス、サイテーまた泣かしたー」

「あはは、うちの領主様は顔怖いし声もでかいから、凄まれたらびびるのも無理ないですよ」

「……キイス、少しは落ち着いて話たらどうだ」

「うっせ、黙ってる、外野！ てめえもさっきの戦いの時の勢いはどこへやったんだ！ ええ？ 竜王候補なんだろうがっ！！」

「……めんな……さ」

「がー、だから、腹から声だせつつつてんだろうがっ！！」

さすがに身体が弱っているのが気に掛かっているのか、掴みかかるとはしなかつたが、シェンリスはその勢いに怯えるようにロボロと涙を流している。

クウルは先刻の戦いをセイムと一緒に見ていた。普段のシェンリスとまるで違う人のような恐ろしい戦い方だった。ただ相手を殺

すことしか考えていないように見えた。怖いと思うより呆気にとられたという方が正しいだろう。本当にあれがシェンリスなのかと目を疑った。シェンリスはそれでも人に迷惑のかからない位置まで竜を連れ出した。クウルが追いついた時には既に竜は絶命しており、血まみれの状態でシェンリスが倒れていた。

目を覚ましたシェンリスは、泣きじゃくりながら声にならないこえでごめんねと呟いたように聞こえた。

死んだ竜の有様を見ればシェンリスが殺しを楽しんでいたように見える。尋常ではない殺し方をしていたのだ。目を覆いたくなるような程の光景だったのだ。けれど、彼は泣いていたのだ。あの涙は真実だろう。そして今流している涙とは別の種類の涙。

「……」

クウルは黙って泣いているシェンリスを見る。

クウルを抱きかかえるように座っていたセイムが怪訝そうに問いかける。

「坊、どうしました？」

「えっ？ ん、何でもない。シェンはホント泣き虫だな、って思ってた」

「シェンさんは少し気の優しいお人みたいですからね。うちの隊長も時々でいいからあれだけ可愛らしかったら和むんですけどねえ」
じろりとミユルナがセイムを睨む。

「……セイム、聞こえているぞ」

「聞こえるように言っただですよ」

「うーん、俺はシェンよりミュの方が可愛いと思うんだけどなあ……」

言っと少しミユルナが戸惑った表情を浮かべたが、すぐに表情を引き締める。

「……お前ら、おれがあんな風にメソメソしている姿思い浮かべてみたか？」

言われ、クウルは泣きじゃくるミユルナを想像してみる。

普通に可愛いんじゃないかとウルは思ったが、背後のセイムは「うわっ」「と小さく悲鳴を上げた。

「ねーキャリアー」

クウルは椅子に座るキャリアの足元に座り、キャリアの膝に頭を置いて下から覗き込むように見上げた。

シエンリイスは結局特別なことを何一つ思い出していなかった。自分の名前とあの竜がハイノという名前と言うことその他何も思い出しておらず、竜王候補という事実も分からないというばかりだった。彼をそのまま休ませる事にして、キイス達は自分の仕事に戻った。キャリアも仕事がある様子だったが、足元にまわりついてきたクウルを注意することもしなかった。

「どうしました？」

筆で何かを書きながらちらりとクウルを見た。

「あのさ、竜王候補って殺し合っってホント？」

言うところキャリアは一瞬だけ筆を止めた。

「本当です」

「何でそんなことしなきゃいけないの？ 話し合いで王様決められねえの？」

「血が殺し合う、と言われてはいますが……私は王候補でないのだからりません。ただ、王候補は相手の王候補を殺して食べる、と言われてはいます」

食べる、と聞いてぞくりとした。

ハイノと戦い倒れたシエンリイスの口元は血まみれだった。喉元に噛み付いた時に浴びた血だというのは想像できたが、シエンリイスがハイノを食べたようにも見えた。

キャリアは少し笑ってクウルの頭を撫でた。

「捕食の意味での『食べる』ではありませんよ。魂を食べるんです」「魂を食べる……？」

「竜は相手の魂を食べることで相手の力を手に入れることが出来る

ようです。生きている全てのものは死ねば冥府の海に還ります。稀に意識のみこちらに残すものもあるそうですが、魂は還り食べると言うことは出来ないはずなのですが……」

「竜王候補は例外ってこと？」

「そうなりますね」

「食べるとその分強くなる？」

「そう言われていますが、沢山の候補を食べたはずの竜王が竜何頭分もの圧倒的な力を持つていたかと言われればそうでもありません。昔コラルで聞いたことがある程度の噂に過ぎませんが、アス力陛下は竜王になる前と後でそれほど力に差があつたようには思えないそうです」

元々強い方でした、と彼女は補足するように付け加える。

クウルは少し考え込んだ。

変な話だとクウルは思う。クウルが竜王候補に選ばれたとしても、相手を殺すのは嫌だと思う。シエンリスも殺した後で泣いていたのだ。殺し合うことを望んでいるようには見えない。それなのに何故殺し合うのだろう。圧倒的な強さをもてるなら、殺し合う意味も少しは分かる。でも、そうではないのなら何故そんな仕組みになっているのだろう。

「候補って星読みが選ぶんだよね？」

「はい。正確に言えば星読みが軌道を読み、王に成り得る存在……証を持つ者を探して知らせるようですね」

「シエンが記憶無くしても本能で、分かった’ってことは、星読みが知らせなくても会うだけで殺し合わなければいけない運命を理解するってことだよな？　じゃあ、何で星読みがいちいち星を読む必要があるんだろ」

「……………」

カリアが一瞬酷く険しい表情を浮かべた。

何か悪いことを言ってしまったような気分になり、クウルは不安げに彼女を呼んだ。

「キャリア？」

「キャリアはあの険しい表情を無かったかのようにするように、優しく微笑む。」

「星の軌道は未来を知らせます。それは一つではありません。人の選択一つで変わる未来もあれば、どんなに足掻いたところで修正されてしまう未来もあります。星読みは幾通りもの未来を見て、最悪の事態'にならないように修正する役割を持っています。直接手出しをすることは滅多にありませんが、人の前に現れ話をしていきま
す」

「それで修正できんの？」

「はい、と言つてキャリアは少し考え込む。」

「クウル様が食べ物を食べようとした時、私がそれがお腹を壊すような毒だと分かればクウル様に食べないように言います。そんな時クウル様はどうしますか？」

「食べない。お腹壊すのやだから」

「でも私が言わなければどうしますか？」

「んー、特に変じゃなかったら食うかも。……ああ、そういうことか」

急に出てきた変な話が、たとえ話だと気付いてクウルは頷いた。

「でも、じゃあ、最初から全部教えればいいのに。どの選択をすれば一番いいかって」

「どの未来が誰にとつて一番いいのかは誰にもわかりません。星読みが全ての未来を把握出来ている訳ではありませんし、見守るのも役目です。多くを語りすぎてしまえば新しい未来を作ってしまう
す」

「新しい未来？」

「クウル様は明日死ぬと言われればどうしますか？」

「どうもしない。何もしようがないし」

「では一年後に死ぬと言われたら？」

「キャリアの言いたいことが分かつてクウルは溜息をついた。」

一年後、は何もしないで待つには長い。その間に生き延びる事が出来る方法を探すことだろう。知らなければ何もしないが、知れば動いて、或いは本当に助かる道を見つかるかもしれない。生き延びる事が出来るのであればいいことだと思うが、いいことだけとは限らない。新しい未来が出来たことで、‘最悪の事態’を招く可能性だってあるのだ。

だから星読みは深く関わらないのだろう。

星を読んで、自分好みの未来を作ることだってできるかもしれない。けれど、他を犠牲にするかもしれない。クウルには、未来を知ることが怖いことのように思えた。

「もう一つ聞いていい？」

「はい、なんでしよう？」

「竜王候補は絶対殺し合わなきゃいけないの？ いやです、って逃げられねえの？」

最後の一人になるまで、と聞いた。

嫌がっているように見えたシエンリスにそんなことをさせるのは可哀想だと思った。何よりシエンリスが誰かに殺されるかも知れないと言っのがいやだった。

「基本的にはそうですね」

「基本的には？」

「過去、殺し合うのを嫌がって、一人になる前に王位に付いた方がいらっしやいました。残った他の候補者も納得の上でしたが、歪みは加速する一方で、とうとう竜王自身が狂ってしまわれました。故に殺し合うのが定めと言われています。ただ、過去に二つだけ例外があります」

クウルはじつと彼女を見つめた。

「一つは東方の大陸にインハイトという国があった時代です。双子の竜がそれぞれ王候補に選ばれました。他の候補を倒したものの、互いに殺し合うことだけは嫌がりそのまま即位してしまいました。皆前例のような事が起きるのではと懸念しておりましたが、二人は

良く治め、寿命により力が弱まり、次の王の選定が始まるまで40年もの間治め続けたと言われています。双子王、双竜王などと呼ばれていますね」

「もう一つは？」

「人間の帝国であるアス最後の時代、竜王候補アルレイトがあることが人と契約を結んでしまいました」

「血の契約？」

「いいえ、人間の騎竜になるという契約です」
クウルは驚く。

騎竜になるということは人に使役されるということだ。クウルは人間に興味はあったが会ったことはないために特に何の感情も抱いていなかったが、多くの竜が人間に対して嫌悪感を持っている。今でこそ同盟が結ばれているものの、アス時代は人間の世界に足を踏み入れることも無かったはずだ。そんな時代に使役竜になるという契約をする竜がいるとは思えなかった。

「それって無理矢理？」

「竜と無理矢理契約出来る力をもった人間はいませんが、……と言いたいところですが、契約者は強い魔力を持っていました。アス討伐の英雄の一人騎士イクシールです。幸いにも互いに望んでのことのようでしたが、無理にでも出来た事でしょう。契約を結び縛ることで、竜王候補の枠から外してしまわれました」

「そんなこと出来るの？ 契約だけで？」

「普通は無理だと思えます。ただ、イクシールにはその体内に‘赤の神’と呼ばれる古代の神を有していたと言われています。神の力を持ち、その力が竜の力に勝っていたからこそです。……私も実際に知っている訳ではありませんので、詳しいことは分かりませんが、何らかの修正が行われ、アルレイトが外れても谷が揺らぐ事は無かったです」

クウルは黙り込む。

例外はある。

けれど並大抵な事では覆らないと言うことが分かる。長い歴史で二つしかないのがいい例だ。

シエンリースのように知っている竜を殺して泣いた王候補もいただろう。或いは殺すのが嫌で自害を謀った竜もいたかもしれない。自分が死にたくなければ他を殺して王になるしかないのだ。

そんなのは理不尽なことに思える。

竜王に選ばれるのは名誉と言われている。王候補でもそれは同じだ。だが、シエンリースを見ていれば名誉を喜んでいるようには見えない。

「……何でこんな仕組みなんだろ。やりたいやつが立候補して、みんなでいい奴選べばいいのに」

クウルが呟くと、カリアがそれに丁寧に応えた。

「そうですね、私もそう思います」

布団に潜り込むと、さすがに気配を感じたのかシエンリスが動いた。

一瞬クウルに驚いたようだが、身体が怠いらしく緩慢な動作で額の汗を拭った。

「……クー、駄目だよ、入ってきたら」

「俺は一向に構わないんだけどなあ」

「僕が構うよ……」

「シエンの身体、熱い」

「そうだね、すっごく怠い」

否定せずにシエンリスは頷く。

どうやら発熱しているようだった。竜は強い生き物だ。その血が強いために人間のいうような病気にはならない。毒で苦しむことはあっても、死に至るようなことはまずなかった。それでも魔法疾患により寝込むことはある。

「カリアに薬貰ってこようか？」

「大丈夫、多分、薬じゃきかない」

彼は小さな声で答えた。

「……水飲む？」

「ん……」

クウルはベッドから這い出し、脇に置いてあった吸い口を手に取り、熱が出て動けなくなることを想定していたのだろうか。恐らくカリアが用意させたものだろう。

吸い口を口元まで運んでやるとシエンリスは少し水を口に含んだ。

「汗凄いよ。服脱ぐ？」

「それは……駄目」

朦朧としている様子だったが否定され、クウルは頷く。

「じゃあ少し拭く」

やはりベッド脇に用意されていたタオルでクウルはシエンリースの首元の汗を拭いた。彼は少しだけくすぐったそうにしたが、されるがままになっている。

額の汗も拭い髪の毛を少し整えるように手櫛でとかすと、彼は小さく喘ぐような声を上げた。

「……………ん……………あ……………」

「シエン？」

彼は瞳に涙を浮かべながら熱のせいで赤い顔をしてクウルを見つめた。

彼はぱくぱくと唇を動かし、ようやく喉の奥から声を出す。

「ク……………角……………」

「ん？」

「角に、当たってる」

「あ……………、ご、ごめん」

クウルは慌てて手を引つ込めた。フェリアルトの竜の角は強く忘れがちになっているが、竜の角は人の姿ではとても弱い部分だ。中でもレミアス種は角が特に弱いと聞いた。竜の状態であればそれなりの強度はあるだろうが、人の姿ではやはり弱いのだ。身体が弱っている時だからなおのこと敏感になっているのだろう。

だから角は本来ごく親しい人しか触れさせないのだ。親しい人でも滅多に触ることはない。

ただ、触らせるのは信頼の証なのだという。

クウルはキイスやカリアに角を触らせたことはあったが、特に何も感じなかった。だが、信頼していない人に触られるのは不快ではないらしい。

シエンリースは困ったように眉を顰めていた。

「怒った？ いやだった？」

聞くと彼は首を小さく振った。

「違うよ。いきなりだったから驚いただけ」

「嫌じゃなかった？」

「……じゃないよ」

言われクウルは少しほっとする。

角を触られて不快、という状態がどんな状態なのか分からなかったが、少なくともシェンリイスは自分のことを不快に思っていないようだった。

「今度俺の角触る？ 俺の角、強いから、いくらでもいいぞ」

言つと彼は少しだけ笑った。

クウルが出来る範囲で汗を拭つてやると、シェンリイスは少しだけ気持ちよさそうにした。

一通り拭き終わるとクウルはシェンリイスの首元に顔を近づけた。

「……クー？」

クウルは呼びかけを無視して首筋の匂いを嗅いだ。洗い流して綺麗にしたが、血の匂いは残っている。それでも奥の方にあるシェンリイスの匂いを嗅ぐと、今までと変わらない彼の匂いがした。

「……匂い」

「うん？」

「変わってないんだね。カリアが魂を食べるっていったから、シェンの匂い変わったのかと思った」

「……変わらない？」

「うん。俺が拾った時のシェンのまんま」

血の匂いが酷すぎてちゃんと分からなかったが、シェンリイスはシェンリイスのままだ。正直、魂を食べるといふ話を聞いて不安だった。違う人の魂を食べてしまえば彼が彼でなくなってしまうような気がしたのだ。

だが、彼は変わらなかった。

少しほっとした。

「シェン、死ぬなよ」

「……」

「王候補は殺し合つて言った。最後の一人になるまで殺し合つ

って言ってた。俺、シエン死んじゃうの嫌だ」

わがままだと思う。

でも、死なせたくないのは事実だ。

「シエンが知ってる竜を殺すのいやだったら、俺がやる。だから、シエンは死なないで」

「だ、駄目だよ。クーだって、言ったよね？ 手出ししちゃ駄目だ
って……」

「でも、俺、シエンが苦しむのヤダ。会ってそんなに経ってないけど、何かシエンが苦しいと、俺もすっごく苦しいんだ」

「……クー」

「だから、シエンが嫌なら俺がやる」

シエンリスは首を左右に振った。

「……気持ちだけでいいよ。ありがとう」

「……」

「そんな顔しないで。僕も、クーがそう言う顔すると、苦しい」
手を握りしめられ、クウルは泣きそうになった。

何も出来ない。

非力な子供では竜王候補を倒すどころか、攻撃する事も出来ない
だろう。

この人の役に立ちたい。

そう思うのに、出来ない。

「……シエン、一緒に寝ていい？」

「クーそれは……」

「いやだったら俺ずっと起きてる。……今日は、絶対一緒にいたい」

言われ、シエンリスは少し呆れたように息を吐く。

呆れてはいたものの、その唇には微笑が浮かんでる。

わがままを許してくれる優しい顔。

「しょうがないな……」

おいで、と言われてクウルは彼の布団に潜り込んだ。

彼は優しくクウルの身体を抱きしめる。

少し暑いけれど、居心地がいい。シェンリイスの優しい匂いがした。

「そうか、御主が‘リト’だったのじゃのう」

呟かれて幼いシエンリスは微かに目を開く。

柔らかいベッドの上で眠っていた。身体が妙に暑い。

へいか、と声を出したつもりが声にはならなかった。唇を動かすと、男がベッドに腰を降ろし、シエンリスの額を撫でるように触れる。汗で髪の毛が貼り付いているのが分かった。

「そのままが良い。御主は訓練中に倒れた、覚えておるかのう？」

微かに頷くと、黒髪の男は少し悲しそうな顔をした。

「ずっと御主は体調不良が続いておった。おそらく、わしと長期共にあることで目覚めの兆候がでておったのじゃる。まさかこのような幼子が‘リト’であるとは思っても寄らなかった。……すまぬことをした」

彼は額を触る。

シエンリスはぼんやりと光を帯びる大きな手のひらを見た。竜

王の紋が見える。正当王の証。

「御主の角が生え替わり、成長するまでの間、わしが封じる」

だめだ、とシエンリスは首を振る。

彼は微笑んだ。

「でなければそなたの身体が持たん。……なに、たかがあと数十年のこと、わし一人でも何とかなる」

涙がこぼれる。

この人は宣言した以上本当にこなしてしまう人だ。それだけの強さを持っているのだ。精神も、肉体も。

強いのが少し悲しかった。

この人は自分を犠牲にしてしまう。

だから、少しでも強くなって支えになりたかった。自分が何か自覚をした時、嬉しかった。けれど、倒れてこうして身体もろくに動

かせない状況に陥って、この上更に彼に負担を掛けることを知った。何故、自分は何も出来ないのだろう。

こんなにも力になりたいと思うのに。

「リトのいない時代の王は短命に終わる。わしは御主を見つけられ幸運だったのじゃ。今、谷は安定してある。歪みもなく、狂いもない。故にまだ御主の出番ではないということじゃ。無理して身体を損なうより養生せい。……無論、調子を取り戻したら訓練再開じゃ。御主はリトである以前にわしの戦士候補なのじゃから」

大きな手の指先がシエンリスの涙を拭っていく。

「わしの踏ん張りがきかぬときは遠慮のう御主の力を使う。御主が否と申してもじゃ。良いね？」

「……………」

シエンリスは頷く。

無理を通せば逆に彼の負担になる。分かっているから頷いた。

「……………ね……………は？」

絞り出すように言うと一緒に彼はきょとんととして、そして微笑んだ。「御主のことがよほど心配だったのじゃ。槍を探すとアソニアまで出て行ったよ」

「こんな時期に、無茶だ、と唇を動かすと、黒髪の男も頷いてみせる。」

「わしもそう言ったのじゃが……………あれは一度決めたら聞かぬからのう。まったく、誰に似たのやら……………」

まるで自分の息子のことを話すように彼は優しい顔をしていた。

「そのうち仏頂面で戻ってくるじゃ。御主はその間休んでいなさ

い

「……………」

シエンリスは頷きながら目を閉じた。

ひやりとしたものを感じ、シェンリイスは目を開く。
ぼんやりとする視界の中に誰かの姿が見える。

「……あ……らむ？」

呼びかけてから違うことに気付く、輪郭がはっきりしてくると驚いたような灰髪の青年の姿があった。前髪の一部だけが赤く、大柄な男だった。

「あ……キイ…ス、さん？」

「悪い、起こしたな」

「いえ……」

シェンリイスは首を振る。

身体が怠いが、眠る前より暑くない。熱も恐らく落ち着いているだろう。微かに汗ばんでいる首元を拭くと、額に置かれた冷たいタオルが落ちた。

シェンリイスはそれを手に取り半身を起こす。

「まだ寝てるよ」

「大丈夫です、少し動かないと」

「……何か食べそうか？」

「えっと……」

食事の事を思い出したとたん、空腹を思い出したのだろう。

盛大な音を立ててシェンリイスのお腹が鳴り響いた。

「あつ……」

シェンリイスは赤くなる。

キイスはくすくすと笑いを隠そうとしなかった。

「元気だな」

「すぐ、食事を用意致しますね」

声を聞いてシェンリイスはカリアもいたことに気付き、さらに赤面した。

どうにもみっともない所ばかり見せている気がする。

カリアが立ち去ると、シェンリイスは顔を覆った。眠る前とは別

の意味で顔が熱い。

「……………大丈夫か？」

「え、あっ……………」

声を間近に聞いて顔が近いことに気付く。覗き込まれて額を寄せ
てきそうな雰囲気だった。慌ててシエンリイスは手を振った。

「だ、大丈夫です」

「ならいいが……………無理はするなよ」

「……………はい、ありがとうございます」

不意に自分のベッドに他の気配が無いことに気付く。

「……………あ、あれ？ クーは？」

一緒に寝ていたはずだ。

けれど少年の姿がどこにもない。

「ん？ あ？ あいつまたお前の所に来てたのか？」

「はい、昨夜、どうしても一緒にいって……………」

不意にぞくつと背中が冷えた。

何か嫌な予感がする。

「……………キイスさん、今朝、クーを見かけましたか？」

「いや……………まだ起きてないと思ってた」

キイスの顔から少し血の気が引いた。

どうやら同じ事を考えているのだろう。

「……………出てくる」

「待つて下さい、僕も……………」

彼は首を左右に振った。

「いや、お前はここにいてくれ。屋敷の中にいるかもしれない。俺
もセイムに言ったらすぐに戻る」

「俺としてはシエンの力になりたいから全部欲しい訳ですよ。いっそ俺のものになってください」

言いながらクウルは巨大な剣に抱きついた。

目を瞑って意識を集中させるが、剣からは何の返答も戻ってこない。それどころか、武器を抜いた時のようなものも何も伝わってこない。

抱きついたまま、クウルは盛大に溜息をついた。

「だめかぁー」

或いは、抜けるかも知れないともう一度試しに来たが、剣からは何も伝わってこなかった。

これだけの大きな力を抜いて自分のものに出来れば自分がシエンリスの運命を変える例外になれるかもしれないと思ったのだ。だが、剣の反応はない。この強い力を引き抜くことはクウルには無理だという事なのだろう。

(に、しても、俺のご先祖様すっげーよな)

まだ人の歴史が始まって間もない頃に竜王だった人物で、非常に若くして竜王になったと聞く。号は迅雷王、名前はリヒト。フェリアルトの竜の祖となった竜であり、領主家の祖先とされている。

並はずれた力を持ち、人の国で起きた戦にも度々参戦していたという。魔王や精霊王とも一緒に戦った経験があるのだとカリアが教えてくれた。

クウルは剣から離れ、地上へと降りた。

もし、今、魔王や精霊王と親しくなって、昔の誼だと協力を求めたら、こんな馬鹿げた戦いを終わらせてくれるだろうか。

(どうやって会えばいいんだろうな、精霊王とかまおーとか)

考え込みながらクウルは人混みを歩く。

まだ朝早かったが、既に町は活気づき始めていた。壊された建物

の修復や瓦礫の撤去のために人が集まってきた。

あの時の戦闘で出た死者は、ハイノ本人だけだ。壊されたのが建物だけで本当に良かったとクウルは思う。ただ、竜王候補の戦いに巻き込まれて死ぬ竜だっているはずだ。今回はたまたま誰も死ななかつたが、怪我人は出てしまったし、戦士ならともかく戦術を持たない竜もいる。クウルだってそうだ。竜になれない幼い力では巻き込まればひとたまりもないだろう。

武器を手にしたところで変わらない、

どうして自分は子供なのだろう。竜にもなれず、誰も助けることが出来ない。

「……………っ!!」

突然、何かの気配を感じてクウルは大きく飛び退いた。ぞっとするような鋭い気配は自分に向けられている。

どこからか、誰かが自分を見ている。

それが分かるのにどこからの気配か判断が付かない。

町の人が突然妙な動きをしたクウルを訝しげに見ていったが、クウルには構っている余裕がない。

斧を出そうとしたその瞬間だった。

背後に気配を感じる。

「しまっ……………」

声は言葉にならなかった。

口元を覆われ、強い力で引つ張られた。何をされたのか判断するよりも早く、クウルの身体は壁に押しつけられ、首元に何か絡みついた。

息が苦しい。

咳き込むことも出来ずに、クウルは僅かに目を開く。

退紅色が見えた。

「よう、ちび、少し話を聞かせてくれねえか？」

低く唸るような男の声。

ようやく男に首を絞められているのだと気付く。軽々と片手で首

を掴み、そのまま宙づりになった状態で壁に押しつけられているのだ。

人のざわめきが遠い。人が滅多な事で入らない狭い路地に連れ込まれたのだろう。薄暗く微かにカビの匂いがした。

薄暗くて周囲が見えにくい。そのくせ男の目だけがざらりとしている。片側は三本走る傷で半分潰れてしまっているが、それでも恐ろしいほどの鋭さを含んだ目だった。

見据えられて、全身が凍り付くかのようにだった。

クウルの見た退紅色は男の髪の色だ。キイスほどではないが、随分と体格のいい男だった。薄暗いせいなのか肌の色が少し違って見えた。

彼はクウルを掴んだまま口元に笑みを浮かべる。

目は笑っていないかった。

「……は……な、せ」

「俺の質問に答えたら解放してやるよ。……お前、シェンリスを知ってるな？ お前からあいつの匂いがする」

名前を出され、クウルはぞくりとした。男の発した言葉に、何かまわりつくような感情を感じた気がしたのだ。

そして気付く。

男からもシェンリスと同じ匂いがしている事に。

まさか、と思った。クウルが感じている匂いが竜王候補の匂いだとするならば、この男も間違いなくそうなのだ。

「……王……こう……ほ？」

ぴくりと男の表情が動く。

首を締め付ける力が強くなる。

「ぐ……っ……あ」

「そうか、俺が何者か、あいつに聞いているんだな？ なら話は早え。案内しろよ」

クウルは答える代わりに思いっきり歯を剥いて見せた。

苦しい。

けれど、会わせてはいけないと思う。

この男だけは、シエンリスから遠ざけなければいけない。そう強く感じたのだ。

男は口の端を更に吊り上げた。

「いい度胸だ」

クウルは男を睨み付ける。

瞬間、空と地とが逆転した。

衝撃を覚えると同時にクウルは地面に叩きつけられていた。全身が激しく痛む。衝撃でさらに呼吸が困難になる。

何とか力を振り絞って起きあがろうとするが、男の膝が胸部を押しさえ込んでいた。

ぴくりとも動かなかった。

力では敵わない。

竜になるうがなるまいが男との力の差は甚だしく、そして経験も大きく違う。隙でも付かない限り逃げられることもないだろう。

その、隙すら見いだせない。

「質問だ、ちび」

男は至極冷静な声で言う。

「お前の悲鳴を聞けば、あいつはどうする？」

「……………」

来てしまう。

シエンリスはまだ活動するのもままならない身体でクウルを助けに来てしまうだろう。

クウルは唇とぎゅっと噛んだ。

男が楽しそうに笑った。

「いい顔だ、それでこそだ」

男の手に小型のナイフのうようなものが現れる。その切っ先がクウルの頬に触れた瞬間頬に痛みが走った。頬を伝って流れ落ちたのは涙ではない。

男は赤く輝くナイフをクウルに見せつけながら笑う。

「さあ、希望を言え。目か？ 爪か？」

「……………な……………せっ」

大きく身をよじろうとしたが、頭が微かに左右に振れただけだった。

男は不意に笑みを消した。

恐ろしい瞳が自分を見下ろしている。

「……………暴れるなよ、手元が狂うじゃねえか」

子竜殺し。

不意に思いだし、クウルは自分の血の気が引くのを感じた。こんな風だったのだろうか。殺された幼い竜はこうして角を壊されうち捨てられたのだろうか。

嫌だ、と思う。

殺される、と思った。

死ぬのが怖い。

けれど、この男にシェンリスの話をするのはもつと怖い。

「決めねえなら、俺が決めてやる。……………ああ、そうだな、目にしようぜ？ 一つくらい無くしたって死にはしねえんだ」

男は首を締め上げるのを止め、クウルの脛を指でこじ開けるように広げる。

涙がこぼれる。

恐怖と混乱で全身が震える。

男はそんなクウルの姿を見て、狂気に満ちた笑みを浮かべた。

「さあ、いい声で鳴けよ」

「や……………」

眼前にナイフの先が迫る。

閉じようとしてもこじ開けられた瞳はその切っ先を見る。

いやだ。

「……………っっ！」

クウルは声にならない悲鳴を上げた。

胃の底から何か膨れあがるような感覚があった。

刹那、クウルの身体が軽くなる。

男が弾かれたように大きく後方に飛んだのだ。

突然軽くなつた体に戸惑うが、ゆつくりとした動作で解放された身体を起こす。絞められていた喉が痛い。咳き込むと涙がボロボロと流れ落ちた。

覚悟していたが、男からの攻撃は来ない。

涙を拭い、呼吸を整えながらクウルは男を見る。

男の顔には何か恐ろしいものを見たかのような恐怖の色が浮かんでいる。

「……なん……だ、今の……」

震える声で男は言う。次の瞬間恐怖の表情はみるみる怒りに変わっていった。男は怒気を孕ませた声で叫ぶ。

「何なんだよ……、何なんだ、てめえはっ!」

「……?」

近づいてきた男に襟首を捕まれた。

「答える、お前は何者だっ!」

言っている意味が分からない。

声にしようにも出てくるのは咳ばかりだった。

クウルは男を睨み付けた。

「坊っ!」

悲鳴のような叫び声が聞こえた。

ぱちんと手を会わせて鳴らすような音が聞こえる。

「……ちっ」

舌打ちをして男がクウルから離れる。離れた所に斬り込んだのはセイムの剣だった。男がクウルを離さずそのままていたのなら確実に斬られている場所だった。

男に手を離され、崩れ落ちたところをセイムに支えられた。

「大丈夫ですか、坊」

「セ……イム」

ようやく息をして、地に足を着ける。震えていたが、身体は大丈夫だった。それを確認するとセイムはクウルの身体を庇うように後ろに押しのける。

「坊、下がって」

セイムは男に向かって斬り込んだ。男は小さなナイフで応戦する。狭い路地で多少戦いにくそうだったが、お互いにどんな状況下でも戦えるように訓練していた様子だった。

最初は不機嫌そうな表情だった男は、次第に楽しそうに笑みを浮かべていく。

「ふん、思ったよりは出来るようだな」

「こういう時の為に鍛えてますからねえ！」

男のナイフをセイムの剣が真上に突き飛ばした。

セイムは隙を見逃さず彼に斬り込む。

「貴方を、子竜殺しの犯人として捕縛する」

「はぁ？ 何だそれは」

不快そうに眉を顰める。

「残念だが、知らねえ罪で捕縛される趣味はねえんだよっ」

男の足が、セイムの腹部を捉える。

反射的にセイムが防御をした。

守の上から浴びせられた攻撃にセイムの身体が少し後方に飛ばされる。

「……っ！」

「おもしれえ、かかって来いよ相手にしてやる」

落ちてきたナイフを器用に受け止め彼は笑みを浮かべた。

キイスはじつとしてるといったが、とてもそんな気分にはなれなかった。

シエンリイスはベッドから這い出ると角を守るためにバンダナをすると、剣だけを握って部屋の外へと出た。いつもならこんな格好で出歩いたりはしないものだが、嫌な予感がしたのだ。

せめて屋敷の中だけでも探さないと気が済まなかった。少し動くだけでも息が上がる。

それだけ体力を消耗していると言うことだろう。食事もとっていない為になおのこと身体が動かし辛い。

重い身体を動かしてシエンリイスは廊下を歩く。

廊下の窓から差し込む日差しが眩しい。

「……………」

不意に激しい頭痛がした。

シエンリイスは頭を抑え壁に手を突いた。

(悲……鳴……?)

誰かが声にならない声で叫んだ。

身体の奥底が溶かされるかのように苦しい。

知っている気配。

シエンリイスはその気配を知っている。

(…………この気配……クー……?)

がしゃん、と窓ガラスが割れる。

咄嗟にシエンリイスは横に飛んだが、頭痛と消耗した体力のせいで反応が遅れる。腕に痛みが走った。

「……………」

斬り込まれたのが分かり、シエンリイスは顔を顰めた。

目の前に怒りの形相の女がいる。

綺麗な薄緑の髪をしている。瞳は空の青だった。

「無様ね、シエンリイス。私如きに斬り込まれるなんて」

「き、君は……？」

「ようやく見つけたわ、悪魔！ 私が引導を渡してやる！」

「えっ、え、ちよっと！」

更に踏み込んだできた女の剣を避けながらシエンリイスは剣を抜いて剣を受け止めた。交わった剣の重みで強さが分かる。相当の修練を積んできたのだろう。動きや力に無駄がない。

このままでは殺される。

そう思った瞬間、頭の中が冷えて固まるような感覚を覚えた。

痛みと感情がかき消される。

何も感じない。

相手を倒すことしか頭の中になかった。

何度も経験してきた戦闘の感覚だ。

「僕には勝てないよ」

「っ！」

呟くように言うと女は後ろに飛んだ。

無意識だっただろう。だが、女の判断は正しかった。

シエンリイスの剣が女の目の前を通過する。女は立て直そうとするが、シエンリイスはその隙を与えなかった。切り込み、踏み込むことを繰り返し、彼女を壁際まで追いつめていく。

受け止め続けられるのは彼女の剣の才覚が長けているからだ。

だが、シエンリイスとの差は埋められない。力も技術も、経験も、シエンリイスの方が勝っているのだ。

壁際に追いつめられた女の剣をシエンリイスは弾く。

彼女に致命傷を与えるつもりでシエンリイスは剣を振り上げた。

女の顔に恐怖の色が浮かんだ。

「っ……っ！」

突然、感情が戻ってくる。

攻撃してはいけないのだと、頭の中で何かが叫ぶ。シエンリイスの身体は、一瞬強ばったように動かなくなった。

その隙を女は見逃さなかった。

シエンリースの腹部を蹴り飛ばし、彼の身体は激しく飛ばされた。先刻までの優勢とは違ってかわり、今度はシエンリースが追いつめられた。倒れ込んだところを狙い、女がシエンリースの上に馬乗りになった。

「甘いわ、シエンリース。それともそれが作戦？　そうして誘い込むことで飛翔王を殺したの？」

「えっ……」

「親友の頼みだから一応話だけは聞いてあげる。飛翔王を……どこにやったの？」

「……ど、う………いう、意味………？」

声が乾いていた。

殺したとはどういう事だろうか。女ははっきりと飛翔王を殺したと言った。その言葉は自分に向いている。

自分が飛翔王を殺したのだろうか。

まさか、とシエンリースは思う。

そんな訳がない。

けれど、殺していないという記憶もない。

「しらを切るつもり？　本当にとんでもない屑ね……」

女の顔に歪んだ笑みが浮かぶ。

「人畜無害で大人しそうな顔して、やっていることは最低の事ばかり。罪すら認めようとはしない屑の中の屑」

女の指先に鋭い爪が現れる。

「せめて私に言った言葉の一つくらい、真実であることを祈るわ……」

彼女は自分自身の首元に爪を近づける。

「狂って死ねばいいわ。シエンリース！」

「や……」

頭の中が真っ白になる。

自分の真上で女が死のうとしている。

意味が分からない。

誰なのかも知らない。

ただ、そうして死んだ彼女の血は、自分にとって猛毒よりも恐ろしい毒になる。

そう確信してシエンリイスは硬く目を瞑った。

「……………てめえら、人の家で何やってるんだ」

静かな男の声。

自分のものではない血の匂いがした。

目を開くと、女の爪を掴んでいるキイスの姿がある。その手は切り裂かれ、ぼたぼたと血が流れ落ちている。

「痴話喧嘩なら余所でやれよ」

「は、離せ……………！」

「うちの窓ぶち破って、血で汚しといてその態度たぁいい度胸してんな、オイ」

「そ、それは詫びる。だが、これは私とシエンリイスの問題よ。第三者が、口を挟まないで」

「あ、あ？」

キイスは女の腕をそのまま引つ張り立ち上がらせる。乱暴に引つ張ったせいでバランスを取り損なった女はそのままシエンリイスから離れて尻餅を付いた。

「てめえな！ コイツは俺の家に寝泊まりしてんだよっ！ 血の繋がりがなくなつてな、寝食共にすれば兄弟だつっーんだよっ！ 人の家族に手え出すんじゃないやねえ！！」

シエンリイスは身体を起こす。

女に向かって凄むキイスの右手は血で真っ赤に染まっている。ぼたぼたと落ち続ける血が床に赤い染みを作った。

「家族？ あんたは、そいつが何をしたか知っているのか？」

女は皮肉そうな笑いを浮かべる。

「そいつは、飛翔王を殺し、赤妃までも殺した悪魔だ！ 庇った所で……………」

「知るかつ!!」

キイスは叫んでシエンリイスの腕を掴むと強い力で彼を立ち上げさせた。

「コイツは人の死を泣いて、自分の病み上がりの身体を押してまで俺の弟を捜しに行こうとする奴なんだよっ! 記憶無くす前は知らねえけどな、今のこいつは俺の家族だっつってんだよっ!」

強い力で肩を組まされ、シエンリイスは泣きそうになった。

何が起きているのか今ひとつ分からない。キイスもまた混乱しているはずだ。それでもキイスは無条件で自分を助けてくれた。

この人はどうしてそこまで自分を思ってくれるのだろうか。彼女の言った言葉を理解していない訳がないだろう。シエンリイスが分からないだけで、真実であるのかも知れない。彼女の言葉が記憶を失う前のシエンリイスのことだとしたら信頼出来るはずがない。なのにそれでもこの人は自分のことを家族と呼ぶ。

涙が出そうだった。

「……記憶を、無くす前?」

驚いたように女が目を見開く。

「もしかして、私の事が誰だか分からないの……?」

「え、えつと……」

女の顔がみるみる赤くなる。

シエンリイスを激しく憎むような表情だった。

「ふざけないでっ!」

「えっ……あ……」

「婚約を破棄しただけでも飽きたらず、記憶から消去するほど私のことが嫌いだったの!?!」

「は……え、こ、婚約?」

「ふざけないでよ、そんなに……そんなに私が嫌いなら、さつき躊躇わずに殺してくれれば良かったのに……」

彼女の言葉は最後の方は嗚咽へと変わった。

彼女は顔を覆って泣き始める。

蹲って泣く彼女は、剣を握って戦っていたとは思えないほど普通の女の子のように見えた。

「大丈夫か？」

ミュルナが差し出した布を受け取ったキイスは自分の手に布を巻き付けながら頷いた。

ミュルナが駆け付けた時には彼は怪我を負っていて、首謀者らしき女は泣き崩れていた。もう少し戻るのが早ければミュルナは女を殺していたかもしれない。キイスの傷を見た瞬間、その怪我を負わせた誰かに激しい殺意を覚えたのだ。だが、彼を傷つけた相手は戦意喪失しており、ミュルナもまた無防備な相手を襲うほど見境を無くしてはいなかった。

「大事無い。少し深いみたいだが、ほつといても治るだろ」

「念のためにカリア女史に見せた方がいい」

彼は少し眉を顰めた。

「……カリアは？」

「いないのか？」

こういう時には真つ先に彼女が駆け付けても良さそうなものである。

大人しく捕縛された女は既に地下牢に運ばれており、シエンリイスは部屋に戻された。駆け付けた城詰の女官達が割れたガラスの撤去を始めている。これだけ騒いだのだからカリアが気付かない訳がないのだが、カリアの姿はそこにはなかった。

バタバタとなにかが走ってくる気配を感じた。

「いた、ミュ！ キイス！ ……おわつ、何だこれ、何があったんだ？」

「クウル！ この馬鹿弟！ お前一体、どこへ……」

行っていったんだ、と言いかけてキイスは硬直する。ミュルナも走ってきたクウルの姿を見て目を見開いた。

彼は血だらけだった。

衣服は勿論、髪や頬にもべったりと血が付いている。

「お前、その血……」

「俺のじゃない」

クウルはきつぱりという。

「こつちの事も気になるけど、とにかく来て。セイムが大変なんだ」
セイムと聞いてクウルからセイムの血の匂いがしていることに気が付く。ミウルナは表情を険しくさせた。

彼は戦士でありミウルナの隊の副長をしている。当然のように強く実力のある人だ。武器を使えば実戦や訓練中に怪我をすることもあつたが、クウルにかかった血の量は尋常ではない。

何かあつたのは明白だつた。

「何があつたんだ？」

とにかく来て、と廊下を走り出した彼に続きながらミウルナは問う。

キイスも厳しい表情を浮かべていた。

「俺、襲われて……」

「襲われたあ？ どこで、誰に！？ 怪我はねえのか？」

「俺の事よりセイムだよ。あいつ、俺を助けに来て、戦闘になつて、腕落とされた」

「まさか……」

ミウルナは覚えず口にする。

クウルは冗談でもそんな話をする子供じゃない。だがあのセイムが戦闘で腕を落とされたという言葉は理解出来なかつた。彼の腕を落とせるような実力のある戦士などそうそういない。だが、同時にクウルの浴びた血の量も納得する。腕を落とされた時に近くにいれば、これだけの血を浴びていてもおかしくはない。

「すぐにカリアが駆け付けて、見てくれたけど、どうなってるかわかんない。俺、どつちか呼んで来るように言われて……」

一瞬ミウルナは彼の言葉に違和感を覚える。

「クー、セイムはどこで戦闘になつたんだ？」

「職人街。俺、迅雷王の剣を見に行つてて……」

キイスが盛大に顔を顰めた。

「町中だな。……カリアはその時、シェンの食事の準備をしてたはずだ」

それがなぜ、すぐに駆け付けた、のだろう。

カリアは女官長であり、彼女はフェリアルト城の侍従たちを統率する責務がある。だから城を出ることは滅多にない。特別な用事が無い限り城内に留まつている人なのだ。それが、城内でこんな事が起きたというのに何故城下の方へ行つたのだろう。

同じ事をキイスも疑問に思つたのだろう。走りながら酷く難しい顔をしていた。

正門まで駆け付けた所で数人が駆け込んでくるのが見えた。簡易的に作られた担架に寝かされているのはセイムであり、脇にはカリアが付いている。カリアは周囲に指示を飛ばしながら走っていた。

城内に入ると同時にその場に担架を下ろさせるとカリアはセイムの様子を確かめた。

「カリア！」

「……キイス様、緊急事です。この場を血で汚すことをお許し下さい」

「構わねえ、何でもやれ。セイムは大丈夫なのか？」

キイスが問うとセイム少し目を開いた。

衣服を引きはがされ上半身を晒したセイムの右腕を抑えるように布が巻き付けられている。見ただけではどんな状態か分からなかったが、彼の身体に無数の傷があることはすぐに分かった。

腕を落とされたと言っていたが、カリアは腕を助けるつもりでいるのだろう。鋭利な刃物で切り落とされた腕は処置が早ければくつつくこともある。だが、再び戦士として戦えるのかは怪しいとミユルナは思った。

険しい表情だったが、カリアは諦めようと言う様子もなく的確な処置を続けている。

「……とんだ……失態しました」

苦しそうに呻きながら、彼は言う。

「しゃべるな」

「いえ……俺には報告の義務があります。……隊長、城下で子竜殺しの犯人とおぼしき人物と戦闘になりました」

ミユルナは表情を引き締めた。

「本当か？」

「本人は否定をしましたが……俺が駆け付けた時は坊を襲ってるまっただ中でした」

クウルをちらりと見ると、彼の言葉を肯定するようにクウルは頷いた。

「本当に犯人か知らないけど、俺が襲われたのは確か」

「……坊を守るためと、捕縛の為に戦闘になりました」

「種は？」

ミユルナの問いに彼は答える。

「アソニア種です。……雄竜で成竜、髪は少し褪せた赤色、瞳と気質は焰、左目の上に比較的新しい三本の傷、竜化時に他の竜に爪でやられたような傷です。……褐色肌に尖って長い形状の耳でしたので、おそらくカトウス族です」

「カトウス族？」

カリアが厳しい表情を浮かべた。

「アソニア南方の少数部族です。……あの方は、おそらく先代オーガスタス・グラントです」

「四方將軍か？ 何故そう思う？」

「……私は一度お会いしたことがあります。まだあの方が小さい頃でしたが、良く似た他人では無い限りは、恐らく」

カリア様、と女官の一人が大きな箱を抱えて駆けてくる。

カリアはその箱を受け取ると急いで開く。中には様々な薬と、妙な道具が入っている。

「麻酔を」

「はい」

女官は頷き、慣れた手つきで薬の瓶を次々と取り出す。カリアは細い針と、奇妙な色に輝く糸を取り出す。

「何をやる気だ？」

「縫合します。麻酔が間に合いませんので、その間の痛みを覚悟して下さい」

「覚悟？」

「良くて気を失います。このまま麻酔が効くまで放置すればセイムさんの腕は戦士として致命傷になるでしょう。今ならまだ間に合います」

「……………俺の腕、元通りに繋がりますか？」

「治します。……………戦士を諦めるのであれば痛みのない治療をしますか？」

セイムが苦笑する。

そんな問われ方をして、痛いのは嫌だと言う戦士はいない。

「……………お手柔らかにお願いします、先生」

「わかりました。善処します」

針に糸を通し、カリアは力強く頷いた。

「では始めます。……………キイス様、ミユルナさん、セイムさんを押さえていて下さい」

「カリア女史は一体何者なんだ？」

「ミユルナは横を歩くキイスを見上げながら問う。

セイムの腕の縫合は的確に行われた。痛みから反射的に身を動かそうとするセイムを押さえつけていたミユルナは、彼の感じている痛みが尋常ではないことを知った。ミユルナの知るセイムという男は痛みに強い男だ。多少の傷であれば顔色一つ変えずに淡々と戦う腕を落とされた状況でも、多少苦しそうにしながらも的確な説明を出来るほどの男だった。だが、一度縫合が始まると彼は叫び声しか上げなかった。カリアは、細い神経を魔法の糸で繋げているのだと説明をした。傷口だけならば魔法で塞ぐことも可能であったが、それでは後遺症が残ってしまうと。再び戦士として戦う為には全ての神経を魔力でつなぎ合わせて元通りに動くようにしなければならぬと彼女は言った。

竜は人とは違って弱い生き物ではない。だが一度切り離されたものを元通りに再生させることは通常であれば出来ない。

だが彼女はセイムの腕を繋げてしまった。

彼が途中で気を失ったためにまだ動くのか否かは分からないが、繋いだ後魔法で傷を塞げば彼の腕は何事も無かったかのように肩にくっついていて。彼女は酷く疲れた様子で失血が酷いから安静にするようにと告げると部屋へと戻っていた。消耗が激しかったのだろう。彼女にしては珍しいことだった。

「……あの術はルネールの治癒術の一つらしいな。昔、聞いたことがある」

「秘術か？」

「みてえだな。俺も見るのは初めてだから何ともいえねえが、トラクタなら詳しいこと知ってるはずだぜ？」

「兄さんが？」

「トランタはカリアが中央に居た頃からの知り合いらしいからな。お前らが定住先にフェリアルトを選んだのもカリアがここにいたからって聞いたが……」

ミウルナは目を瞬かせる。

「おれは知らない。ここに住むことは親父が死んでから兄さんが決めた事だから」

兄がコラルを離れて別の場所で暮らそうと言い出した時、ミウルナはまだ幼かった。幼霊期は過ぎていたものの、まだ誰かの庇護無しでは生きられるような年齢ではなかった。コラルに深い思い入れもなかったし、違和感なくフェリアルト行きに頷いた。

ミウルナ達は滅んだと言われてきたデイギア種の生き残りと言える。故にアスカ王から保護を受けていたが、ミウルナがアスカ王と会った記憶は殆どない。うっすらと黒髪の優しそうな竜と言うことを覚えていた程度だ。兄トランタは大人であったためにアスカ王とも会話をしているはずだ。だからフェリアルトを選んだのもアスカ王に勧められたからだと言えそうに思っていた。考えてみればアスカ王ならば故郷のアソニアか、デイギア種と近い竜が多いレミアスを勧めても良さそうなものだ。

「カリアはお袋の友達だった。中央から離れる時縁を頼って来たって聞いたが、俺もカリアについて詳しく知ってるわけじゃねえんだよなあ」

「確かに親しくしてたな。母君から何か聞いてないのか？」

キイスは肩を竦める。

「誰よりも信頼出来る相手ってくれえしか。後はカリアから直接聞いたぐらいのことだな。よりもいるのが当たり前過ぎて疑問にさえ思わなかったんだよ。今更疑問に思うなんて何か情けねえな」

「おれも兄さんに対しては同じようなものだ」

キイスもクウルもカリアのことを家族のように思っている。家族であり正常な関係であれば互いに無関心である訳がない。ただ、過去に何をしてきたか、どんな事があったかなんてきつかけが無けれ

ばとても聞くような話じゃない。

今一緒にいることの方が大切であるために自分の知らない数年分を聞こうとはあまり思わないだろう。

いつでも聞ける。

だから余計に細かいところを聞かないのかもしれない。

「改めて不思議な人だと思うな。教師やっていただけあって、知識高いのは確かだが……正直実際に縫合まで出来るとは思ってもなかつたな」

「おれも同感だ。そもそもここにいたはずなのに、何でセイムと一緒に戻ってきたのかつてのも気になる。……カリアは何で外に出たんだ？」

キイスは首を振る。

「分からねえな。……ただ、二十年前もそうだった」

「二十年前つて……クーが生まれた時か？」

「ああ。お袋が倒れた時、カリアは用事があつて出ていたはずなんだ。だが、用をほつたらかして戻ってきてクウルを助けた。少しでも遅ければクウルは助からなかつたかもしれない。……本人は嫌な予感がしたから戻つた、と言っていたが」

「カリア女史には星見の才があるのか？」

いや、と彼は首を振る。

「聞いた覚えはない。大体、星読みなら何でお袋が倒れる前に対処しなかつたんだ？ 今回のことだつて事前にクウルが子竜殺しに遭遇しないように出来たはずだ」

「……確かに。だが、それにしては処置が的確過ぎる。クーの時も今回も」

カリアは友人と呼んだキイスとクウルの母親を大切にしていた。クウルのことも大切に思っている。その彼女が行く末を見て知っていたとして、何もしないとはとても出はないが思えない。

それなら何故、二度も同じように突然外に出るような事をしたのだろうか。

当人に聞いてみなければ分からないことだな、とミュルナは溜息をついた。

「……それにしても、子竜殺しの犯人が腕の立つ奴となると厄介だな」

「ああ、当人は否定してたって話だが、どっちにしたって俺の弟を襲った上にセイムの腕落とすような戦闘やってんだ。手配しねえ訳にいかねえが……」

「正直、普通の連中に捕まえられるとは思えない」

「……だな」

キイスは息を吐く。

クウルを守りながらと言う悪条件であったとしても、セイムほどの実力者が腕を落とされているのだ。戦士ではない一般人が束になつてかかっても倒すのは難しいだろう。しかもカリアの言葉を信じるのであれば一度は四方將軍にまで上り詰めたことになる。

先代のオーガスタス・グラントと言えば地方でも名を聞くほどの実力者だ。圧倒的な強さを誇っていたものの、気質が荒く度々問題を起こし、結局解任されたと聞いた。現在は別の人物がオーガスタス・グラントの名前を名乗っているが、先代に比べると力が劣ると言われている。

それだけの実力者が何故、と思う。

何故子供を襲ったのだろう。殺しがしたいだけならばそれだけの実力者であれば大人でも簡単にくびり殺せるだろう。

「カリア女史とセイムの調子が戻り次第、詳しく聞こう。……キイスは少し落ち着いたらでいいからクーに話を聞いてくれ」

「ミュルナはどうする？」

「おれはもう一つの頭の痛い問題を解決してくる」

キイスは眉間寄った皺を深くさせた。

「あの娘か。……ったく、どうしてこう立て続けに頭の痛え問題ばつか起きるんだよ。つか、お前が行く必要ねえだろ。忙しいんじゃないのか？」

「尋問だつておれの仕事だ。同性の方が聞きやすい事もある。おれは出来ることをするだけだ。この位のことには俺に頼れ」

言つと少し彼が表情を緩めた。

「……助かる」

「後でお前の部屋に報告に行く。余裕があつたら少し休めよ。領主は休むのも仕事のうちだ」

言つと彼は苦笑する。

「領主代理だつつの」

「同じだ、ばか」

フェリアルトで城の地下牢を使うことはあまりない。通常は城下にある牢を使い、ケンカ程度の犯罪ならばそちらで処理される。ここに捕らえられるのは領主の命を狙うなどをした特別な犯罪者なのだ。フェリアルトの竜は兎角温厚な竜が多い。同程度に職人気質の人も多く無口な人も口の悪い人も多かったが、仲間同士の結束は強かった。そのためフェリアルトで城の牢が必要な程の犯罪は殆ど起こらなかった。

久しぶりに使われる牢には、今女の姿がある。

服装は他種の文化が混じったコラルのような服装だったが、体格や雰囲気からミレイルかレミアスの竜だろうと見当を付ける。

ミウルナが牢に近づくと置かれたベッドに腰を降ろしていた女が顔を上げた。反抗する気力もないと言う風に彼女から力を感じられない。気怠そうに顔を向けたが、顔色は悪く、目も赤かった。

「……まずは名前を聞いてもいいか」

女は力無く答える。

「個としての名はレシエ。出身はレミアス。……当代、キリス・ヴェナを務めていた」

南方将軍、とミウルナは少し驚いた。

中央コラルを守るのが四方将軍だ。キリス・ヴェナの名前を名乗ることを許されているのはそのうちの南方を守るものであり、歴代女性であることが定められている。フェリアルトは南方に属する。赤妃の時代はまだ短いものの、少なくともここ数十年の間は彼女がフェリアルトを管理し、守っていたとも言える。

キイスは領主代理であるために彼女とは面識が無いだろうが、本当にキリス・ヴェナだとすれば、彼女はフェリアルトにとって無視出来ない存在であることを意味している。

彼女は表情を殆ど動かさないままミュルナに言う。

「領主の守る城に押し入るのは礼に欠いたと重々承知している。まして領主殿に傷を負わせたのであればどんな処遇をされても致し方ない。寛大なとは言わない。的確な処置をお願いする」

「……彼はあくまで領主代理だ」

ミュルナは言い切る。

牢の中の女は少しだけ表情を動かす。

「キイスはただの戦士が戦闘の後に怪我を負った程度にしか考えていない。罰することが必要と言うならば、ここに不当に押し入り戦闘したことだけだろう。……理由を話してはくれないか」

「……」

「当代キリス・ヴェナ殿であり、彼と面識があるのであれば、彼が何であるか知っているはずだ」

「あいつは、悪魔よっ」

吐き捨てるように彼女の語気が荒くなる。

「あいつを竜王にしてはいけない。私はそれを食い止めに来たのよ」「婚約者だと聞いたが」

「今は婚約者ではないわ」

ミュルナは彼女を見る。彼女は忌々しげに吐き出したが、彼女の表情にはシェンリスへの未練が伺えた。ほんの些細な表情だが、同じ女性としてミュルナには良く分かった。

「……竜を殺せる毒は愛する者の血」

良く聞く冗談のような言葉を口にするると彼女は眉を顰め顔を背けた。

「別に、そんなものを確かめに来た訳じゃないわ……」

竜の身体に普通の毒は効かない。

身体を悪くすることは稀にあるが、それでも人間のいう致死量を超えても竜の身体を流れる血が浄化してしまう。並の毒であれば竜の血の方が強いのだ。

ただ、その竜さえも殺してしまう猛毒があると言われている。

それが‘愛する者の血’なのだ。

勿論、愛した者同士の血が互いにとって猛毒になりどちらかが傷付いただけで死に至るといふ訳ではない。ただ、消して抽象的な言葉ではなかった。

竜の血には魔法の力がある。想いが強いほど互いの血の干渉を受けやすくなる。

彼女は自ら自分の命を絶ち、シエンリスにその血を浴びさせようとした。どんな状況なのか聞いたただけだったが、彼女から激しい憎悪が伺えた。自らの手で命を絶つ時、彼女はその血に自分の全てを含ませただろう。魔力も、感情も、魂も。もしもシエンリスが彼女のことを愛していたなら、その死と憎悪は何倍にもなってシエンリスに降り注ぐ。それは彼自身の感情と彼女自身の感情に比例するように増える。シエンリスが彼女を何とも思っていないければ、影響は少ないが、もしも少しでも彼女を考えていればその影響を受ける。場合によっては先日城下で暴れた竜のように、気が狂い、正気を保てなくなることもある。

そして、真実愛していれば即死することもあり得る。

「おれにはお前がそれを確かめたかったように見える。だから彼が記憶を失っていると知った時、失望した」

「……………成功するか分からない事に命を賭けるのが馬鹿馬鹿しいだけよ」

「なら、愛されている自信があつたんだな。確実に何かしらの影響を与えられると」

「そうよ」

「……………そのくせ失敗して安心した顔をしてる」

きつ、と彼女の目線が強くなる。

「貴方に、何が分かるのっ」

「おれも、好きな人を傷つけない気持ちは分かるつもりでいるが……………」

一瞬彼女の目が大きく見開かれ、瞬いた。

そこで初めてミュルナを認識したような顔になる。

「……………女の、ひと？」

「よく間違われるが、そうだ」

彼女は顔を赤らめる。

「ご、ごめんなさい。私、勘違いをしていたわ」

「いい、慣れている。それにこんな格好で女と見抜けと言う方が難しい。名前を聞いても男だと思いこむ人もいるからな」

ミュルナは男の格好をしている。口調も男性的で声も低いためによく男と間違われるが、分かっていてやってやっていることだ。魔力を考えれば竜族にとっての「強さ」は女性も男性も変わらないが、腕力などの純粋な力の場合、女性の方が劣る。故に女だからと舐められることもある。隊長職に就いているのだから男性と思われていた方が都合が良かった。

「名前を……………聞いてもいい？」

「ミュルナ・デイギアだ」

「……………デイギア種……………滅びたんじゃ無かったのね」

「同じ事をシエンにも言われたな」

言つと彼女は不審そうに眉を顰めた。

「……………記憶喪失じゃなかったの？」

「おれと会った時に不意に過去の記憶を思い出したようだ。錯乱して、結局何も思い出せなかったみたいだが、彼はデイギア種がいたことに驚愕しているようだった」

「……………？ 確かに王都では今、デイギア種は滅んだと言われているけれど、そこまで驚く事かしら」

「滅んだ？ おれたちの存在は飛翔王に認められているはずだ」

「その生き残りである三人のうち、父である男は王都で老衰で死亡、兄も老衰で死亡、妹は戦死と聞いているわ」

ミュルナは眉を顰める。

「父親が王都で死んだのは事実だけど、おれも兄さんも生きている。デイギア種は滅んでいない」

「……の、ようね。瞳の特徴で、貴方がデイギア種であることは疑いようがないもの」

竜にはいくつか種がある。外観の特徴の違いで大きく六種族に分けられ、そのうちデイギアは片方の角が大きいことと、左右の瞳の色が違うという特徴が上げられる。

同じ領地内で婚姻し子を産むのが普通だったが、違う種であっても婚姻し交わることは出来る。その際親のどちらかの特徴を受け継いだ竜となるのだが、デイギア種は受け継がれる可能性がとても低い。同じデイギア種同士で子供を成してもデイギアの特徴を持って生まれない子も多かったと言う。ミュルナ達のように兄弟揃ってデイギアの特徴を持って生まれるのは非常に希な例と言える。だからデイギア種は次第に数を減らし、今では認識されているのは二人だけになってしまった。

ところがそれすらも今は王都ではないものと言われている。フェリアルトではトランタもミュルナも当たり前にデイギア種として認識されているというのに、どういうことだろうか。

疑問に感じたが、今はそれを問いただしている場合ではない。

「話を戻そう」

言つと彼女は少し目を逸らした。

「……おれは、お前を女の目線から見て、シエンを好きでいるように見える。何かしらの憎しみがあるのは事実のようだが、自分のことを少しでも好んでいるか確かめたかったようにも思える。何があって、こんなことになったんだ？」

ミュルナが女と知って少し肩の力が抜けたのだろう。レシエは目を伏せながらもぼそぼそと話を始めた。

「確かに……そういう気持ちもあったわ。私の死で、あいつが少しでも動揺すればいいと、そう思ったの。でも、何よりあいつを竜王にしてはいけないと思つたわ。だから、自分で命を絶つなんて、戦士としてあるまじき行動に出たのよ」

「なりふり構っていられないと？」

「そうよ」

「分らないな。何故そこまでシェンが竜王になるのを拒む必要があるんだ？」

当然の質問に、彼女は一瞬言葉に詰まったようにだまり、やがて声を低くして言った。

「……あの男は悪魔よ」

彼女の視線がミュルナに向けられる。

瞳に浮かんでいるのは憎悪だろうか、それとも恐怖だろうか。

「あの男は、飛翔王を殺し、赤妃様まで殺そうとしたのよ」

「………は？」

「……赤妃様が眠りに就かれたのはあの男が原因。この谷の混乱は全部あいつのせいなのよ」

レミアス領主家の息子と婚約が決まったのは生まれて間もない頃だったという。物心付く頃にはその人と結婚するのだと言われていたため、レシエが違和感を覚えた事はなかった。それが彼女の身分では普通であったからだ。

初めて出会ったシェンリスという少年は気の弱そうな子供だった。レシエもまた引つ込み思案であり、初めて会った時はお互いに親の後ろに隠れていた。それでも数回会えばお互いにうち解けていった。

幼いレシエはまだ恋とは言えない幼い感情でシェンリスを好きになっていたと思う。

「シェンリスは‘せんし’になるの？」
レシエの問いに彼は頷く。

自分より少し年上の竜はレシエが出会った他の竜たちに比べ優しい性格をしていた。とても竜とは思えないがその優しさが好きだったと思う。

「うん、レミアスの家に生まれたからね。竜王の戦士になるために、コラルに行くんだ」

「りゅうおうのせんし？」

「竜王様の為に戦う戦士だよ」

「コラルにいったら、あえないの？」

「少しの間、訓練生としてコラルにいると思うから、暫くは会えないよ」

「じゃあ、レシエもりゅうおうのせんしになる！」

言っとシェンリスは困ったように笑った。

「うーん、ちょっと難しいかな」

「なんで？」

「レシエはまだ小さいし、それに、竜王様から招待を受けるか紹介

がないと候補になれないみたいなんだ」

「シェンリースは？」

「竜王様が良かったらおいでって。……ぼくがレミアスの家にいるの嫌がつているの、知ってるみたい」

「おうちにいるの、いやなの？」

レシエは彼を見上げた。

少し寂しそうな顔をして唇に指を押し立てた。

「うん、内緒だよ」

レシエは時々彼が凄く寂しそうなを知っている。シェンリースはレミアス家の本当の子供だ。他の兄弟たちのようにどこから引き取られた訳ではなく、父親も母親もちゃんと生きている。けれど、時々彼は寂しそうに見えるのだ。

その理由を、レシエは知らない。

「家が嫌いなわけじゃない。兄弟が疎ましいわけでもない。ただ、ぼくには何かがたりないんだ。ここにいちゃいけないんだって思う」

「なんで？」

「ぼくにも分からない」

「レシエはシェンリースがいちゃだめだって思わないよ？」

「うん、レシエは優しいね」

そう言っ彼はレシエの頭を撫でた。

「……それでも、ぼくは、駄目なんだ」

大人になってもその意味は分からない。ただ、その時の彼は暗い顔をしていたのを覚えている。少しだけその時のシェンリースが怖かったのだ。

コラルに行ったシェンリースはあまりレミアスには戻ってこなかった。竜王の戦士候補としてコラルで訓練を積み始めて数年後に、レミアスの技術を学び直す為に一度戻ってきたが、シェンリースとレシエが会話をする機会は殆どなかった。

彼は変わったと思った。

優しさから来る甘さもなくなり強くなったと思う。それでも訓練

中ではない普段の彼は優しい表情を見せていた。けれど、レシエのことを故意に避けているように思えた。レシエが近づけば練習を再開してしまい、殆ど言葉を交わせない。練習の無い時に声をかければ疲れているからとすぐに部屋に戻ってしまう。コラルに行く前までの彼はレシエに人一倍優しくただけに、その変化がレシエには理解出来なかった。彼が再びコラルに戻った後は文を送っても全く返事が戻らなくなった。

周りに相談してみれば、レシエが女らしくなってきたから気恥ずかしいのだろう、とレシエを励ますような言葉が返ってきたが、レシエにしてみればシェンリースの態度は自分を拒絶しているように見えた。

やがて彼は正式に竜王の私軍に入る事が決まった。

家の者が竜王の私軍に入るといふ名誉なことにレミアスの家は騒がしくなった。挨拶をするためにシェンリースが戻ることになり、更に騒がしくなった。婚約者であるレシエも呼ばれ、盛大なパーティが開かれた。

竜王の戦士になったというのに、そうとは感じさせないほど彼は穏やかだった。レシエが近づけずにいると、周囲が気を利かせて二人を人のいないテラスの方へと促した。シェンリースもそれを拒まなかった。

久しぶりに彼と会話をする機会に恵まれ、レシエは少し緊張をしていた。

少しは婚約者らしい会話が出来るだろうかという淡い期待もあった。だが、彼は二人きりになると同時に、がらりと態度を変えた。手すりに寄りかかり、まるで汚いものでもみるかのような目つきでレシエを見ていた。それはまるで別人のようだった。

「はつきり言うけど、俺は君なんかと結婚なんかするつもりないよ」戸惑う彼女に彼は更に続けた。

「婚約なんて父さんが勝手に決めただけだろ？ 父さんには逆らえないから婚約者でいたけど、今は違う。竜王の戦士になった俺を父

さんは認めているんだよ。だから俺が拒めば婚約は白紙に戻される」
くすりと彼は笑う。

「考えてみなよ。不釣り合いだろ？ 夫は竜王陛下の戦士で、その妻がなんの称号も持たないただの女なんて。戦士は戦士同士結ばれて強きを生む。それが強い力を持った竜の義務だよ？ 俺に君じゃ不釣り合いなんだ」

「わ、私の事が………嫌いなの？」

「嫌い？」

彼は声を立てて楽しそうに笑った。

「自惚れてるね、俺に興味を持たれていても思った？ ……好きも嫌いも興味ないよ。小さい頃は君でもいいかと思ったけど、今じゃ不釣り合いってはっきり分かるだろ？」

「……っ」

「俺くらいの戦士なら、一人の女に絞る必要もない。ああ、そうだね、婚約者だったし昔なじみだ。そんなに俺との間が大切だったら、愛人にしてやってもいいよ？」

反射的に手が出た。

彼の頬を叩きつけると、最低、と言葉を吐き捨てて、レシエは彼の前から去った。

レシエの知っているシェンリスとはまるで別人だった。優しく少し泣き虫で、あんな言葉を平気で吐くような人ではなかった。コラルが彼を変えてしまった。レシエの思い出にある優しいシェンリスはどこかに行ってしまった。

悲しみが失望に代わり、憎しみに変わった。

唐突に彼女は戦士になる決意をした。

捨てられたのなら並べばいい。興味を持たれるようになればいい。そして彼が興味を抱いたら今度は自分の方から捨ててやればいいと。或いは、自分といることで優しいシェンリスに戻ってくれるかも知れないと思っただのだ。

戦士になる訓練は並大抵の事ではない。

竜は元々強い生き物だが、戦士はさらにそれに磨きを掛ける。今までそれなりの訓練はしてきたものの、戦士になるつもりはなかったために身につけた技術も半端なものだった。まだ成竜ではないが今から目指すとすれば並大抵の努力で出来るものじゃない。

分かってはいたが、決めた以上はやり通すつもりでいた。

実際レシエには戦士となる資質はあった。レミアスの竜は元々の力は弱いものの戦いに向いている性質をしている。シエンリスの婚約者としてレミアス城にいたレシエは沢山の戦士を見てきた。だから自身の技術は未熟でも見る目を持っていた。

血の滲むような努力をし、自分の持つているものを最大限に利用し、レシエは戦士としてコラルに招かれるまでに至った。成竜したての竜がコラルの戦士と言うだけでも大変な快拳であるが、それではまだ足りなかった。竜王の戦士との差は甚だしく、シエンリスを遠くで見る程度の地位だった。

レシエがシエンリスを追ってコラルに下級戦士として上がった頃、彼は竜王の‘右の翼’と呼ばれる程の実力者となっていた。

コラル城の戦士が集まる舎はコラル城の中心部から少し外れた位置にある。

レシエたちが使う舎は下級戦士達が集まる場所だったが、下級戦士と言っても各地から集められた精鋭たちばかりだった。

このうちの何人かは数年後には警護以外の任務に就いているかもしれないと、レシエは気持ちを引きしめる。

「聞いたか両翼の話」

靴ひもを強く結んで、レシエは顔を向けた。

自分が話しかけられた訳ではなく、側にいた同じ下級戦士の会話だった。両翼、と言われるのは竜王の「右の翼シエンリス」と「左の翼アグラム」の事だ。目的の人物が話題に上がって興味をそそられた。

「左が自分の部下をかみ殺したって話か？」

「うわ、何だそれ、またやったのか？」

「ああ。この間左の軍が北方から来た人間共を狩りに行っただろ？」

あの最中に単独行動に出た部下に腹を立てて……つー、話だ」

「何度目だ？ よくそれで竜王の戦士が勤まってるな」

「俺が知る限り5か……6だな。まあ、左は竜王陛下が拾って育てたって言うからな。息子のように可愛いんだろ。陛下には子供がないから」

七だ、とレシエは心の中で呟く。

今回の竜が死んだという事は、四頭が死亡、二頭が重傷、一頭が行方不明となる。アグラムの軍ではアグラム自身が戦闘不能にした竜がそれだけいるのだ。いくら竜王陛下が息子のように可愛がっているからとはいえ、それだけ殺したとなれば問題になる。だが、アグラムの言い分は確かに正しいのだ。

隊をまとめるために、勝手な行動を取った者があれば処罰をする

べきであり、レシエ自身は噂でしか知らないが、噂を聞く限り、今までの行動も全て頷ける内容だった。実際に気性が荒く一度暴れ出すと止められないような性分だという。だから激昂して殺した可能性は否定出来ないが、噂を聞く限りそれほど愚かには思えなかった。「で、その話じゃないとするとお前の聞いた話ってのは何なんだ？」

「ああ。竜王陛下の庭で派手なケンカをやらかしたらしい」

聞かされた男は目を丸くする。

「陛下の庭で？ また何で」

二人の仲があまりよくないという噂はよく聞く。常に唾み合って貶め合うような間柄ではないようだが、ことある事に衝突し、掴みかかるような事もあるのだという。それでも、竜王の庭のような特別な場所でそんな事態になったというのは初めて聞いた。

レシエはじつと二人の会話に聞き入る。

「はつきりしたことは分からないが、お互いに重傷を負って、暫くの間別の竜が左右を仕切るって言ってたな」

「重傷って、癒えない程の傷なのか？」

竜の傷は簡単なものならばすぐに塞がる。さすがに身体から切り離されれば繋げるのは難しいが、失血が激しい時と魔力の消耗が激しい時を除けば傷は跡形もなく消えるものだ。よほど壮絶な戦いをしたのだろう。

「傷の上に消耗が激しくて、伏しているって噂だ」

「じゃあ、竜の形でやり合ったってことか？」

「らしいな」

「しかし、それほど強い竜が竜の形になって大喧嘩なら感知出来ても良さそうなのに、俺は何も感じなかったぞ」

「俺もだよ。何でも庭に強い魔法がかかっているとかって話なんだが……」

「とってつけたような話だな。……極秘任務で表に出られないからそう言うことにしてんじゃねえのか？」

「……お前もそう思うか？」

確かに男達の言い分は一理あるとレシエは思う。

出れない理由を公表出来ないなら、公表出来る理由をでっちあげればいいのだ。レシエはどうにも気に入らないが、上に立つ立場の者ならそのくらいのことをしなければ鳴らないこともあるだろう。

だが、それは憶測に過ぎない。

実際本当に重傷になっている可能性だつて否定はできないのだ。

(……シエンリスが重傷)

頭の中で考えて思いの外動揺している自分に気付く。

彼に復讐しようと思っていた。微かな期待は勿論あったが、目的は彼に自分と同じ気持ちを味わわせることだ。殺したい訳でもなければ、誰かに殺されて‘ざまあみる’と笑えない。怪我をしたただけでもこんなにも動揺するのか、と自分でおかしくなる。

未練があるのだ。

だから、彼のことを憎くてたまらない。

「おねえちゃん、どこかいたいの？」

不意に声が聞こえレシエは驚いた。

いつの間に来たのか、自分の足元にしゃがみこんで覗き込んでくる子供がいた。

(白い……)

真っ白い髪をしている。こちらを見つめてくる瞳は黒い。

性別が分かりにくいのが、服装から少年だろうと思った。

「いや……大丈夫よ。……君は戦士見習いの子？」

それにしても小さいと思う。

まだ幼霊期の子供だ。ようやく人になり、人の言葉を覚えた程度だろう。この時期の竜は不安定であり、何かあればすぐに竜の姿に戻ってしまうほど人の姿で居ることが難しい。力も弱いため一日の大半を竜の姿で過ごし、母親に守られゆっくり成長していくものだ。だからそんな訳がないのだがついすると戦士見習いであるのかと問いかけてしまった。

小さい。

けれど、少年からは普通ではない気配がした。

少年はにこりと笑う。

「ちがうよ。ぼくは、ばんり」

「ばんり？」

「そう、たえることがない、えいえん」

一瞬子供が何を言っているのか分からなかった。ただその大きな瞳に吸い込まれそうな気分になった。

「ぼくは、おねえちゃんのこと、しってるよ。シエンリイスの、およめさんになるはずだったひと」

「シエンリイスを知っているの？」

「うん。アグラムのおともだち。おおきなうんめいを、もっているひと」

「大きな運命？ 君は星見？」

「ちがうよ、ぼくは、ばんり」

先刻と同じことを少年は繰り返す。

「アアク様！」

不意に女の声が聞こえ、少年は振り返った。

「ノア」

駆け出そうとしたようだったが、おぼつかない足元のせいで少年は転倒する。転倒と同時にその身体が竜の姿へと変化する。子供の竜としても随分小さい。形からアソニア種に見えたが、それにしても小さすぎるし、驚いた事に彼の身体は真っ白だった。

「……白竜」

それは非常に珍しい色だった。

竜としての性しか持たない魔物の類の竜であれば白い竜というのは珍しくはないが、人と竜の両方の性を持つ竜族の中では白い色の竜は非常に珍しい。千年に一匹生まれればいい方と言われるほど数が少ない。色素が薄く白く見えるような竜もいるが、彼の身体は驚くほど白い。

紛れもなく白竜だった。

「心配しましたよ、アアク様」

小さな竜は現れた女に飛びつくと同時に人の姿に戻る。女が彼を抱き上げ、視線をレシエに向ける。

黒髪で綺麗な藤色の目をした小柄な女だった。

「すみません、ご迷惑おかけしましたね」

「いや……。白竜なんて珍しいけれど、あなたの子？」

「いえ、この方は私がお預かりしているだけです」

この方、と言った。

身分の高い人の子と言うことだろう。コラル城にいるような身分であるのだから、とても高い身分なのが想像出来る。伺うように彼女を見ると彼女は少し困ったように微笑んだ。

「すみません、この方に関してはご容赦を」

「何か事情が？」

「少し身体の弱い方ですので」

ちゃんと育つまでは公表すべきではないと考えてのことだろうか。

「貴女は……戦士なの？」

「はい。一応は」

「一応？」

彼女は少年を撫でながら戦士とは見えない顔で微笑む。

「陛下の戦士として集められたうちの一人ではありますが、私には向かないと、陛下にも言われていますので」

「では、陛下の側に？」

「はい。今はそう務めさせて頂いています」

「……ノア殿と言いましたか」

「ノア、とお呼び下さい。見たところ、歳もそう変わりませんので」

「では、ノア、少し伺いたいことがあるのですが……」

その会話が二人の最初の話となった。

レシエはこの会話が後々自分の運命と大きく関わるとは思ってもいなかった。

彼女にシエンリースのことを尋ねると彼女は少し戸惑った様子を見せたが、レシエが元婚約者であると話をすれば、驚いたようにながらも、話は聞いていると気遣うような表情を浮かべた。

会いたいのであれば来て下さい、と言った彼女の言葉に少し躊躇ったが、レシエは彼女に従った。通常ならレシエが入ることも出来ない城の奥の方に彼女は迷いもせずに進んでいく。恐らく身分の高いだらう女官達も彼女の姿を見ると頭を下げ道を譲った。

「……シエンリース様は少し休まれています」
廊下を歩きながらノアは言う。

「では、怪我を負ったというのは」

「本当です。ただ、倒れられたのは怪我が原因ではありません。：

…あの方は時々身体の調子を崩されるんです」

「シエンリースは弱い竜ではありませんでした」

「はい、ですが、少し、働き過ぎのようです」

働き過ぎと言われてレシエは少し笑った。

それならば彼らしい気がする。

「レシエさんはシエンリース様が心配なのですね」

「あ、呼び捨てて構いません。貴方の方が身分も高いはずです」

ふふ、と彼女は声を立てて笑う。

「私のこれは癖のようなものです。……ですが、そうですね、レシエと呼ばせて頂きます。レシエもどうか他の方と同じに思っして下さい。私は先刻のあなたの言葉遣いの方が好きですよ」
柔らかく言われ、レシエは少しホッとす。

「良かった、同じ年頃の人への敬語は慣れなくて……」

「殆どをレミアスの城内で過ごされていたんですものね」
レシエは少し彼女を睨んだ。

「……貴方にそんなことまでシエンリースは話したの？」

「え、あ……いえ」

彼女は慌てたように首を振る。

「ノア、アアクは見つかったかのう」

突然聞こえた声に、今まで黙ってノアに抱きついていた子供がぱつと顔を上げる。

彼は飛び降りるようにノアの腕から離れると少し不安になる足取りで駆けていく。

「へーか」

「おお、どこへ行っておったのじゃ？ 心配しておったのじゃよ」

「あのね、おねえちゃん、さがしにいったの。シエンリースきつとげんきになる！」

「お姉ちゃん？」

訝しげに男は首を傾げてアアクを抱き上げる。

その視線がレシエに注がれた。彼はレシエを見て少し目を細めた。睨まれた訳ではないのに視線を向けられただけで全身が粟立った。それは恐怖とは違う畏怖の念。見ただけでその人物が尋常な強さでないことが分かった。

鋼よりもつと黒く美しい髪を持った男だった。瞳の色は同じように黒い。若いように見えるが、レシエよりずっと年上の竜だった。頑丈そうな身体をしており、アアクを片腕で肩まで上げた。

「なるほどのう、婚約者殿を見つげに言っておったか」

「陛下」

恭しく頭を下げたノアの隣でようやくレシエは膝を折った。

見ただけで、誰であるか気付くべきだった。

「とんだご無礼を、竜王陛下」

「そう畏まることもあるまい。御主はレシエじゃな？ シエンリースより話は聞いておるよ」

言いながら彼はレシエの前にしゃがみ込む。

穏やかな黒い瞳がレシエを見つめていた。

「綺麗にしているとはいえ、土足で歩き回るところじゃよ。戦闘中

ならまだしも女性の服は汚すものではなからう」

「なからう！」

アアクは竜王の肩の上ではしゃぐように声を上げた。

ノアが少し呆れたように息を吐く。

「陛下、口説かないで下さい」

「おや、そう聞こえたかの？ わしはわしの妻以外を口説くつもりはないのじゃが」

くすくすと竜王が笑う。ノアも笑っていた。

「レシエ、どうか立って下さい。そのままでは陛下が話しにくいようですから」

「でも……」

「良いのじゃよ、レシエ。わしは異界育ち故、どうもそう言った習慣には慣れぬのじゃ」

「こちらに居る時間の方が遙かに長いのに、おかしいですね」

軽口を叩くように言うノアにレシエの方がぎくりとした。

だが、竜王は当たり前のように笑う。

「そうじゃのう。わしは順応性というのが足りんようじゃのう」

再び立つように促されて、レシエは戸惑いながらもそれに従った。竜王は戦いの末に竜たちの王となる。この谷の中で最も強い竜と言えるだろう。言葉では説明のしようのない本能で彼が強いのが感じる。堂々とした立ち居をしており、常勝王という二つ名で呼ばれるのが良く分かった。

だが、それにしてもは気易すぎると思った。

竜王が異界育ちなのは有名な話だ。竜王選定の戦いが長引き、荒れていた竜の谷に生まれた彼は、生まれた直後に歪みに巻き込まれ異界に飛ばされたと言う。まだ、幼子であった彼は自力では戻ることとは出来なかった。星見達は幾度目かの選定を行い彼に竜王の兆しを見つけるとすぐに異界から彼を連れ戻した。そしてほんの一年という時が過ぎ、彼は竜王となった。

竜王アスカはそう言う王なのだ。

「レシエはシェンリスを見舞いに来たのじゃろう？ あやつも喜ぶじゃろう」

「ですが……私は婚約を破棄される程嫌われています」

「そのようなことはあるまい。御主が城の戦士になつたと聞いて怪我をしていないかと青くなっておつたよ」

「え……」

「見舞つてやつてくれぬかね？」

優しく言われ、レシエは頷こうとしたがすぐに竜王を睨む。

「陛下はシェンリスを酷使しすぎではありませんか？」

「ん？」

「度々倒れると聞きました。彼は……私の知るシェンリス・レミアスは体力のある若い竜です。それが幾度となく倒れるとあれば貴方が過剰なまでに酷使しているとしか思えません」

無礼を承知で睨み付けるとさすがにノアが青ざめた。

だが、肝心の竜王は驚いた顔でレシエを見ている。

やがて彼は口元を押さえる。

押さえたが間に合わなかったのか彼の口から爆音が漏れた。

「あははははははっ！」

何がそんなにおかしいのか竜王は腹を抱えて蹲つた。アアクはそんな竜王の背中を撫でている。

「どーどー」

「あはは、止めるのじゃ、アアク、笑いが止まらん……！」

「何がそんなにおかしいのですかっ」

強くレシエが言うとうようにやく彼は指先で目尻を拭いながら言う。

「すまん、いや、本当にすまん」

彼は呼吸を整えながらゆっくりと言った。

「先だつて別の者に同じ事で責められたのじゃよ。わしも再三シェンリスには働き過ぎじゃと言つておるのじゃが聞きもせん。殴り倒しても止めると言われたくらいじゃ。一度決めたら頑固なのじゃよ、あやつは」

「別の者とは……ノアですか？」

「いや、ノアはむしろシェンリスと同じで働きすぎじゃよ。……全く、仕事熱心なのはいいが、あまりやられるとわしが気が気ではないよ」

「お言葉ですが陛下、私もシェンリス様も陛下のもんです。必要であれば死ぬように命令して下さっても、死なない程度に酷使して下さい下さっても構わないものです」

『そう言うの好みじゃねえんだよ……大体死なない程度に……』
「ワーカーホリックかつーの」

呆れた様子で竜王は吐き出したが、何と言ったのかレシエには分からなかった。抑揚のない不思議な言語だった。

竜王は息を吐いてノアの頭部を軽く叩いた。優しい愛撫のようだった。

「必要ではない、故に休めと言うておるのじゃ」

「私は十分休ませて頂いています」

「そう言ってたあやつが倒れたのじゃよ。……レシエ、あやつを説教してやってくれぬか？ わしが言っても奴は聞かんからの」

竜王は本当に穏やかな顔で笑って見せた。

案内された寢所は綺麗な場所だった。竜王の庭と呼ばれる大きな庭園と隣接しており、開かれた大きな窓からその風景が覗けた。風通しのいい部屋を歩くと、奥にあるベッドがもぞりと動いた。

どくん、と心臓が跳ね上がる。

あの場所にシエンリスがいる。

レシエの足は一瞬竦んだように動かなくなるが、奮い立たせるように拳で叩くとすんなりと動き始めた。

ベッドに近づくと、男が寝返りをうつ。

鬘と同じ白茶色の柔らかそうな髪が見える。

ぼんやりとした様子で彼が目を開いた。

「れ……しえ？」

名前を呼ばれて息が詰まる。

殺したくない。苦しめたくない。その姿を見れば、今まで憎んでいたことが嘘だったように、だれよりも大切なのだと自覚してしまう。

名前を呼んでは駄目、と思う。名前を呼んでしまえば後戻りが出なくなるから。

けれど、自分の口からは彼の名前がするりとこぼれ落ちる。

「シエンリス……」

誰の名を呼んだ時よりも愛おしく感じる。

大切な人の名前。

かつての婚約者だった男は自分を見て明らかに狼狽したような表情を浮かべたが、すぐに表情を変える。

瞳に蔑むような拒絶するような色が浮かんでいる。

「……何しにここまで来たんだ」

「倒れたと……聞いた」

「君には関係のないことだよ」

「そう……。それでも、私は貴方が心配だった」

シエンリースの顔色は酷く悪い。やせ細っている訳ではないが、やつれているようにさえ見える。

それでも自分に向ける言葉の語調ははっきりとしている。

「そういうの、迷惑なんだ。……出て行ってくれ、顔も見たくない」
「シエンリース」

名前を呼ぶと涙が出た。

どんなに否定しても感じてしまう。やはり自分は彼のことを誰よりも愛おしく思っている。

「貴方が好きなの」

「僕はしつこい女は嫌いだよ。迷惑だって、言っているだろ」

「……愛しているの」

「……出て行ってくれ」

「嫌よ。本当の事、話してくれなきゃ出て行かないわ」
レシエは顔を覆う。

「私のことが嫌いなんて嘘よ」

「嘘じゃない」

「だったら、何で、あんなに優しい目をしたの……？」

「……何のことだ」

「どうして、そんなに辛そうな声してるの？」

「……」

「答えて。でなければ出て行かないわ」

「……」

彼は黙っていた。

自分の嗚咽だけが部屋の中に響く。

やがて、ゆっくりと、彼の手が伸びてきた。

指先がレシエの頬に触れる。

優しく、微かに冷たいシエンリースの手。

「……相変わらず、泣き虫だね」

呟いた彼の声は優しくかった。かつて、幼い頃の自分が好いたあの

頃の少年のように優しい声だった。

見ると彼は少し困った風に眉を曲げて、自分を見ている。その口元は微笑んでいた。

「困ったな……君には嘘が付けない」

「……」

「君のこと嫌いだったのは、嘘だよ」

彼は言う。

「でも君に出て行って欲しいのは本当。君が居ると困るんだ」

「どういう……意味？」

シエンリイスは半身を起こそうとする。苦しそうだった。

反射的にレシエは彼に手を伸ばした。

「寝てていいのに」

「いや、大丈夫。もう、回復する頃だから……」

ふつり、と怒りが湧き出す。

「こんな風にしたのは、あの竜王？ あの人が必要以上に貴方を働かせたから、貴方がこんな風に……っ！」

身を起こしたシエンリイスは首を振った。

よほど消耗しているのだろう。彼にしては珍しく衣服が乱れはだけている事を全く気にする素振りも見せなかった。

「違う。……違うよ、レシエ。これは僕自身が望んだことなんだ。

あの人の‘負担’を少しでも軽くしたいから。僕は、竜王のものだから」

「シエンリイスはものじゃない」

「うん、物だったらもつと良かったかもしれない。物なら遠慮無く陛下も使える。……僕は、リト、なんだ」

「……え？ 占い師？」

「違う。そっちの意味じゃない」

レシエは首を傾げる。

リトは強い占星師の意味で使われる。数多くの星読み、星見たちよりも優れた星読みに与えられる称号だ。王の為に星を読み、王の

為に尽くす、それがリトという号を持つ者の定めだ。

リトという言葉に、他の意味があることなど知らない。

「竜王の為に生まれ、竜王の為に死ぬのが、リト、だよ。今の君にはそれしか教えられない」

「何よ、それ……」

「そう決まっているんだ。秘密であることも、竜王の為にあることも。創世の頃からの決まり。僕は、リト、である以上、他の竜とは違う。君が側にいれば……君が僕の恋人であるなら、君は不幸にかなれない。僕は……それは困るんだ」

「……貴方がいない方が、よっぽど不幸よ」

彼はようやくはだけた衣服を整える。肩口の紐で止めるとレシエの頬を撫でた。

「僕のために、君の人生を使う必要なんてどこにもないんだ。レシエ、僕は君が大切だけど君を選ばない。君が側にいると、苦しんだ」「どうして……!」

シエンリスはただただ優しく微笑む。

「君が、リト、なら分かったかもしれないね」

レシエは近くにあった枕を掴むと彼に叩きつける。

「意味が分からない! 納得出来ない! シエンリスはいつもそうだ。秘密ばかりの、嘘つき、馬鹿、ろくでなし!」

「……うん」

「死ぬまで、諦めないから……!」

「……それは困るよ」

「じゃあ、結婚してくれればいい。私のこと、嫌いじゃないんなら、出来るでしょ!」

「ごめんね、それだけは出来ない」

「じゃあ何で、優しくするのよっ」

愛おしそうに触れてくる彼の手が辛い。

勘違いをしまいそうになる。彼にとって自分が何よりも大切ではないのかと。

「突っぱねても、追い掛けて来たのは君だよ」

「だって……」

涙がこぼれる。

信じたくなかったのだ。だから自分を奮い立たせる理由を作って
追い掛けてきた。シエンリイスは優しい。馬鹿みたいに優しい。そ
の真実を信じたかったのだ。

「君のこと、好きだよ。昔から。あきらめが悪くて可愛い。でも、
君に対する僕の感情は恋じゃない」

シエンリイスは立ち上がると扉を開いて出て行くように促した。

「……お見舞いありがとう、早くレミアスへお帰り、僕の可愛い妹
姫」

部屋を出て、レシエは息を吐いた。

拒絶はされなかった。けれど、実質的に自分は失恋をしたのだらう。涙を拭くと目の奥が痛かった。

（もう、いい、帰ろう）

シエンリイスの言葉通りレミアスへ帰ろう。彼のことを忘れることは出来ないけれど、もう十分な気分だった。

これでいい。

最初から無理な話だったのだ。

「おい、女」

突然呼ばれ振り返り見た光景にぞくりとした。

男が立っていた。退紅色の髪を持つ男だった。瞳は血を含んだような色をしており、鋭い光を帯びている。

全身が強ばったように動かない。

（怖い）

レシエは唾を飲み込んだ。

攻撃を仕掛けられている訳ではない。けれど、死の瞬間に直面してしまったかのように、全身の血が一気に引いてしまったかのように身体が動かない。

この男が、怖い。

「来い」

男の手がレシエの手首を掴んだ。

「な、何だお前は！ 離せっ」

ようやく言葉が漏れた。

「……いいから来い」

男は低く唸るように言う。

逆らえば殺す。

そう言わんばかりの勢いだった。手を乱暴に引っ張られ、レシエ

はうめき声を上げる。

「痛っ……」

男はちらりとだけレシエを見たが何も言わずにぐいぐいと引っ張っていく。有無を言わさない説明すらしらない行動に、不意に怒りが湧き出した。

レシエは乱暴に男の手を振り解いた。

「いいかげんにしろ！ 何なんだお前はっ！」

男が振り返り静かな目でレシエを見た。怒りや苛立ちが浮かんでくるわけでもないのに、何故か射抜かれたような気がして、全身が粟立つのを感じた。

彼は短く言う。

「アソニアのアグラム」

名を聞いて驚く。

「左の翼……」

退紅色の気性の荒い竜だと聞いていた。目の前の男はすぐさま暴れ出すような様子ではなかったが、表情の中に押し込めた激しさは分かる。この人をおいて、他に‘アグラム’を名乗れる者はないだろう。

だが、彼もシェンリスと同様に伏せているのでは無かったのだろうか。

大喧嘩をして怪我を負ったのだと聞いている。ノアの言葉を信じるのであればシェンリスの不調はその怪我が原因ではないらしいが、シェンリスがあれば弱った状況で、この男が平然としている理由が分からない。

それほど強い力を持っているとでもいうのだろうか。

レシエは彼を睨む。

「私はレミアスのレシエだ。私を、何の理由で、どこへ連れて行くとして」

「説明よりも見た方が早い」

「……どうということだ？」

「シエンリースの力になりたいなら来い」

男はそれきり黙って先へと進んでいく。

レシエは少し躊躇った。シエンリースとアグラムは唾み合っているような仲ではないが、度々衝突していると聞く。今回のことも彼が引き金になった可能性を否定出来ない以上。従っていいものか悩んだ。

だが、悩んでいる暇などほとんど無いのが分かる。アグラムを見失えば確認することも、彼の言うように、シエンリースの力になる、事も出来ない。

意を決しレシエは彼の後に付いた。

彼は竜王の庭を通る渡り廊下を通過し、奥の建物へと歩いていく。始終無言のままであり、途中であった竜達も、彼の姿を見るなり軽く頭を下げて道を譲った。レシエは戸惑いながらも彼の背を追い掛ける。

やがて行き止まりへと辿り着く。

何も無い白い壁の前に立つと彼は壁に向かって手をかざした。

それを合図とするように、青白く輝くいくつもの円と線が壁一面を覆い尽くす。円は魔法陣を描き線はそれを繋ぐ小径となった。形を変え、意味を変えながら次々と魔法が解かれていくのが分かった。

(……呪力封印?)

レシエは眉を顰めた。

呪力封印は魔法の力でものを封じる魔術だ。解き方を知る者、若しくは解くための‘鍵’を持つ者でなければ開くことは出来ない。

それが施されていると言うことは、ここには他人には見られたくない、若しくは触れられたくないものがあるということだ。

やがて封印は解き放たれ、壁に入り口が出現をする。

「入れよ」

強引に押し込まれ、レシエは小さく声を上げた。

背後で、再び入り口が魔法によって隠される気配を感じた。

「何を……っ」

抗議の声を上げようとした瞬間レシエの瞳に大きな塊が映る。

横たわったレシエを三人並べても余るほどの大きな塊。

シエンリースの髪と同じ色の、塊。

「これは……」

レシエは数歩それに近づきじつくりと見据える。

「これは、指先……？」

何かによって引きちぎられたような不自然な形で切り取られていく。

「あいつのだ」

アグラムは短く言う。

レシエは彼を睨んだ。

「……これは、お前がやったのか？」

「そうだ、俺が喰いちぎった」

「貴様っ！」

反射的に剣を呼び出すと男に斬り付けた。彼はその場から動こうとさえしなかった。爪だけを本来の姿に戻し、彼女の剣あっけなく受け止めた。

指先から肩までがびりびりと痺れた。

彼は口の端を吊り上げて笑う。

言いしれぬ恐怖がレシエを襲った。

「俺に刃向かうなんていい度胸してやがる」

「っ……！」

本能が、危険を知らせる音を立てる。

レシエは無意識に身を引いた。

攻撃されると思った。

だが、男は何も仕掛けて来なかった。代わりに間延びした声が響く。

「あのさあ、ここって、女の人を連れ込むにはちょっと色気がないと思うよ」

シエンリースの指にもたれ掛かるようにして青年が顔を覗かせる。灰色の巻き毛と、琥珀色の瞳が印象的な青年だった。

アグラムのような恐ろしい印象はないが、弱い印象はまるでなかった。

にこにこ笑いながらこちらを見ていた。

苛立ったようにアグラムが噛み付く。

「うるせえ、ハイノ」

「君だって安静にしてろって陛下に言われたんじゃないの？ それなのに何で女の子ナンパしてきてんの？」

「ナンパじゃねえよ」

「アグラムの仏頂面で落ちる女の子も趣味どうかと思っただけど…
…おわっ、危ないなあ、俺はいいけど、シエンリース傷つけたらどうするのさ」

アグラムによって投げつけられたナイフを受け止めて、彼が抗議の声を上げる。

「はっ、そいつはそんなヤワじゃねえよ」

「知ってるけどさあ」

とんとん、と跳ねるように青年がレシエに近づいてくる。背の高い男だった。顔や表情は軟らかい印象を受けるが、威圧感を覚えてしまうほどの長身であり、立派な体躯もしている。一目でフェリアルトの竜であることが分かるほどの恵まれた体格の男だった。

「……君、レシエだよね？ シエンリースの婚約者だっていう」

「元、婚約者だ。……あんたは」
青年はにこりと笑う。

「俺はフェリアルトのハイノ。シエンリイスの同僚で、現在右と左と両軍管理している隊長さんです」

どうぞよろしくと彼はますます笑みを深くした。おおよそ毒というものを感じられない男だった。

だがその言葉だけで彼がどれだけの実力者かを示しているかのようだった。少なくとも竜王に認められるほどの実力を持った竜なのだ。

「おい、隊長つて言っても俺はすぐに復帰……」

「させないつて陛下が言つてた。やせ我慢もほどほどにだつてさ」

「………っのジジイっ、分かったように言いやがって」

「実際そうだよ。結構消耗しているでしょ。……レシエ、どうせ彼の説明もせずに関連してきたんでしょ？ 本当は後で親書贈つて来て貰う予定だったけど………ま、いいか」

勝手に自分で納得して頷いて彼は続ける。

「俺が代わりに大雑把に説明するよ。見ての通りシエンリイスの指はちぎれている」

レシエは頷く。

先刻は彼の指がなくなっていることに気付かなかつたが、これは紛れもなく竜としてのシエンリイスのものだった。

「アグラムが引きちぎつただけ、それがシエンリイスの為だったつて理解して欲しい」

「……シエンリイスの為？ 喰いちぎることが？」

「これに関しては詳しい説明は出来ないんだけど、アグラムが判断誤つてたらシエンリイスはもういなくなつたと思う。結果的に指一本で済んだつてだけ」

「それは……シエンリイスが‘リト’であることと関係があるのだろうか」

ハイノは驚いたように目を丸くした。

アグラムはますます目つきを鋭くさせた。

「それ、誰から聞いたの？」

「シェンリス本人から。竜王の為に生まれ、竜王の為に死ぬのが、リト」だと。それ以上は教えられないと言われた」

ハイノはホツとしたように息を吐く。

「なるほど……うん、そう、それが関係している。あんまり人に言っちゃ駄目な事だよ。……お願いだから、リト」って何、とか聞かないでね。四方將軍くらいの地位がないとさすがに教える事できない事柄だから」

レシエは頷く。

身分が低ければ明かせないこともあることをレシエだって理解は出来た。ただ、何故それがシェンリスと関わるのかまるで分からない。不穏なものが溜まっていくように、胃の奥が痛む。妙に嫌な予感がした。

「まあ、とにかく、こうしてちぎられちゃった以上、元に戻す事は出来ない。かといってシェンリスほどの竜の一部を簡単に捨てるのもどうかしてるだろ？ 身体から離れてもこれはシェンリスだから」

ハイノは言ってシェンリスの指を見る。

指だけでも随分と巨大だった。これが、シェンリスの本来の姿の一部分。レシエよりも大きな美しい竜。

「剣を作ろうと思うんだ」

「……貴方が、か？」

「さすがに俺一人じゃ無理だけど、陛下に招いて貰うまではフェリアルトの職人通りにいたからね。知り合いがいる。レシエには仕上げを頼みたいんだ」

「仕上げ？」

「名封じ、分かるよね？」

「分かる……けど」

竜の身体の一部で作る剣は特別なものだ。他の鋼や鉱石で作るも

のとは違う。作られた刀身に強い力を持つのだ。そしてそれを収める鞘も強い力を持つものでなくてはならない。銘を入れることが剣に魂を入れ不変の‘形’にする事であれば、鞘に施す名封じはそれを支え、全ての調和の要となるべきもの。剣の形と、持ち主の‘形’をきちんと分かっている人でなければ出来ない事だ。

自分でいいのだろうかと少し戸惑う。

「もちろん、補佐する人は付けるよ。本当は何度もシェンリスとやりあって戦い方を熟知してるアグラムがやる予定だったんだけど……」

ハイノはちらりと彼を見る。

仏頂面の男は不機嫌そうにあさつての方向を向いた。

「……お前のが、適任だろ」

「……って、訳で、白羽の矢が立ったって訳。俺も君の方が適任だと思ってる。俺たちの知らない彼を知っているから」

「だが、私は今のシェンリスを殆ど知らない」

口にして少し嫌な気分になる。

自分が自分の言葉に傷付いた事に気付き、少しおかしくなった。

「知らないからこそ、だよ。ま、根本的にここに来たばかりの時とあんまり変わらないと思うんだけど……」

「……彼は知ってるのか？ その、私がこれを行うことを」

「いや、俺がこれを使うつもりってのも知らないと思う。そもそもアグラムが食べちゃったかと思ってるんじゃないのかな、やりそうだし」

アグラムはハイノを睨め付ける。

「人を勝手に考え無しにすんじゃないよ」

「実際よく考えた上で、そう言うことやるでしょ。無駄にするくらいならその方がいいし、何よりシェンリスの力の一端を手に入れることが出来る」

レシエは眉を顰めた。

力の一端を手に入れる。

竜は死んだ竜の一部を喰らうことで相手の力を手に入れることが出来ると言われている。真実どの程度の力を得られるのかは知らないが、若くして死んだ戦士を弔う際、骨噛みや骨を飾りにする事は頻繁に行われている。そう言った意味で、戦士が戦い傷付き切断された際、その肉を他の竜が喰らった所で咎められることも無いだろうし、そうすることで相手の無念を晴らすことにも成り得る。

非難されることは無いはずだが、それにしてもハイノの言葉が微妙な意味を孕んでいるように聞こえてならなかった。

「一つ、条件を言ってもいいだろうか」

レシエが言うと、ハイノもアグラムも視線を向けてくる。

相変わらずアグラムは厳しい表情を変えなかったが、出会った直後のような恐怖感は不思議と感じなかった。

「何？ 俺の力の及ぶ範囲だったら、何でもしてあげるけど……」

「シエンリスには私が関わったことは伏せて欲しい」

「伏せても、多分分かると思うんだけど……」

レシエは頷く。

当然だ。

自分の使う武器に関わった人が、見知った人であればその気配は嫌でも分かるものだ。気配に敏感なシエンリスが分からない訳がない。

「それでも、伏せて欲しい。私が直接伝えたいんだ」

ハイノが瞬いた。

「……ひよつとして、ここ、まで昇って来るつもり？」

レシエは笑ってみせる。

それが、答えだった。

「私は多分恵まれていたのよ」

レシエは組んだ自分の手を見つめながら言う。時折どこか辛そうに見える彼女の話をもユルナは静かに聞いていた。

シエンリス、ハイノ、アグラム、レシエ。

ここ最近で彼女の話の中に登場した四人の人物がフェリアルトを訪れている。シエンリスに誘われるように。

彼女の話は作り話のようにには思えない。ただ、だからこそ違和感を覚える。彼女の語る、シエンリスの人物像の差に。

「竜王陛下に名前と顔を知られている事は私にとって大きな力になったわ。無論、知り合いと言うだけで重役に起用するほど陛下は単純な人ではないけれど、周囲は私を少なからず特別視した。不当なやつかみもあつたけれど、同程度の実力者なら私を選ぶ上官も多かった。そうして私は実力を付けていった」

彼女とノアが友人関係になっていたのも強みだった。極秘事項を漏らすような人ではなかったが、それでもレシエは情報が速かった。中央の考え方も彼女から学んだ。それもレシエの実力となり、やがて城内深部に入りにするのが普通となった。それは大出世といえるだろう。

「そこで私は赤妃様ともお会いしたの」

「現竜王陛下か」

「ええ、その当時はまだ妃殿下でいらつしやった。……美しく綺麗な方で、到底強い竜に見える方ではなかった。ただ、その魔力というのは半端ではないのは見てすぐにはわかつたわ。戦闘能力ではアスカ王の方が当然上だつたけれど、魔力面では比較にならないのではないかとさえ思つたわ」

彼女は短く言葉を切る。

「……………本来話すべきではない事柄かもしれないけれど、あの方は髪を染めていらした」

「赤妃様はその名を示すような赤い髪の竜だと聞いた」

「そう、赤く染めていらした。……………でも……………赤妃様の本来の髪色は

「金」よ

「まさかつ」

「ミユルナは息を呑む。

竜には金色の髪は生まれえない。それは常識的な事だ。金色の髪は精霊素という魔法要素が蓄積した色である。人間の外面は遺伝的要素が強く魔法要素に左右されるのは稀だが、魔法に近い生き物である竜族は魔法要素の影響が大きい。勿論例外もあるが、髪や瞳の色を見れば相手がどんな魔法を得意とするのか想像が付くほどだった。それだけ魔法要素に左右される竜族にとって金色の髪はあり得ないのだ。精霊素は竜の存在と相性が悪く強すぎると竜の魔力と精霊の魔力は反発し存在すら出来なくなる。生を持った竜が精霊に近づいたからといってどちらかがすぐさま消滅することはあり得ない事ではあったが、大昔人間の世界で大戦が会った時、救済に訪れた迅雷王と当時の精霊王は普段は親しくしたものの大量の魔法要素を消失する戦闘時には出来るだけ近づかなかったと言われる。

黄金に輝く髪が精霊を象徴とするならば、竜に生まれたものの金色の髪はあり得ないことだった。

例外があるとすれば。

レシエは背筋を伸ばし、口調を改めた。

「赤妃様は恐らく黄金竜です」

あり得ない、とミユルナは首を振った。

「精霊族という可能性は」

「飛翔王アスカの即位に関わっているはずだから、少なくとも250年以上谷において、飛翔王の側にいたことになるわ。精霊であれば存在を保てる訳がない」

確かにあり得ない事だ。

250年という途方もない年月を精霊が谷で生きれる訳がない。谷にも大きな影響を及ぼす可能性もある。けれど飛翔王の時代は他に類を見ないほど安定をしていた。

「まして、精霊が竜の子供を産むなどと言うことも考えられない」

「……子供？」

「アアク様よ」

彼女の話の中に会った白竜のことだ。

アスカ王に子供がいたという話は聞かない。ただ、先刻の話のように体が弱く公表を控えていたのなら納得することも出来る。

もし赤妃が精霊であるならば、子供を産むことは出来ないだろう。反発する気配もそうだが、精霊は竜よりもっと魔法に近い存在であり、基本的には実体を持たない。そもそも「子を成す」ことの法則が竜や人のそれとは異なるのだ。

「赤妃様からは確かに竜の気配を感じたわ。だから精霊ではあり得ない。そうなれば、あの方は黄金竜だったとしか言えないわ。……そうでなければ、あの絶大な魔力も、黄金の髪のリ由も説明が付かない」

「……だが、現れないはずだ。黄金竜は創魔期、世界再編の礎となつて以降、根本概念の一部になっているため二度とこの世に現れることはないと言われている存在。存在出来るとなれば根本が揺らぎ底から蘇っていることになる。そうなれば、全てが……」

レシエは頷く。

「全ての‘界’が変革期を迎える」

背筋が寒い。

ミルナは唾を飲み込んだ。

「私たちが四方將軍に選ばれた時、赤妃様は自らその髪を晒され、竜王アスカが居ない今世界の歪みを正せるのは自分しかないのだと仰った。……実際各地で起きた暴動を除き、赤妃様が眠られるまでの谷は安定をしていたわ」

竜の谷の歪みは急激に加速している。それは王の資格のない赤妃

が勝手に王となったからではなく、今まで竜王と赤妃のふたりで支えていた根本の歪みが押さえきれなくなったのではなかるうか。それでも赤妃は歪みを正そうとしてきた。だが、彼女は眠りに就き、そして谷は大きく揺らいた。

「赤妃様を眠らせたのはシェンリイスで間違いない。奴もそれを認めている」

「何故そんなことを？」

「王になるため、と奴は言っていたわ。そして、……………谷を終わらせると」

終わらせる、とミュルナは口の中で呟いた。

「あいつは争い事を好まないような大人しい顔をして、人を騙し、準備を進めていたのよ。……………アスカ王が身罷られたあの日あの時、シェンリイスはあの方の側にいた。恐らくその殺害にも関与している」

「意味が分からない。そんな風にしてまで谷を滅ぼすのが何の意味がある？」

分からない、とレシエは首を振る。

「ただ、記憶喪失と言ってここに留まっているのも演技かもしれぬ。相手の懐に入り込み何かを企んでいるのかも知れない」

「それならばますます納得が出来ない」

ミュルナは頭を大きく振った。

レシエが不思議そうに見返してくる。

「……………先だつてここに一人の竜王候補が来た。彼の微かな記憶からその名をハイノと言うことが分かった」

「……………ハイノ」

「戦い、ハイノを倒し、シェンリイスは泣いていた。おれにはあれが谷を滅ぼそうとしている者の顔にはみえなかった」

「……………貴方は、竜になったあいつの戦い方を見たの？」

「遠方からであったが、少しは」

「悪魔のようだと思わなかった？」

「ミユルナは黙り込む。」

「急所を的確に狙い、鋭い牙で相手を引き裂く。そして絶命してもなお、執拗に食らいつく。……シエンリスが竜となり戦った後には惨殺された死体しか残らないわ。私はあれが彼の本性だと思う」
「ミユルナ達が彼らの元へ駆け付けた時、確かに惨い状態だと思っただ。その傍らで血まみれで倒れている彼の姿には異様なものを感じざるを得なかった。怖いと思ったのも事実だ。的確に、そして確実に相手を仕留めるための戦い方。悪魔のようという形容はあながち間違っているとは言えない。」

ただ、あの涙は本物に見えた。

普段おどおどしてキイスに怒鳴られ怯え泣く涙とは別の種類の涙に見えた。本気で人の死を悼んでいるように見えたのだ。

そう、自分の中にも違和感がある。

惨殺と見えるほどの「殺し方」で戦う彼と、あんな風に涙を流す彼がとても同一人物には思えない。

「奴が竜王になれば谷は滅ぶわ。だから私はあいつを殺さなければいけない。……そう思って来たはずなのに、駄目ね。貴方の言うとおり、私は失敗してしまってほっとしている。あいつを傷つけることも、私の血に全く動揺しないのも怖い。こんな中途半端な状況で戦って、勝てる訳もないのに」

レシエは深く息を吐いて自嘲気味な笑みを浮かべる。

「あいつはやると言ったらどんな手段でも遂行する。……見かけによらず頑固で、曲げないから、だから、私は彼を竜王にしてはいけないと思っている。私はあの時、そう思ったんだ……」

その異変は突然起きたとしか思えなかった。

レシエがキリス・ヴェナと呼ばれはじめ30年ほどが経った頃だった。その日は妙に息苦しいような気配の漂う日だった。

廊下を足早に歩いていると横から声がかかった。

「レシエ」

号で呼ぶことが礼儀ともなるため、昔の仲間でもキリス・ヴェナの名前で呼ぶ者が多い。そのため、姿を確認しなくてもそれが誰なのかはつきりと分かった。

「ハイノか」

レシエは立ち止まりもせずと言う。横に長身で癖毛の男が並んだ。

「どうしたの？ 難しい顔して」

「いや……何か城内の空気がおかしい気がする」

「君も感じてるの？」

「ハイノも？」

うん、と彼は頷く。

「うーん、レシエが感じるってことは、俺たちが感じている変化とはやっぱり別物だよな」

「……………何の話？」

「ちょっとね。……前にもアグラムとも話していたんだけど、竜王陛下が韜晦されてから、変な感覚があってね、それ関連かと思っただけで、ちょっと違うみたい」

「？」

彼は廊下の先を指差す。

「とにかくシエンリスと相談しよう。アグラムも来ているみたいだし」

「あいつが来ているの？」

「うん、多分そう。気配を感じるから」

竜王アスカが突然姿を消したのはレシエがまだ四方將軍では無かった頃だ。全く兆候が見えず突然のとも言える失踪は谷に大きな混乱をもたらした。星見達は新たな王の選定をはじめず、代わりにアスカの妻であった赤妃が王の座に座った。

赤妃によりレシエは南方將軍に選ばれ、王の戦士と呼ばれていた彼らは赤妃の私軍に入った。暫くしてアグラムが西方將軍オーガスタス・グラントの号を受けたものの、彼は数年前に解任され、以降城内から姿を消した。

アグラムが来ているというのが事実であれば、数年ぶりの事だ。この奇妙な空気と言い、彼の行動といい、何か嫌な予感がしてならなかった。

そう、あの時と似ている。

アスカ王が行方を眩ましたあの日に。

「急ごう、シエンリイスは赤妃様の部屋よ」

「うん」

同じ予感をハイノも感じていたのだろう、いつものように穏やかに笑っていたが、その顔には少し緊張の色が浮かんでいた。

急いで走り始めようとした瞬間だった。レシエは頭部に強い痛みを覚えて立ちすくんだ。

「っ……」

「いつ……」

ハイノもまたうめき声を漏らす。

強い魔法の気配。

だが、それは今まで経験してきた魔法とは明らかに違う、異質なもの。

「……今の、なに……?」

問いかけるように言うと、ハイノは首を振った。

「分かんない。シエンリイスみたいだったけど。……大丈夫?」

レシエ

「ああ……でも、シエンリイスって……っ!」

再び強い痛みを覚えた。無遠慮に使われる魔要素、それに伴う魔法での干渉。昏倒しかねない程の激しい痛みが襲ってくる。

ぎりり、とハイノが歯を食いしばる音が聞こえた。

「……俺をあんまり馬鹿にしないでよね、シエンリスっ！」

彼は崩れ落ちそうになりながらも自分の足を強かに殴りつけた。

レシエの腕を自分の肩に回すと厳しい表情のまま叫んだ。

「飛ぶよ、しっかりと捕まっつ！」

「……！」

レシエは彼の肩にしがみつくように力を込めた。瞬間彼の背から翼が生える。ばさりと羽ばたいた一瞬で壁を破壊し、もう一度羽ばたくと彼は高く飛んだ。回転する視界の端で、レシエは自分たちと同じように頭を押さえ蹲る姿をいくつも見つける。

その時、城内にいる全ての竜達が同じような魔法による干渉を受けていた。最初の一回で昏倒何人かが昏倒し、二度目で半数以上が意識を手放した。

ハイノのようにあの状況で翼を広げられる竜などそういなかった。彼は半分は人の姿のまま飛び、竜王の庭までたどり着くと一直線に赤妃の部屋まで飛ぶ。屋根を突き破り、半ば転がり込むように赤妃の部屋へと飛び込んだ。

崩れる屋根の合間に赤妃を抱きかかえるアグラムと、それを静かに見つめるシエンリスの姿があった。赤妃の腕はだらりと垂れ下がり、目は閉じられていた。その顔に表情は浮かんでいない。意識がないのが明白だった。

「……シエンリス！」

誰がその名前を叫んだらうか。

自分ではなかったように思える。

レシエには目の前の光景がまるで理解出来なかった。

「せ、赤妃様！」

すぐさま彼女へ駆け寄ったのはハイノだった。抱きかかえ、蹲っている状態のアグラムから彼女の身体を引き受けると肩を揺すって

目覚めさせようとする。

生きているのか死んでいるのかが分からない。

レシエの身体は硬直していた。

「……息はある」

アグラムが短く言う。

少しホツとするが、彼の表情を見て背筋が凍った。アグラムは真っ直ぐシエンリースを見ている。何の表情も浮かんでいないように見えるが、その奥には激しい憎悪の炎を燃やしていた。

彼に見据えられているシエンリースは冷たい刃のような顔をして見返している。肩で息する彼の腕には強い魔力が宿っており、彼はその腕を抱きかかえていた。

「……てめえ、自分が何をしたのか、わかってんのかよ？」

押し殺したような声。

その問いに、シエンリースは息を整えながら言う。

「他に、方法があつたとは思えないけどね」

「だからって、お前、これじゃあジジイの時と一緒にじゃねえか！」

アグラムは剣を出すと同時に彼に斬り掛かる。シエンリースは厳しい表情のまま剣を出すと彼の攻撃を受け流す。そのまま攻撃に転じたシエンリースの剣を避け、アグラムは大きく舞いながら間合いを取った。

「……相変わらず、喧嘩っ早いね、だからいつも問題起こすんだよ」

「それとコレは関係あるかよ？ ……殺してやるっ、今すぐだっ！」

「駄目だよ、君だつて分かっているだろ？ 僕も、君も、ハイノも、血の匂いに変質している。僕らは‘王候補’に選ばれたんだ」

え、とレシエは赤妃を見る。

自分を見られたと思ったのだろう。都合が悪そうに、ハイノが目を逸らした。

竜王候補が選ばれるのは王が死んだ後のことだ。王の死により星の流れが変わり、星読み達が王候補に告げていくのだ。だが、赤妃はまだ死んでいない。そうアグラムが言ったばかりだ。

「それがどうした？ 星読みの馬鹿連中から耳うちされるまで待ってっーのかよ？」

「違うよ」

彼は笑う。

薄暗い、ぞっとするような顔だった。

悪魔のように恐ろしい、そのくせ、ぞっとするほど綺麗に見えてしまう男の顔だった。

「さっきも僕が王になるって言っただろ？ だから、君が僕を殺すなんて駄目だって言ったんだ」

「寝言は寝てから言えよ、シエンリス。……てめえには、飛びきり上等な悪夢を見せてやる」

アグラムは獰猛に笑った。

「や、止めなよ二人とも！ こんな……何があつたって言うんだよっ！」

「……てめえだつて怒ると思うぜ、ハイノ。こいつ、リトの力を利用して赤妃を‘封印’しやがったんだ」

ハイノは目を見開き、呆然とシエンリスを見つめた。

驚愕を隠せない表情だった。

やや間があつて、ようやく彼は喉の奥から絞り出す。

「……うそ、だよね」

否定して欲しいと言いたげなハイノに、シエンリスは笑う。

「嘘だと思う？」

「……」

「思わないよね、赤妃様がそんな風になられたんだから」

その言葉にハイノは苦痛に満ちた表情を浮かべる。

気を失った赤妃を抱きしめ、ぼろりと涙をこぼした。

「……君は……、君って人は、どこまでっ……！」

シエンリスは笑う。

「ハイノは優しいよね、泣いてくれるんだもん。君とは大違い」

「黙れよ、それとも今すぐ、口をきけねえようにしてやるのか？」

「出来るならやってみなよ」

「上等だ」

「……………双方動くなっ！」

ようやく、レシエは叫んだ。

足元をふらつかせながらも立ち上がる。立てば一気に意識が南方
將軍のものへと戻っていく。

「竜王の庭での殺生は禁じられている。……………シェンリス・レミア
スには赤妃様を害した事に関して聞かせて貰う。戦士として大人し
く従え」

言い放つとシェンリスは肩を竦める。

相変わらず彼の片腕は強い魔力を帯びていた。

彼は少し困ったような‘ふり’をしたような顔で言う。

「ここで捕まっちゃうとちょっと問題かな。仕方ないから少し隠れ
させて貰うよ」

「待てっ、決着はまだ付いて……………」

アグラムが叫び声を上げた瞬間、シェンリスから激しい風と魔
力が吹き出す。

その激しさに圧倒され、レシエは自分の顔を庇った。

(……………転移魔法かっ)

竜の中でも適性のある者が少ない遠くへと移動させる魔法。

まるで自分の力を見せつけるかのように、易々と使い、シェンリ
イスはその場から消え去った。

風が収まると、沈黙だけがその場に残された。時折、瓦礫が崩れ
落ちる音だけが響いている。

言葉が出なかった。

起きたことも、目にしたことまるでも信じられない。混乱か、怒
りか、緊張か、それとも別のものか。身体が何かに揺さぶられるよ
うに震えている。

それは居合わせた全ての人が同じだった。

ただ、黙り込み呆然と彼が消えた方向を見つめている。

「……はっ」

沈黙を破ったのは、アグラムだった。

息を漏らし、その場に蹲り、自分の身体を強く抱きしめる。

「ははははははは……！！！」

地の底から這い出すような笑い声だった。

彼は狂ったように笑いながら、自らの身体に爪を突き立てた。

かきむしられた皮膚は裂け、血が滴り落ちるが、彼は厭わず笑い続けた。目を見開き天を睨み、恐ろしくなるほど激しく笑い続ける。

それは、自らを嗤笑するような高笑いだった。

木々の生い茂る森の中は薄暗くどこか鬱々とした表情を見せる。陰鬱の森を奥へ奥へと歩いてきたアグラムは不意に足を止めた。

辺りに人の気配が無くなって久しいが、追ってくる一つの気配だけは確かに感じていた。異変を察知した鳥や動物の気配は既に無く、虫たちの鳴き声すら聞こえない。

アグラムは振り向いて呼びかけた。

「出てこいよ」

後を付けるように隠れているのに、気配を一向に隠しもしない。挑発するようにわざと隙を見せても襲いかかってくる事もなかった。呼びかけると男が姿を現した。

細い体つきの男で、背は高い。老竜に近い年齢にも見える男だった。癖のある髪は浅い緑色をしており、額には一つ大きな宝石を付けていた。見える瞳の色は左右で違った。

一目でデイギア種と分かる風貌をしていた。

この顔にも気配にも、覚えがあった。

「何の用だ、トランタ・デイギア」

低く言うとは彼は肩を竦めるような動作をする。

「ああ、俺のことを覚えていてくれたんだね」

「デイギア種を忘れる阿呆がどこにいるんだ」

不機嫌に言い放つと彼はくすくすと声を立てて笑う。

特徴的な外見をしているデイギア種に一度でも会ったことがあるのなら忘れる方が難しいだろう。それだけ彼らは奇異の存在と言える。

「アスカ王が亡くなって、狂ったように暴れていたって聞いたよ。赤妃様が眠られてからますます酷くなったとか。街での暴れ振りも酷かったし、話を聞いてくれる所か俺のことも忘れているかもしれ

ないって思ったんだ」

「……」

「久しぶりだね、アグラム。最後に会ったのは君が成竜して間もない頃だったから、随分と前のことだ。……ますます綺麗になったね」

「……気色悪いこと言うんじゃないねえ」

アグラムは盛大に顔を顰めて見せた。

トランタは毒のない顔で笑う。

「いや、戦い方のことだよ。力強くしなやかで、どこかアスカ様を思い出すよ」

「……」

言い回しに苛立ってアグラムは男を睨む。

男はひるみもしなかった。

彼は古竜種だ。故に普通の竜とは違う力を持つ。強いのは確かだが、訓練を積んでいる戦士に敵うような力があるように見えなかった。

そのくせ余裕のある表情が不気味に見えた。

「……セიმ君の片腕だけにしておいてくれたことを礼を言うよ」

セიმと聞いて一瞬誰のことか分からなかったが、先刻戦った男の事だと思い出した。確か小さな子供が彼をそう呼んでいた。セიმという竜は、弱い竜では無かった。人の姿のままでの戦闘だったが、先だって戦った竜王候補の竜よりよほど強いだろうと評価を下していた。彼が王候補だったならそれなりに楽しませてくれたかもしれないと思う。

アグラムは怪訝そうに男を見やる。

「何でてめえが礼を言うんだよ」

「あの子は俺の妹の部下なんだ。死んでしまえば妹が悲しむだろう？だから、片腕だけで見逃してくれてありがとって言ったんだ」
どこまで分かっているのだろうか。

アグラムは男を睨む。

「……あの状況じゃ退くしかねえだろ」

「良かった、本当に見境を無くしている訳じゃないんだね」
「黙れ」

声を出すと同時に男の喉元に向けて剣を突き出す。

鋭い切っ先が僅かに喉に触れていると言うのに、男は平然とアグラムを見つめ返してきた。その表情がアグラムを更に苛立たせる。

アグラムは男に向かって低く言い放つ。

「喚くな、必要な事だけ口にしろ。そんな下らない話の為に俺に近づいたのか？」

「違うよ。忠告しに来たんだ」

「はあ？」

「フェリアルト城下には近づかない方が良い。今回のことで君は子竜殺しの犯人と思われただろう。城下では動きにくいはずだよ」
「そうだ。」

あの男は、自分に対してそう言い放つたのだ。実際に子供の竜が殺されたとして、子供を襲っているアグラムを見れば疑うのも当然だ。だが、当のアグラムにはフェリアルトで子供の竜を殺した覚えがない。あの時痛めつけようとしていた子供も邪魔が入ったせいで傷も付けていない。

そう、子供を痛めつけようとしたのは事実だ。瞳の一個、腕の一本が無くても竜人は生きることが出来る。殺さない程度に痛めつけて、シエンリスに声を聞かせてやろうと思ったのだ。殺すつもりは最初から無かった。

「……ここで何が起きている？」

アグラムが問いかけてから、男が答えるまで少し間があった。

トランタは目を閉じ少し息を整えるように呼吸をすると、静かな口調で言った。

「……子供の竜が殺されたんだよ」

「そんなことは口ぶりで想像が付く」

話せと促すように剣先を喉に当てた。微かに傷付いた喉から血が滴り落ちる。

この男は全てを知っている。

それを肯定するように、男は口元に笑みを浮かべた。

「贅だよ。成童していない子供なら、簡単に殺せるし、何にでも成り得るからね。君が来ることでかき回されるのは少し困るんだ」
アグラムは尋ねる。

「……………お前か？」

「ある意味においては」

「……………っ」

苛立ち半分剣を横に薙ぐと、鮮血が辺りに飛び散った。さすがに男が苦痛の色を見せたが、苛立ったアグラムにとってその表情は追い打ちにしかならなかった。アグラムは男の首を押さえるとその場に薙ぎ倒した。

大地に縫い止めるように男の肩に向かって剣を突き立てる。

「……………ぐあっ」

苦痛に男の顔が歪んだ。身体に備わった本能が抵抗しようともがくがアグラムの爪がもう一方の肩を貫いた。

生暖かい血液がアグラムに向かって噴き出す。

互いの両手が深紅に染まる。

その色が、何よりもむなしく見える。

挑発するようにアグラムは男に囁きかけた。

「なんだ、つまんねえな、少しは抵抗しろよ」

男は苦痛に歪んだ顔でアグラムを見上げる。

それでも、男の口元には笑みが浮かんでいた。

「……………デイギア種を滅ぼす気かい？」

「てめえには妹がいるだろ」

「そうだけど、妹の目はまだ覚めていない」

「……………」

「まあ、もつとも、赤妃様が俺を使えなかったなら、俺の存在は意味が無かったかも知れないけどね」

「つまんねえんだよ、死に損ない」

「抵抗したところで、力で俺が敵う訳がないだろう？」

心からそう思っているのか、ただ抵抗する気が無いことを表現しただけなのか今ひとつ良く分からなかった。

アグラムは男を見下ろして口の端を吊り上げた。

「本気になれよ。古竜なら俺を楽しませるだけの力があるだろ？」

「買いかぶりすぎだよ」

「……古竜を相手に出来るなら、俺は妹の方でもかまわねえんだぜ？」

言つと一瞬彼の瞳に鋭い色が混じった。

だが、その色はすぐに消える。

「妹のことは、あの子自信が決めればいいことだ」

一瞬だけ蘇った戦う本能が僅かの間にかき消され、そして、瞳には濁った色が残る。彼が何を考えているのかは分からない。ただ、その瞳の色は不快だった。

アグラムは同じように濁った色の目を見たことがある。
幾度も、幾度も。

その色はアグラムを苛立たせ、相手は破滅へと向かった。

最初に見たのは、遠い昔、竜王アスカに殺された、自分の兄の目。
「……………っ！」

アグラムは血にまみれた手で拳を作ると力任せに振り下ろした。

拳は男の耳を僅かに掠め、地面へとめり込んだ。

硬い大地の痛みが拳へと伝わる。

男の肩から剣を引き抜き、アグラムは立ち上がった。

殺す価値も、言葉を掛ける価値もない。

ただ冷たく男を睨め付けると踵を返した。

男の声が追い掛けてくる。

「……シエンリスは頃合いを見て、追い出すよ。だから心配は要らない」

「……………」

「だから、この城下のことに手を出さないでくれ。俺が頼みたいの

はそれだけだ」

アグラムは男に何も答えず森の更に奥へと進んでいった。

「そうか、よく分かった」

クウルの状況説明を聞き終わるとキイスはふうと溜息をついて椅子にもたれ掛かった。

「結局その‘アソニアのアグラム’の事に関してはよく分かんねえってことが良く分かった」

「んー、でも、分かったこともあるぜ？」

クウルは少し身を乗り出して兄を見る。

キイスは興味深そうに見返してくる。

「シェンに対してすっげー執着してるってこと」

「それは候補同士なら当然のことだよ」

クウルは首を左右に振る。

「同じ王侯補だから、とかそう言う問題じゃねーの。竜の性分っていうかさ、もともとアソニアの竜って戦うの大好きなの多い訳だろ？ あいつもさ、俺やセイムが反撃した時‘そうこなくっちゃ’みてーに、すっげー楽しそうに笑うんだけどさ、むしろこうパサパサした感じなんだよ」

「パサパサ？」

「うん、目の前に居るのが何だっっていい感じなんだ。自分に刃向かえば反応返すし、楽しそうなんだけど、それ以上にも以下にも思ってない感じ」

あの退紅色の髪の男は血や暴力を楽しむ男だろう。シェンリイスに近づかせないために黙秘を貫こうと彼を睨めば睨む程、楽しげに攻撃的な面を見せた。セイムが攻撃を仕掛けてからはもっと楽しげに、戦えないクウルではなく戦えるセイムだけを見ていた。恐らく男は一方的で圧倒的な暴力よりも相手が噛み付いてくる方が楽しめる性質を持っているのだ。

だが、彼のセイムに対する態度はたくさんある遊び道具のうちの

一つという程度の認識に見えた。もしセイムがあの場合を放棄して逃げ出しても、追い掛けて留めを差すような事もしなかっただろう。クウルを庇ってセイムが自分の腕を諦めた時、男は急激に興味を失ったように見えた。駆け付けたカリアを見て呆れたような苦笑いを浮かべあつさりと退いた。本当に何かに執着しているようには見えなかった。

だが、シエンリースの話をした時の彼の態度は違う。

「強い執着心つてーの？ 俺を見てるのに、俺を見てネエ感じでシエンのこと話すんだ。記憶無くす前も、多分シエンつてあんななんだつたんだろうな。知り合いの俺に何かあつたらシエンが動くつての分かつていて、それで俺に危害を加えようとしたんだ」

キイスは眉を顰めた。

「……？ ちよつとまで、じゃあ、そのアグラムは子竜殺しの犯人じゃねえつてことにならないか？」

「なるよ。俺は確かに襲われたんだけど、前の子襲つたのあいっじやない」

クウルが襲われたのはシエンリースの匂いがしたからだ。本人も匂いがするから、と言つたのだ。だから、クウルが大人しく自分の寝室で寝てシエンリースの匂いを付けていなければ襲われなかったということになる。

餌にするつもりだったのだろう。

アグラムはシエンリースがこの領都のどこかに居ることは分かっているようだった。シエンリースに助けを求めてクウルが彼を呼びに行けば何もされなかっただろう。でも、クウルはそれを拒んだ。だから、痛めつけて明らかに誰かに襲われたという痕跡を残すことでシエンリースに自分が居ることを知らせようとしたのだろう。

男は、クウルが痛めつけられればシエンリースが出てくることを知っていたように思えた。

「いきなり俺みたいになチ襲うとか、町中で平気で戦闘するとか、戦士の腕を平気で切り落とすとか、すっげー頭おかしい奴だつて思

うんだよ。暴力で興奮して、あぶねー奴とも思うんだ。でも、子供殺して楽しむような奴に見えなかった。心当たりないってなら、多分それが本当なんだ」

襲われた時、子童殺しの話を思い出したのは事実だった。

実際あの場で殺されると思った。

でも、セイムに庇われながら男を見て、冷静になった今振り返れば、何か違和感を覚えるのだ。前に殺された子供が、彼にとって殺さなければならぬような事情があったならまだしも、意味もなく襲って楽しんだようには思えない。

狂ったように見えて、男は至極冷静だったように思える。

「あいつの目的はシエンだけだよ」

「……二人とも候補で生き残ってんなら、いつかは戦わなければいけない相手だが、お前を使ってまで無理に呼び出す必要性ってのがあったのか？」

「だから、執着してんだって。候補とか多分関係ないんだ。シエンの残り香に反応するとかどんな変態なんだよって域で」

「確かにまあ、それは執着しすぎだな。どう考えても」

キイスは困ったように頭を掻く。

「だが、だとすれば、近いうちに同じような事が起きる可能性もあるな」

「んー、どうだろ」

クウルは言葉を切って、少し考え込む。

セイムの腕を切断した後、カリアを見て呆れたような苦笑いを浮かべた彼を思い出すと再び城下で同じ事を起こすとは思えなかった。

「……なあ、キイス」

「お兄様と呼べ」

「キイスさ、カリアってどんな人か知ってる？」

「どんなって、カリアはカリアだろ」

「母さんの友人で、俺の恩人で、うちの女官長ってのは知ってる。

ルネールの竜つても見れば分かるから知ってる。でもさ、あいつ、

カリア見た時に言ったんだ。何かに呆れたような変な苦笑してさ小声だったけど、おい、冗談じゃねえぞ、って」

「……………冗談じゃねえ？」

「そ、変だろ？ 援軍が山ほどきたり、劣勢になったりするんら分かるけど、来たのはカリア一人。女の人に手をあげない主義の人とかいるけどさ、あいつ中央で強くて偉い竜だったわけだろ？ だから俺としては女の人だろうが子供だろうが、必要なら排除してきたタイプの竜だ、って思うんだ」

「そうだな。俺もそう思う」

「でもカリア見て、冗談じゃねえって言ったんだ。怯えているとか、そう言うのとは違うけど……………そうだな、何でコイツがこんな所にいるんだよ、って感じだった」

「……………」

「少なくともカリアはあいつにそんな風に言われる竜なんだ。セイムの斬られた腕だ、つくつけちゃうし……………」

キイスは肩を竦める。

「カリアは会ったことあるって言ってたが……………俺たちが思っている以上にカリアが中央じゃ有名な教師だった可能性はあるな。優秀なのは確かだし、そんな中央にいてもおかしくないような人が、領都とはいえフェリアルトにいるってのが不思議だっただけじゃねえのか？」

「そんなもんかな」

「そんなもんだろ」

言い切ったキイスに違和感を覚え、クウルは怪訝そうに眉を顰めた。

とってつけたような説明が彼らしくない気がした。

「……………キイス俺に何か隠し事してねえ？」

「んあ？ してるように見えるか？」

「見えるからきいてんの。俺に聞かせられねえようなコト？」

秘密をもたれるのは気持ちの良いことではないが、聞いてはいけ

ない類のことがあるのは承知している。だが、その秘密がキイスを苦しめたり、危険にさらされるようなものだったらクウルは知らないでいたことを後悔するだろう。

キイスは笑ってクウルの頭を撫でる。

「ばーか、そんなんじやねえよ。ミウルナとも話してたんだが、俺ら身内として一緒に居る奴のこと何も知らな過ぎるって思ってたな」「ら、ってトランタのことも?」

「そうだ。あいつもカリアもここに来る前のことはあんましゃべりたがらねえし、俺らも必要ないから聞かなかった。……身内だからこそ、ちゃんと聞いとかねえとまづいこともあんだよな」

「あれこれ想像して物事言つより、カリア達に直接聞いた方が速えーってこと?」

「まあ、そう言うことだ。……取りあえず、俺はトランタの所に行ってくるつもりだ。お前は どうする?」

トランタの話も興味はあった。

だが、クウルは首を左右に振った。

「俺、シエンのそばにいるよ」

キイスが街に出れば普段ならば気さくに話しかけてくる者も多いが、町中での度重なる戦闘や屋敷の方で起こった異変を感じているのか、キイスが歩いていても声をかけるものは少なかった。

或いはキイスが声を掛けるのを躊躇われるほどに苛立ちを見せていたせいもあるかもしれない。この領主代理が人前で怒ることは珍しい話ではないのだが、寄せ付けないほど苛立ちを露わにしているのは珍しいことだった。

苛立ちの原因は本人がよく分かっていることだった。

セイムの腕が切断されたことや、自分が身内のことを何も知らなかったことも要員の一つだったが、自分を最大に苛立たせているものはそれではない。

キイスはトランタの店のドアを開け中へと入る。

「トランタ、いるか？」

普段ならばキイスが近づいてきた時点で店に立ち出迎える為に待っているような男だったが、彼の姿が見えない。修復の仕事に没頭でもしているのだろうかと声を掛けてみたが、返答が戻ってこない。

「トランタ？」

呼びかけた時、奥の部屋で物音がした。

勝手の知っている場所だ。キイスは遠慮無しで奥の部屋へと進む。

微かに感じた匂いにキイスは眉を顰めた。

(……血の、匂い?)

嫌な感覚だった。

自分の血に続いてセイムの血の匂いを嗅いでいる。そのせいで鼻がおかしくなっただかと思いたかった。

だが、感じるのには確かに彼の、

「……おや、キイス」

扉を開いて飛び込んだ友人の姿にキイスは絶句した。

トランタは奥の扉の近くで蹲っていた。その両肩は血にまみれ、衣服も酷く乱れていた。額は汗に濡れ、苦痛の色を浮かべながらも微笑んでいる彼の姿に、キイスは自分の血が沸騰するのを感じた。

「……誰だ！」

「ん？ 何の話を……」

「お前に、そんな怪我をさせたのは誰だ！」

煮えるような激しい怒り。

ただの怪我ではない。明らかに誰かとの戦闘で付いた傷だった。傷付いたが彼の妹だったならもつと冷静だっただろう。ミウルナだからいいという訳ではないが、彼女は戦士であり戦いに身を置く者だ。セイムがそうであったように時に自分の身を犠牲にして何かを守ることもあるだろう。それが戦士としての誇りであり、戦う決意をしたのであれば傷を負う覚悟も自分と相手の命に関わる覚悟も持っている。

トランタが戦士であればここまで激昂しなかった。

竜は戦士でなくとも戦う本能を持っている。だが、訓練をしている者とそうでない者とは圧倒的な差がある。彼がいくらデイギア種という特殊な種族であっても、戦士として訓練した者が相手なら敵う訳がないのだ。

「これは、俺が挑発したからいけないんだよ」

「……俺はお前に怪我させたのは誰かって聞いているんだっ！」

「や、見かけほど酷い怪我じゃないんだよ、ほら、平気だ」

トランタはおかしそうに笑って立ち上がる。

だが、血を多く失っているのだろう。立ち上がった瞬間青ざめた彼はすぐに力を失いその場に崩れ落ちる。

キイスは彼を支えた。

「……この馬鹿っ」

「馬鹿は酷い。うちの領主さんはホント口が悪いなあ」

「言ってる場合かよ。……ベッドまで運ぼう」

「や、肩を貸してくれ。キイスにお姫様抱っこされたなんて知った

ら俺の可愛い妹が憤死するから」

「ミユルナはそんなことで怒るような奴じゃねえだろ」
言いながらもキイスは彼に肩を貸した。

肩を貸されてようやく歩けるといふ風の彼は、ベッドに腰を降ろすと苦痛の声を漏らした。

「……深いのか？」

「や、本当にそんな酷くは……」

「脱げ」

「おや、手負いの俺を襲うつもりかい？ おかしいな、俺の親友殿はそう言った方面の趣味は無かったは……」

「脱げ、トランタ」

「……」

低く唸るように言うと、トランタは苦笑って血まみれの上着を引きちぎるように脱ぎ捨てた。

彼の両肩には傷があった。

片側は剣のようなもので貫かれた跡であり、もう片側は鋭く長い爪のようなもので貫かれた跡だった。どちらも貫通しており、爪のようなもので貫かれた跡の方が程度が酷かった。

(……急所は外れているな)

触って確かめると彼は痛みを訴えるように呻いたが、止めることはしなかった。

一時的に苦痛のため手を動かすのは難しいだろうが、傷が塞がれば支障のないように動くだろう。骨も腱も傷付いている様子はなかった。両肩共に同じように大事な所を避けて貫かれている。偶然そこを通せたなら奇跡だろう。明らかに手慣れた者の仕業だった。

「……誰にやられた？」

キイスは彼の目を覗き込む。

「本当に俺がいけないんだ。頼むから俺の敵討ちとか馬鹿な事だけは考えないでくれ」

「トランタ」

促すように声を上げると、彼は観念したように息を吐く。

「……セイムの腕を切り落とした男だよ」

「っ！」

キイスは目を開く。

「悪い、そのタオルと、桶に水を頼む」

「あ、ああ……」

言われてキイスは真新しいタオルと水を彼の近くまで運ぶ。タオルを濡らして軽く絞ると、彼の肩口を拭ってやる。傷口は塞がってこそ無かった血は止まっているようだった。

「……お前、まさか追ったのか？」

「まあ、結果的にはそうなるね」

彼はあっさりと頷く。

「……カリア女史には聞いたかい？ 彼はアソニアのアグラムと言う男だ。先代の西方將軍であり、アスカ王の戦士で左の翼とまで呼ばれた男だ。気性の荒い竜で血と争い事を好むような男だ」

まるで見て知っているというような口ぶりだ。

キイスは怪訝そうに問う。

「知り合いなのか？」

「これでもアスカ王に城内出入りを許されていた身分だからね。彼とも何度か会ったことがある。……多分、君の所にいる‘シェンリース’という子も、俺は知ってる」

血の付いたタオルを洗い、今度は少し固く絞って再び彼の肩を拭く。

「なら、何故言わなかった？」

「言っている暇が無かったんだよ。彼がシェンリースだと知ったのはつい最近だからね」

それもそうだ、とキイスは思う。

クウルが彼を拾ってから暫く経つが、その間子竜殺しの件や彼の素姓の件でキイスも色々慌ただしくここを訪れている暇もなかった。彼の本名が‘シェンリース・レミアス’であり、竜王候補と分かつ

たのはつい昨日のことだ。ミウルナから話は聞いていたのだろうが、彼女も忙しく、込み入った話は出来なかったのだろう。そして、今回のようなことになってしまった。

「アグラムはアスカ王が身罷られてから少しおかしくなったって噂を聞いていたんだ。だからまだちゃんと話し合えるのかを確認したかったんだけど……この有様だ。……ああ、その右から二番目の薬を頼む」

「……ああ」

言われた通り薬を棚から出すと、彼に手渡した。キイスは同じ棚から新しい布を勝手に取り出し、勝手に引き裂いて包帯を作りはじめる。

「彼はまともじゃない。話が全く出来ない訳じゃないけれど、理性的とは言えない。キイスも噂くらい聞いてるだろう？ 王候補は市井に名前まではつきり公表される訳ではないけれど、元西方將軍であるとかアソニアの竜であるとか、彼の噂は特出しているから」

確かに噂を聞いていた。

竜王候補の一人に勢いのある者がいると。その彼がいずれは竜王になるのではと噂を聞いていた。噂の領域だった為にな名前や立場まではつきり記憶していた訳ではないが、アソニアに勢いのある竜がいると聞いた覚えがあった。

それがアグラムであり、同じ候補であるシエンリスを追ってフェリアルトまで来たのだ。そして、何の因果かセイムの腕を落とし、トランタを負傷させた。

「……彼がフェリアルトに来たのは、多分シエンリスを追ってきたんだろうね。彼も竜王候補なのだろう？」

「……ああ」

「悪いことは言わない。早く彼を屋敷から出した方がいい」

「だが……」

「キイスも思わなかった訳じゃないだろう？ 今このフェリアルトで起きていることの渦中に彼の存在があるって」

「……」

指摘されてキイスは唇を強く噛んだ。

それが苛立ちの元凶だ。

気の弱い弟が増えたみたいだと思ったのだ。一度面倒を見た以上、せめて記憶が戻るまでの間は面倒をみようと思っていた。だが、彼が来なければ少なくともハイノという竜が城下で暴れることも、クウルが襲われセイムが負傷することも無かったと思ってしまうのだ。

そんな自分が酷く腹立たしい。

「一度、彼と話をさせてくれないか？」

「……あいつに、出てけとでも言うつもりか？」

そんなことはない、とトランタは首を振る。

「そうじゃないよ。ただ、記憶を取り戻す為にちょっとだけ協力出来るかもしれないと思ってね。まあ、もう少し傷が塞がってからのことだけだね」

言われてキイスは頷く。

「分かった、シエンに話をしてみる」

「うん、お願いするよ」

言って彼は片手を上げる。傷口に薬が塗り込まれ、後は包帯を巻くだけになっていた。

キイスは彼の腕を手にとると、傷を塞ぐように包帯を巻きはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2337s/>

眠れる竜の寓話

2011年10月7日03時23分発行